



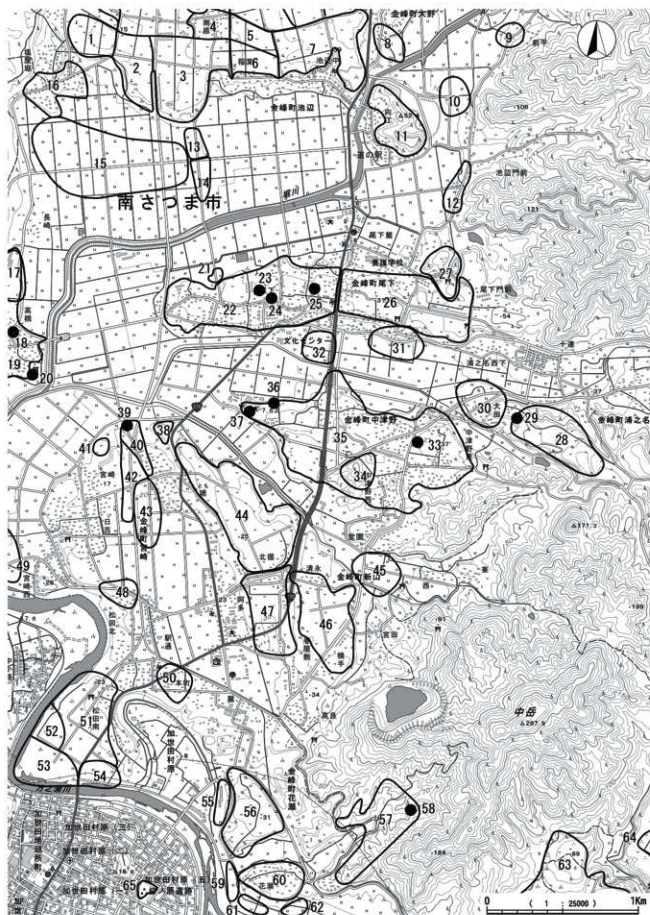
第3図 中津野遺跡周辺地形分類図 (縮尺任意・鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変)



第4図 上空から見た中津野遺跡周辺地形 1974～1978年頃 (国土画像情報国土交通省より)

第1表 国道270号関連遺跡の一覧表

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要						
					時代	主な遺構	主な遺物				
1	南下	南さつま市金峰町 尾下 低地・低湿地	H18年度 H19年度 H19年度 終了	H24年度 H24年度 H24年度 発行 熊々(157)	縄文		石鏃、二次加工製片、石核、台石、敲石、石臼				
					弥生		入来式土器				
					古墳	柄列	中津野式、東原式、辻堂原式、音貫式、丸底厚形土器、杵形土器、鉢形土器、円形土器、高坪、土師瓶、須恵瓶、木製品				
					古代		土師瓶、須恵瓶、滑石製品				
					中世		土師瓶、青磁、白磁、青白磁、青花				
古墳時代を中心とした遺跡である。2条の柄列に伴い、木製品(組み合わせ二又鍬等)が出土している。木製品群は、基本的に弥生時代後期から古墳時代における木製品群の発達・変遷過程の中に位置づけられ、在地色の強い三又鍬も出土している。また「ナスピリ」については、重積した状態で出土しており、本県で初めてのもとなった。											
2	中津野	南さつま市金峰町 中津野 台地 低地・低湿地	H18年度 H19年度 H20年度 H21年度 H22年度 H23年度 H29年度 終了	H24年度 H26年度 R1年度 発行 熊々(202)	旧石器	礫器、土坑	ナイフ型石鏃、スクレイパー、石鏃、石核				
					縄文早期		土器				
					縄文前期	集石	古田式、平形式、打製石鏃、二次加工製片、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石				
					縄文前期	集石、土器集中	管燧式、深溝式、多環文土器				
					縄文中期		春日式、船元式				
					縄文後期	集石、土坑、石核製作跡	指管式、松山式、市来式、西平式、打製石鏃、異形石鏃、石鏃、スクレイパー、石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、礫器、石臼、舟形磨石製品				
					縄文晩期		土器				
					弥生	懸穴住居跡	高橋式、入来式、石鏃、スクレイパー				
					古墳		成川式、埴輪土器				
					古代		土師瓶、須恵瓶				
					中近世	掘立柱建物跡、土坑、埴輪、溝状遺構、古遺跡	土師瓶、白磁、青磁、古瓦、青花、薩摩焼、陶器、磁器、磁石				
					旧石器時代の礫器や、縄文時代早期～後期の集石、石核製作跡、弥生時代前期の懸穴住居跡、中近世の掘立柱建物跡や埴輪等、当時の生活をうかがえる遺構を出土した。特に縄文時代前期の土器集中をなす多環文土器や縄文時代中期に該当する全面に縄文を施す土器、5つの山伏突起をもつ土器などがほぼ完全形で出土している。						
					縄文早期		壺ノ神式土器				
					縄文前期		管燧式、轟式				
					縄文中期		春日式、筒式				
					縄文後期	集石、土坑、埋設土器、遺物集中、集積遺構、特殊遺構	磨石土器、岩錐土器、南郷寺式土器、出水式土器、指管式土器、松山式土器、市来式土器、丸尾式土器、円盤形土器、土製品、打製石鏃、石鏃、尖頭器、異形石鏃、石鏃、スクレイパー、石核、磨製石斧、磨石、打製石斧、磨石、石臼、台石、磨石製品、石製品				
					縄文晩期		成川式				
					弥生	懸穴建物跡、集石、土坑、埴輪、溝状遺構、柱穴、ピット、足跡、土木遺構	夜日式土器、刺目原等文土器、高橋式土器、板付式土器、入来式土器、管玉、磨製石鏃、石筥丁、石鏃、柱穴片石斧、木製品(板敷板・榎子・鹿角)				
					古墳		成川式土器(中津野式土器・東原式土器)、木製品(舟形製品)				
					古代		土師瓶、須恵瓶、白磁				
中世	掘立柱建物跡、土坑、埴輪、溝状遺構、柱穴、ピット、足跡、土木遺構	土師瓶、青磁、白磁、青花、古瀬戸、備前焼、常滑焼、東洋系須恵瓶、柳万文産須恵瓶、瓦質土器、木製品(舟、縄、曲物)、石鏃、磁石									
近世		薩摩焼、肥前産染付、木製品(舟)									
時代不明	土坑、柱穴	鉄製品、鉄斧									
縄文時代後期の集石、埋設土器、土器集中、加工製石出土、弥生時代前期の懸穴建物跡、土坑、中近世の掘立柱建物跡や埴輪等、土木遺構等の当時の生活をうかがえる遺構を出土した。 また、縄文時代後期～近世までの古時代の土器や石器などが出土した。特に縄文時代後期の指管式土器や市来式土器、弥生時代前期の刺目原等文土器は多量に出土しており、土器型式を考えると重要な資料となる。また、弥生時代に該当する船材の一部(板敷板)が出土しており、当時の外部との交流や船の構造を考える上で、貴重な資料である。											
3	小中郷	南さつま市金峰町 宮崎 赤状台地	H11年度 H12年度 H16年度 終了	H20年度 発行 熊々(142)	縄文晩期	土坑	土器、石鏃				
					古墳	懸穴住居跡	土器				
					古代	溝状遺構、掘立柱建物跡、懸穴建物跡、坑土、土坑	土師瓶、須恵瓶				
古代の遺構群がまとまって検出された。											
4	市瀬	南さつま市金峰町 宮崎 赤状台地	H10年度 終了	H20年度 発行 熊々(142)	古代～中世	柱穴					
					古代から中世の柱穴が検出された。						



第5図 周辺遺跡地図

第2表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡台帳 番号	遺跡名	所在地	地形	石垣	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	220	321	小堀	南さつま市金峰町池辺	台地			●	●			平成11年 遺跡分布調査
2	220	323	地領堀	南さつま市金峰町池辺	台地			●	●			平成11年 遺跡分布調査
3	220	301	玉岡堀	南さつま市金峰町池辺	台地			●		●		平成10年 遺跡分布調査
4	220	206	南高A	南さつま市金峰町大野	台地		●					
5	220	326	南原外堀	南さつま市金峰町大野	台地			●	●			平成11年 遺跡分布調査
6	220	324	宮堀	南さつま市金峰町池辺	台地			●	●			平成11年 遺跡分布調査
7	220	325	源口	南さつま市金峰町大野	台地			●	●			平成11年 遺跡分布調査
8	220	317	寺下	南さつま市金峰町大野	台地					●		平成11年 遺跡分布調査
9	220	315	本寺	南さつま市金峰町大野	台地							平成11年 遺跡分布調査
10	220	314	墓ノ前	南さつま市金峰町池辺	平地		●					平成11年 遺跡分布調査
11	220	224	麻礼ヶ塚跡	南さつま市金峰町池辺	丘陵					●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)、中世城跡跡
12	220	313	宮ノ前	南さつま市金峰町池辺	平地		●		●			平成11年 遺跡分布調査
13	220	300	稲塚下	南さつま市金峰町池辺	平地				●			平成10年 遺跡分布調査
14	220	299	稲田	南さつま市金峰町高橋	平地				●			平成10年 遺跡分布調査
15	220	319	高取	南さつま市金峰町高橋	台地			●				平成11年 遺跡分布調査
16	220	320	藤ノ上	南さつま市金峰町池辺	台地			●				平成11年 遺跡分布調査
17	220	236	早田城跡	南さつま市金峰町高橋	平地						●	
18	220	214	下小池	南さつま市金峰町高橋	平地				●			『鹿児島考古』11号
19	220	330	高橋	南さつま市金峰町高橋	平地							
20	220	213	南橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	台地			●				『九州考古学』18号
21	220	296	藤田	南さつま市金峰町尾下	台地					●		
22	220	215	尾下	南さつま市金峰町尾下	丘陵			●				
23	220	216	松木臺	南さつま市金峰町尾下	台地			●				
24	220	211	山形原	南さつま市金峰町尾下	台地	●	●	●	●	●		『鹿児島考古』第14号、「鹿児島大学」第29号 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) (7)
25	220	236	豊満園	南さつま市金峰町尾下	台地			●	●			金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
26	220	251	田布施	南さつま市金峰町尾下	台地					●		平成12年 分布調査
27	220	225	龜ヶ岡城跡	南さつま市金峰町尾下	台地							相州藤津家友・善久・忠勝 岡城跡
28	220	127	上床城跡	南さつま市金峰町尾下	台地	●	●	●	●			南さつま市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)、上床氏 居城跡
29	220	220	上床原	南さつま市金峰町中津野	台地	●	●	●				
30	220	111	貝曲り	南さつま市金峰町中津野	台地			●	●			平成11年 遺跡分布調査
31	220	217	筆付	南さつま市金峰町尾下	平地			●	●	●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
32	220	329	南下	南さつま市金峰町尾下	平地			●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(157)
33	220	237	上山野	南さつま市金峰町中津野	台地							金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
34	220	230	中津野城跡	南さつま市金峰町中津野	台地					●		
35	220	218	中津野	南さつま市金峰町中津野	台地～ 低地	●	●	●	●	●	●	本報告書、鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(202) 『鹿児島県考古学』古学紀要』2号
36	220	241	平地	南さつま市金峰町中津野	台地		●	●	●			平成10年 発掘調査
37	220	222	中津野下原	南さつま市金峰町中津野	台地		●	●	●			
38	220	205	阿多貝塚	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●				金峰町埋蔵文化財調査報告書(1)
39	220	243	廻川貝塚	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●				『鹿児島考古』第10号
40	220	210	上焼田	南さつま市金峰町宮崎	台地	●	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
41	220	209	天神原	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●			
42	220	208	下堀	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●			金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
43	220	262	上花立	南さつま市金峰町宮崎	台地							
44	220	272	西立石原	南さつま市金峰町宮崎	台地					●		
45	220	310	三反田	南さつま市金峰町新山	台地							平成11年 遺跡分布調査
46	220	309	立野原	南さつま市金峰町新山	台地			●	●			平成11年 遺跡分布調査
47	220	240	小中原	南さつま市金峰町新山	台地	●	●	●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(57)
48	220	308	白糸原	南さつま市金峰町新山	台地		●	●	●			鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(86)
49	220	264	上川原	南さつま市金峰町宮崎	平地			●	●			
50	220	273	市原	南さつま市金峰町宮崎	台地		●					
51	220	248	松田原	南さつま市金峰町宮崎	台地		●					
52	220	327	持松松	南さつま市金峰町宮崎	平地		●	●	●			鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120) 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
53	220	277	遺地	南さつま市金峰町宮崎	平地							鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(151) (159)
54	220	278	芝原	南さつま市金峰町宮崎	平地			●	●			鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(149) (158) (170) (178)
55	220	297	大迫田	南さつま市金峰町花瀬	平地					●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
56	220	245	花瀬今城原	南さつま市金峰町花瀬	台地							金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
57	220	244	中岳山麓古 家跡群	南さつま市金峰町花瀬	山地				●			平成27-28、29年度 鹿児島大学発掘調査 古文化遺産(14) (15) 中岳山麓家跡群の研究(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター-2015、3)
58	220	223	狹平古家跡	南さつま市金峰町花瀬	山地							
59	220	296	森山	南さつま市金峰町花瀬	平地							平成12年 発掘調査
60	220	246	花瀬	南さつま市金峰町花瀬	台地			●	●			
61	220	295	上水尻	南さつま市金峰町花瀬	台地			●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(113) (121) (136) (150)
62	220	294	上水尻B	南さつま市金峰町花瀬	台地	●	●	●	●			金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
63	220	255	宇治野原	南さつま市金峰町白川	台地		●	●	●			金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
64	220	305	白龍野原	南さつま市金峰町白川	台地		●	●	●			金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
65	220	13	藤ノ上	南さつま市加世田村原	台地	●	●	●	●	●		国指定史跡、加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) (5) (15) (17) (20)

## 第3章 調査の方法と層序

### 第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記載する。

#### 1 発掘調査の方法

中津野遺跡低地・低湿地部の調査は、平成18～21、25～29年度に確認調査及び本調査を実施した。調査面積は累計で42,370㎡であった。

本遺跡の調査区割り(グリッド)は、平成18年度の確認調査及び本調査において、工用基準杭(センター杭)Na154～Na185を結ぶ直線を基準に10×10mの調査区割り(グリッド)を設定した(第6図参照)。

その後、調査範囲が長大で、調査期間が長期に亘ったため、年度ごとで座標値の原点が異なる事態が発生した。座標値の整合性をとるために、低地・低湿地部はA・B-29・30区境を原点(0, 0)として、縦軸をX、横軸をYとし整理作業を行った。なお、29区から南は一座標として観察表等に記載している。センター杭及び座標値原点(0, 0)の位置は、第6図に記しているのを参照して欲しい。

発掘調査は基本的に重機で表土や攪乱層を除去した後、確認調査の結果に基づき、人力にて遺物包含層の掘り下げを行った。遺構は移植ゴテ等の遺構調査に適した道具を使用して慎重に調査し、実測、写真撮影等を行い、平板とトータルステーションを使用して位置とレベルを記録し、小破片はグリッドごと一括して取り上げた。

また、低地・低湿地は湧水の影響及び安全対策等で調査区内と外の境には、1～2m安全帯を残した。

各年度の発掘調査方法及び概要は以下のとおりである。なお、概要は第1章日誌抄等に記載してあるので、参照していただきたい。

平成18年度はD-19・20区にトレンチを1本設定し、確認調査を行った。遺物包含層が確認されたため、本調査が必要であること、さらに遺跡が北へ広がることを確認し、当該年度の調査を終了した。

平成19年度は7本のトレンチを設定し、確認調査を行った。確認調査の結果、古墳時代から古代の遺構・遺物と、近世の遺物が発見されたため、Z-F-2～7区の本調査を行った。また、縄文時代から近世の包含層が確認された3・4トレンチを含むZ-E-8～12区は、次年度の調査対象とした。

平成20年度は平成19年度の確認調査の結果を受け、Z-E-8～12区、表面積約2,000㎡の本調査を行った。調査は、古墳時代から近世の包含層を対象とした。

平成21年度は、表面積約1,280㎡を対象に本調査を行った。縄文時代から近世の包含層を対象とした。遺物量が

非常に多かったため、10mグリッドをさらに4分割し、層位ごとを一括で取り上げを行った。D・E-12～15区を中心に縄文時代後期の遺物が多量に出土したために調査を終了することが困難となった。平成21年度に終了できなかった範囲(約150㎡)については、道路下部分の調査時に併せて実施することとした。

平成25年度は、B-E-24～29区、表面積1,300㎡の本調査を行った。調査は、縄文時代後期から近世の包含層を対象とした。

平成26年度は、D-F-6～11区、表面積790㎡の本調査を行った。おびただしい数の縦杭や横木が検出され、実測等に時間を費やしたため、調査は近世から近代の包含層までを対象とした。

平成27年度は、B-E-21～23区、表面積820㎡の本調査を行った。調査は、縄文時代後期から近世の包含層を対象とした。

平成28年度は、B-E-12区、D-E-13～15区、B・C-16区、B-D-29区の4つの調査区、表面積500㎡の本調査を行った。B-E-12区の市道の一部分とD-E-13～15区は、縄文時代後期から近世の包含層を対象に行った。B-D-29区の市道部分は、弥生時代から中世の包含層を対象に行った。B・C-16区は平成21年度に確認調査を実施しているが、その未調査部分との境が不明瞭であったため、Ⅱ層まで掘り下げて境の検出を行った。

平成29年度はD-F-6～11区、B-F-11～13区、D・E-12～15区、B-E-15～21区、B-E-22・23区の5つの調査区、表面積4,000㎡の本調査を行った。D-F-6～11区は、平成26年度調査の継続として調査を進め、縄文時代後期から中世までの包含層を対象とした。B-F-11～13区は、平成28年度に調査を行った市道部分の全面調査を行った。縄文時代後期から中世の包含層を対象とした。D・E-12～15区は平成21年度の継続部分の調査を行い、縄文時代後期から中世を対象とした。B-E-15～21区とB-E-22・23区は、共に縄文時代前期から近世の包含層を対象として調査を行った。調査終了後に引き渡しを行い、9年に及ぶ本遺跡の調査を全て終了した。

#### 2 遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

##### (1) 遺構の認定

検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、調査担当者で検討した上で遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

堅穴住居跡は、埋土や形状、床面の有無、遺物の出土などから総合的に判断した。溝状遺構は、底面に硬化面を有するもの、硬化面はないが溝状に明らかな掘り込みをもつものとしたが、湧水のため床面の状況が十分掴めなかったものもあった。土坑及び柱穴については、埋土や形状、床面の有無、遺物の出土などから総合的に判断した。検出面や埋土の状況で大まかな時期の判断はできたが、埋土の色調の違いや時期の違う遺物が混在するものについては、詳細な時期判定ができなかった。また、掘立柱建物跡の時期認定は、埋土の状況や出土遺物の状況を総合的に検討した。なお、発掘調査時の認定を整理作業の際に再度検討して、遺構の認定や時期を変更したものもある。

## (2) 遺構の検出方法

遺構の検出及び調査方法として、当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。特に、黒色土に掘り込まれた遺構埋土が黒色系になることが多い中近世の遺構については、掘り過ぎるものもあり「検出面からの深さ」にばらつきがあったので、調査のあり方を再検討し、今後の調査に生かしていきたい。また、攪乱や削平を受けている箇所が多く、中世の遺構でも表土直下で検出されることもあり、遺構の時期認定に手間取り、調査の進捗に支障をきたすこともあった。この場合、ミニトレンチの設定、攪乱部分の埋土除去等最善の調査方法を調査担当で検討し、遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

## 3 整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

水洗作業の方法は、土器や石器の一部に関しては、ブラシを用いたが、黒曜石や剥片石器は超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は、水洗い終了後順次行なった。注記を行う際、薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまでに刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり、遺跡名を表す記号を「ナカツ」とした。その後に出土区、層、取り上げ番号等が記してある。作業の効率化を図るためにジェットマーカーを用いて注記した遺物もある。

分類・接合作業は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土土器については、土器の胎土や文様等で時期ごとに分別し、接合する方法をとった。

石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため、実測委託を行った。

遺物出土分布図は、平板で取り上げたものをデータとして取り込み、トータルステーションで取り上げたデータと統合し、図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は、実測図や写真等を用いて、発掘

調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。また、必要に応じて第2原因を作成した。遺構配置図は、個々の遺構の再検討で確定したものを統合して作成した。

土層断面や遺構の原因データの点検・修正後、デジタルトレースを行った。

平成24年度……水洗い・注記・遺物分類接合

平成26年度……水洗い・注記・遺物分類接合

平成30年度……水洗い・注記・遺物分類接合・図面整理

・台帳整理

令和元（平成31）年度……遺物分類・接合・遺物実測・拓本・トレース

令和2年度……遺物実測・拓本・トレース・遺物分類・

図面整理・文章作成・近世～縄文時代晩期種本作成

令和3年度……遺物実測・拓本・トレース・写真撮影・

文章作成・報告書作成

## 第2節 層序

本遺跡は、金峰山中岳の北西麓から伸びる標高約30mの舌状を呈する中津野台地・河岸段丘と境川の河川氾濫により形成された沖積地に位置する。

基本層序は、地形に沿って台地・河岸段丘と低地・低湿地部の2つに大別した。本報告書は低地・低湿地部の調査成果を掲載することから基本層序も低地・低湿地部のみとした。台地部の層序については、「中津野遺跡台地部編」を参照いただきたい。

低地・低湿地部は、土層の堆積状況や遺物の出土状況から、さらに3つに分かれる。低地部は、調査区南側の15区から29区に該当する。主としてⅡ層が近世・中世・古代・古墳時代・弥生時代、Ⅲ層からⅣ層が縄文時代後期の遺物包含層である。Ⅱ層は幅広い時代の遺物を包含するが、湧水の影響や近現代の攪乱・削平等のため細かい分層は困難であった。なお、近世から弥生時代にかけての遺構・遺物は、ほぼ同一レベルで検出・確認されている。

低湿地部は、層序をさらに2分した。調査区の北側の2区から11区では、表層直下に粘質土と泥炭層が確認されている。このⅡ層では近世から弥生時代の遺物が確認されているが、その数は少ない。また、足跡・土土遺構の遺構が確認されたのは、この区域である。

調査区の中央部、11区から15区も同じく低湿地部であるが、Ⅱ層が近世から弥生時代、Ⅲ層が縄文時代後期の遺物包含層であることを確認した。この区域のⅡ層も湧水の影響等で細分が困難であった。Ⅲ層は、主にⅢa層で松山式土器と市来式土器が出土し、Ⅲb層で指宿式土器の出土があったため分層をおこなった。

なお、包含層や遺構・遺物の年代を把握する上で手がかりの一つとなる火山灰層は第3表のとおりである。

第3表 中津野遺跡低地部・低湿地部基本層序

低地(15~29区)		低湿地(11~15区)		低湿地(2~11区)	
I	表土	I	表土	I	表土
II	暗褐色~黒色土 近世~ 縄文時代晩期	II	黒褐色土 近世~ 縄文時代晩期	II a	灰~黒灰色粘質土 近世~古墳時代
				II b	泥灰層 古墳時代~ 縄文時代晩期
III	茶褐色~黒色土 縄文時代後期 ~早期	III a	黒褐色粘質土 III b 黒褐色砂質土 縄文時代後期 ~早期	II c	青灰色土
				III	泥灰層
III a	黄褐色火山灰土 (アカホヤ二次堆積土)	III b	灰黄褐色~に赤い黄褐色土 (シルト質) (アカホヤ火山灰)	III c	網掛け包含層
III b	黄褐色火山灰土 (アカホヤ火山灰)				
V	褐色土				
VI	黒褐色土+暗褐色土				
VII	褐色土(沙ヨコ層)				
		VII	シラス堆積		



D-28・29区西壁



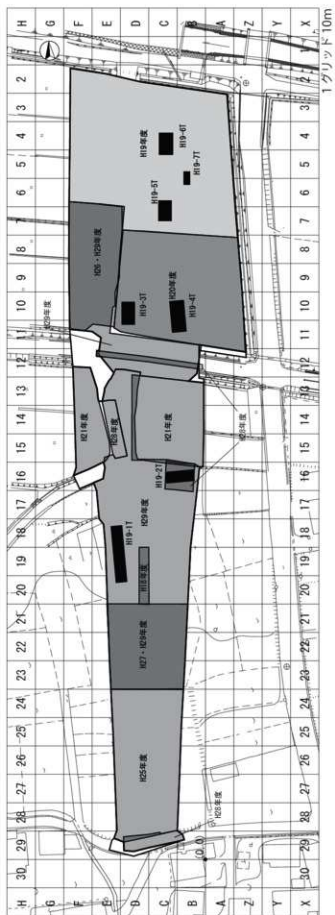
E-19~21区西壁



F-10区西壁

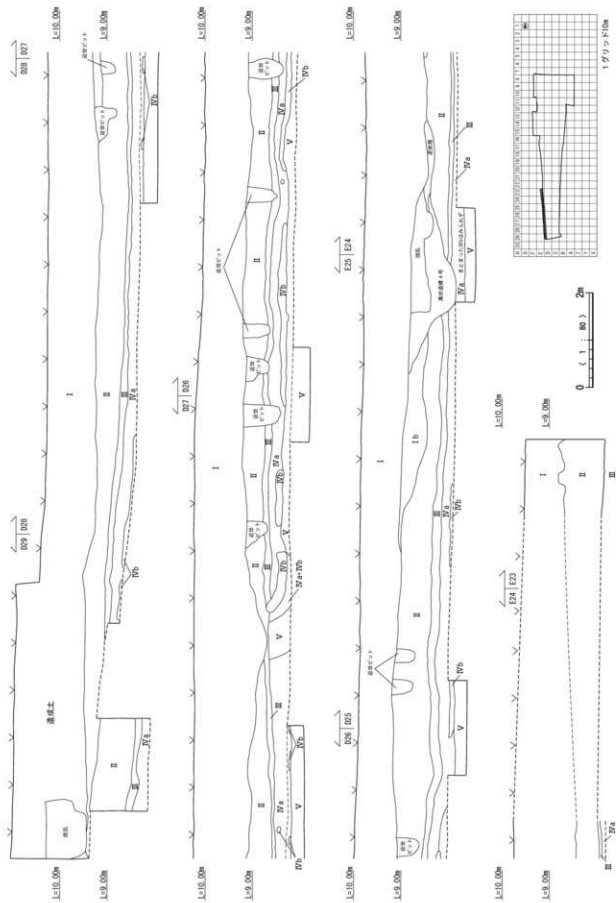


E-8~9区西壁

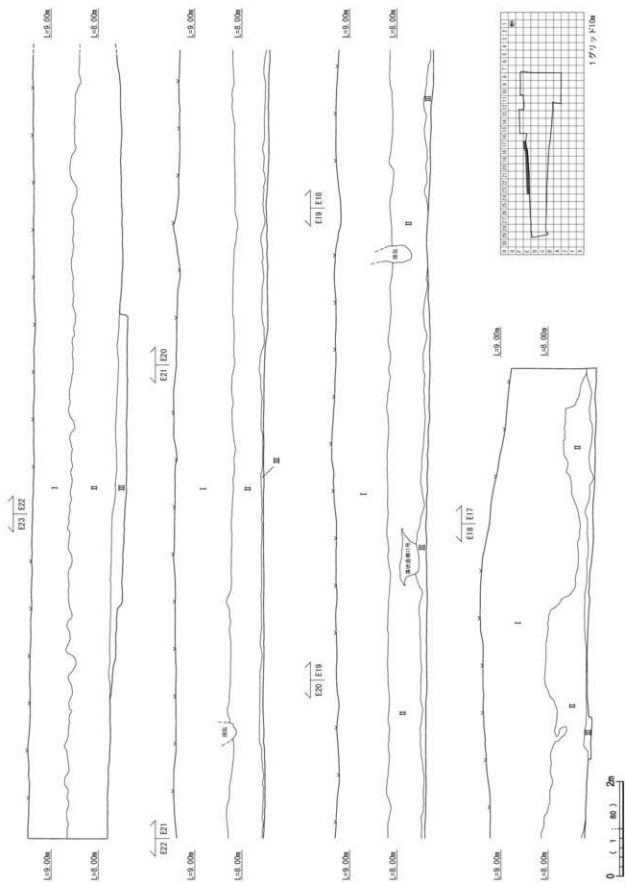


第6図 低地・低湿地部調査範囲



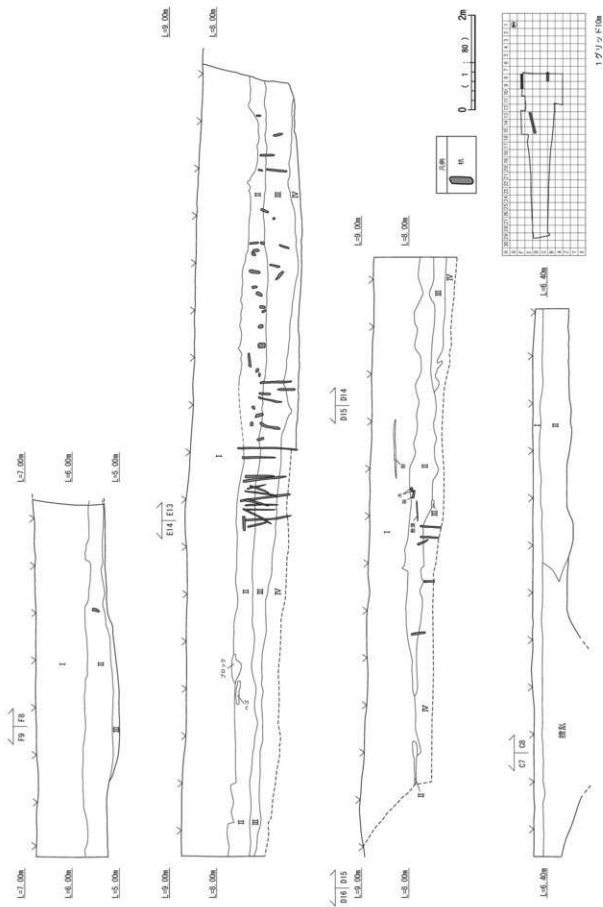


第7図 土層断面図(1) D-25~29区・E-23~25区

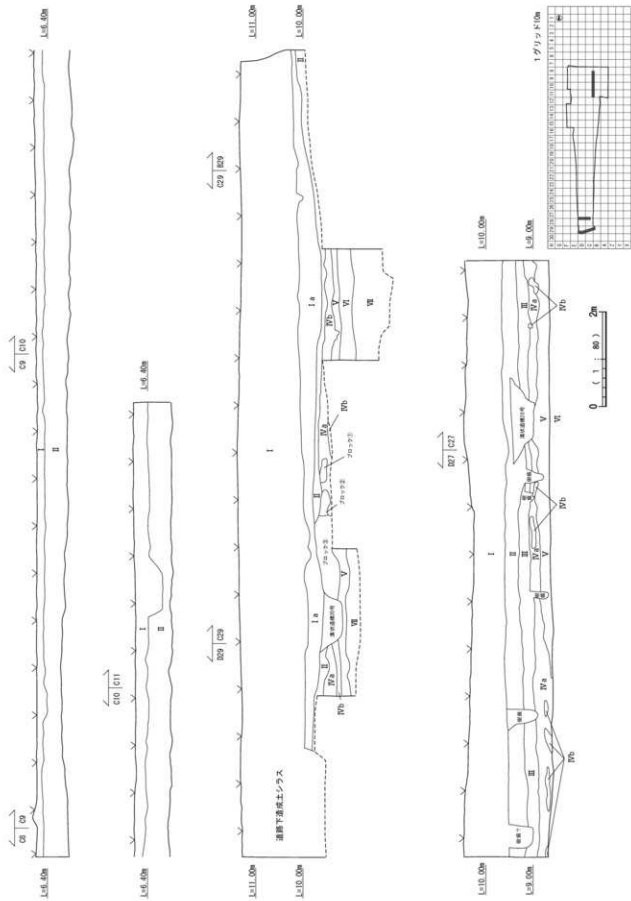


第8図 土層断面図(2) E-17~23区

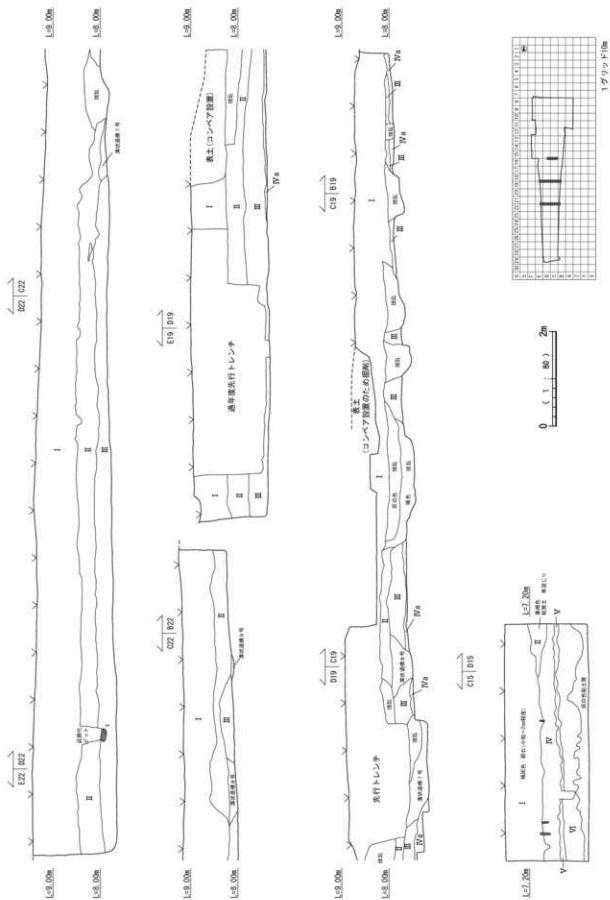




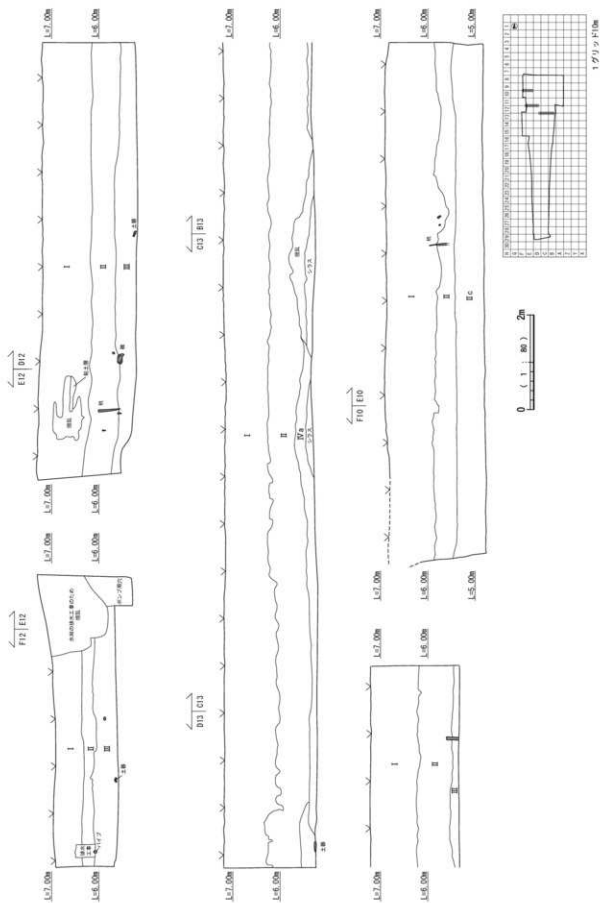
第10図 土層断面図(4) F-8・9区・E-13~15区・E-7・8区



第11図 土層断面図(5) C-8~11区・B-D-27~29区



第12図 土層断面図(6) B~E-22区・B~E-19区・C~D-15区



第13図 土層断面図(7) E~F-12区・D~E-12区・B~D-13区・E~F-10区

## 第4章 古代～近世の調査

### 第1節 遺構

調査はだまかに15区から29区にかけてを低地部、7区から15区にかけてを低湿地部と分けて実施した。調査区全域において近代以降の攪乱や土地改変による削平が多く見られ、発掘調査の進捗に支障をきたした。同じ時期の遺構であっても攪乱等の影響で検出できる層位が異なり、残存状況が極端に悪いものも見られた。そのため、遺構検出や遺構の時期を特定する作業にかなりの時間を要した。遺構の時期認定には、検出層位・遺構の埋土・遺構内から出土した遺物・遺構の切り合い関係を判断材料とした。

低地部においては掘立柱建物跡7棟、柱穴5基、ピット1,019基、灰跡2基、土坑13基、溝状遺構19条が基本的にⅡ層で検出された。ただ、15区の南端からさらに北東方向へ延びると考えられた溝状遺構7号は、15区南端で湧水のため検出が不可能となった。15区以北にも他の遺構が残存していた可能性はあるが、同様の理由で確認できなかった。低地部で検出された遺構の埋土は基本的に褐色から黒褐色を呈し、低地部基本層序のⅡ層に近い。Ⅱ層は、縄文時代晩期から近世までの遺物包含層である。しかし、包含層から縄文時代晩期から古代の遺物の出土が少なく、遺構内からも縄文時代晩期から古代の遺物の出土を確認できなかったことから、Ⅱ層検出の遺構は中世もしくは近世と判断した。ピットについては15区から29区にかけて数多く検出されているが、Ⅲ層以下で検出されたピットは先述のとおり攪乱等による影響で、検出された層位で時期を特定することはできなかった。そのため、Ⅲ層以下で検出されたピットも本章で一括して取り扱うこととした。

低湿地部の7区から15区にかけてと低地部北端にあたる16・17区のⅡ層から足跡・土木遺構が多数検出された。低湿地部基本層序のⅡ層は中・近世に比定され、また、検出された杭の年代測定からもこの時期の数値が示されていることから低湿地部の遺構は中世及び近世を主体とすると考えられる。

以上のようにⅡ層検出の遺構やⅡ層に近い埋土をもつ遺構は、中世及び近世に属する可能性が高い。しかし、埋土内から遺物が出土しない遺構や放射性炭素年代測定を行ってもさらなる細分はできない遺構もあり、明確な時期を区分できなかった。従ってこれらの遺構の時期は「中・近世」とし、中世及び近世に属する遺構を一括して取り扱った。

なお、遺構配置図は第14～17図に示した。以下、低地部の遺構から順に記述する。

#### 1 掘立柱建物跡(第14図)

7棟の掘立柱建物跡は、平成25年度の調査で低地部の南端にあたる26区から28区の範囲にまとまって検出された。全てⅡ層検出、標高9mから9.5m付近の検出であった。柱穴の埋土は、暗褐色土を主体とする。

7棟の掘立柱建物跡のうち、長軸を略南北とするものが2棟、略東西とするものが5棟である。また、想定も含めて、総柱が3棟であった。時期については4・7号が出土遺物から近世、その他は中・近世とする。なお、各掘立柱建物跡の項で記述している柱穴の長径・短径・深さの平均値は、小数第二位を四捨五入して記載してある。各掘立柱建物跡の柱穴計測表はまとめて第4表に示した。

##### 掘立柱建物跡1号(第18図)

D-28区のⅡ層で検出され、一部27区に及ぶ。S2°Wを長軸とする2間×3間の総柱と考えられるが、北東隅と南東隅の柱穴は確認できなかった。梁行約500cm、桁行約690cmと考えられる。柱穴の形状はほぼ円形で、平均して長径36.7cm、短径33.7cm、深さ37.6cmを測る。p9の底面から10cm大の礫が確認された。

##### 掘立柱建物跡2号(第19図)

C-28区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡1号の東側約7mに位置する。S76°Wを長軸とする2間×2間の建物で、平面形は長方形を呈する。梁行(p1-p3)208cm、桁行(p3-p8)405cmを測る。柱穴の形状はほぼ円形で、平均して、長径20.9cm、短径18.5cm、深さ17.4cmであった。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

##### 掘立柱建物跡3号(第20図)

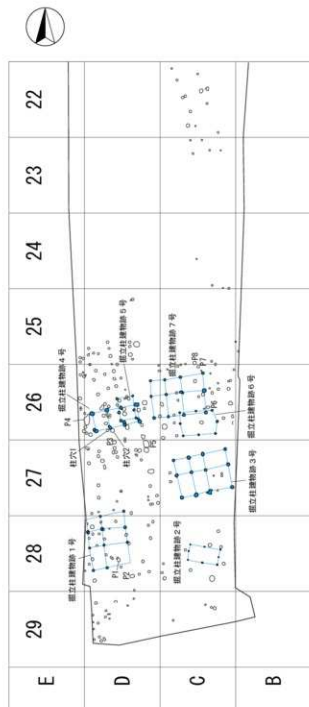
C-27区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡2号から北側へ6～7mの距離にある。S97°Wを長軸とする2間×3間の総柱で、平面形は長方形を呈する。梁行(p1-p3)513cm、桁行(p3-p12)701cmを測る。柱穴の形状は円形もしくは方形に近い円形であるが、不定形のものもある。柱穴は平均して長径47.3cm、短径41.3cm、深さ45.1cmであった。7棟の掘立柱建物跡の中で最も規模が大きい。

p3から16世紀に比定できる青花の口縁部片と備前焼の小片が出土した。p4からは近世陶器片を確認したが、小片のため図化しなかった。

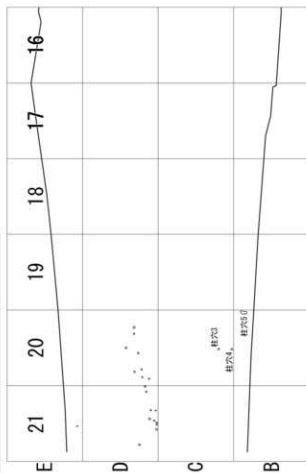
##### 掘立柱建物跡4号(第19図)

D-26区のⅡ層で検出した。S96°Wを長軸とする1間×3間の建物である。梁行(p1-p2)221cm、桁行(p2-p8)585cmを測る。柱穴の形状は不定形なものが多く、平均して長径66cm、短径39cm、深さ70.5cm



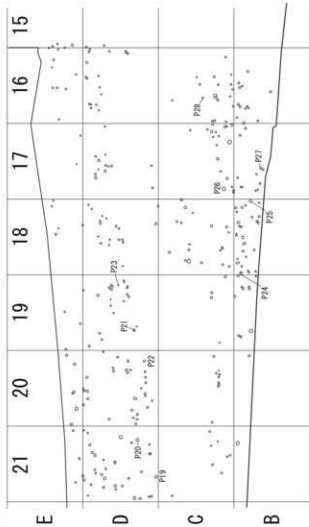
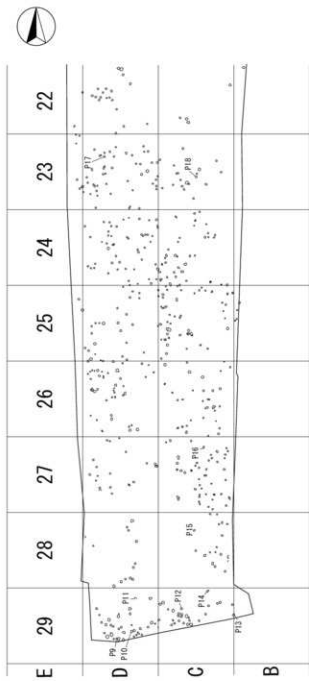


縄文晚期～弥生前期包含出土土器分布図

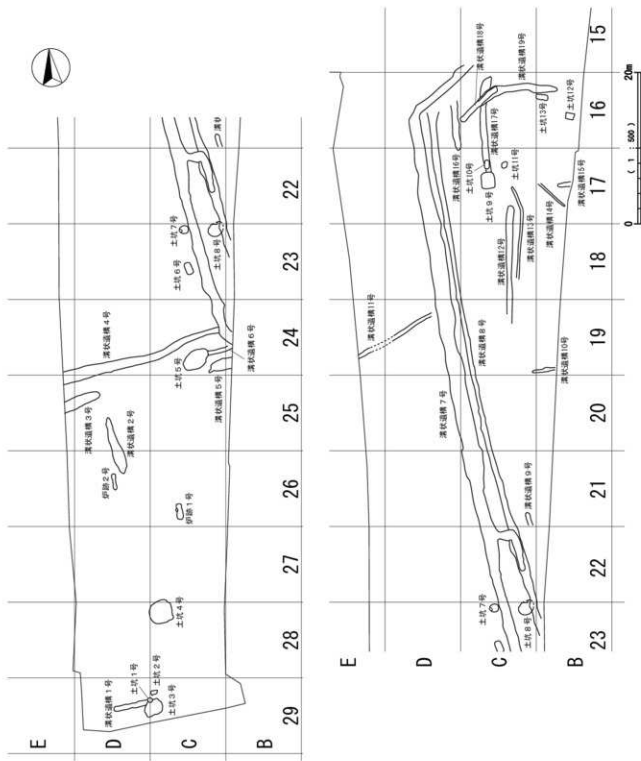


0 ( 1 : 500 ) 20m

第14図 独立柱建物跡・柱穴・ピット(II層)配置図



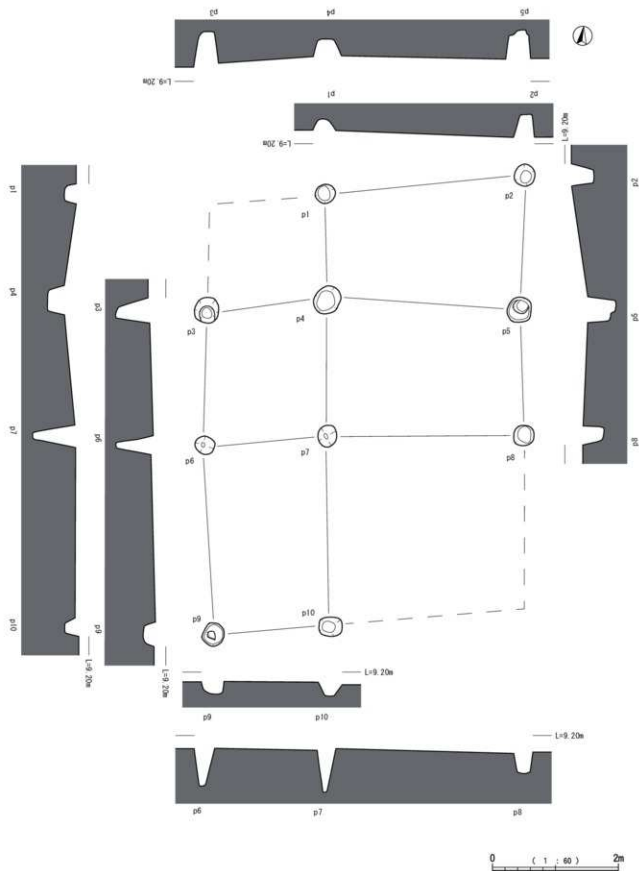
第15図 ビット(皿層以下検出)配置図



第16圖 炉跡・土坑・溝状遺構配置圖

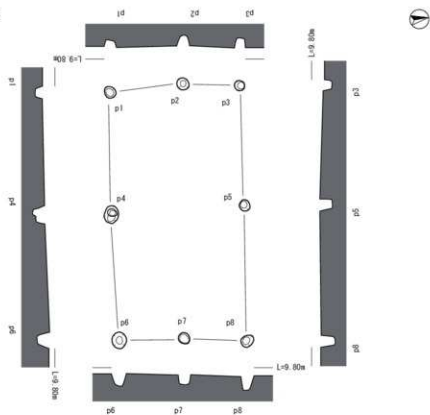


第17圖 足跡・土木構配置圖

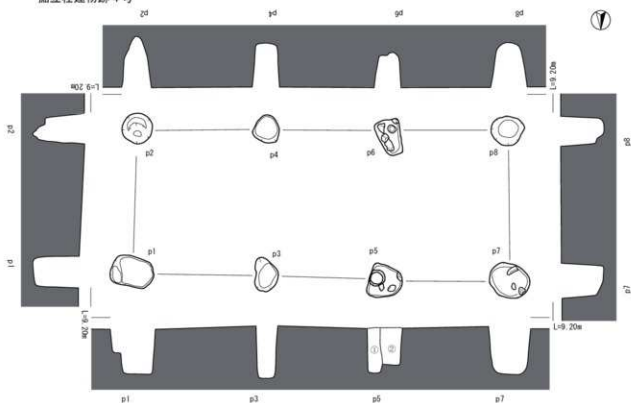


第18图 据立柱建物跡1号

掘立柱建物跡 2号



掘立柱建物跡 4号

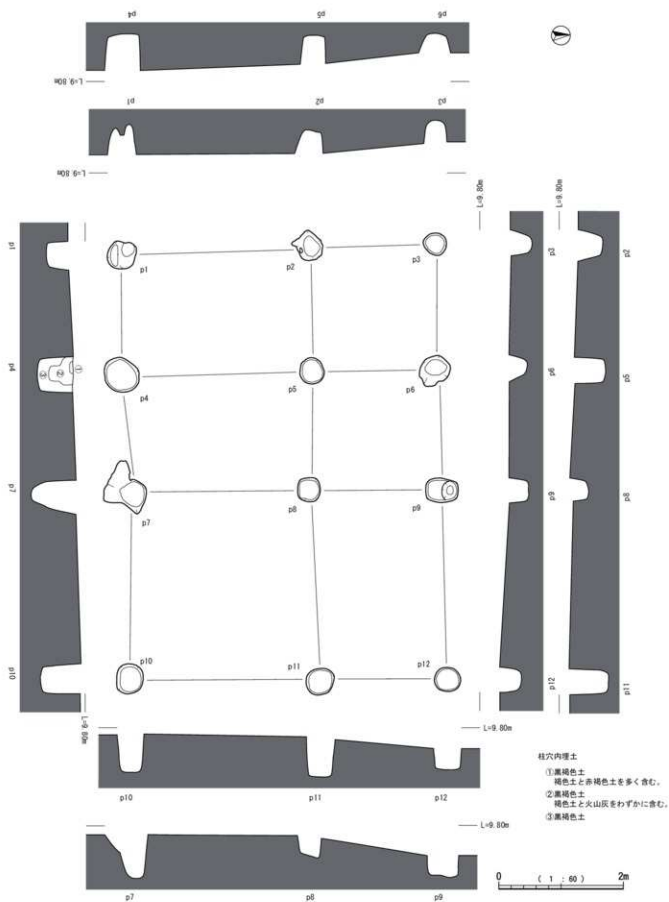


柱穴内埋土

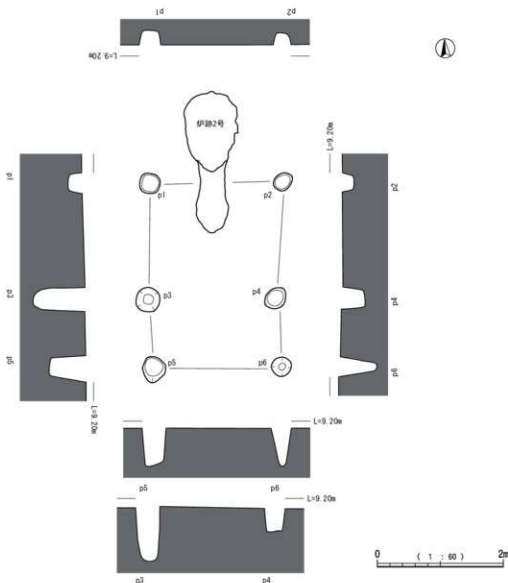
- ① 黒色土 赤褐色土多く含む、やや軟質土、柱痕。  
 ② 黒色土 ③より数質土。

0 ( 1 : 60 ) 2m

第19図 掘立柱建物跡 2・4号



第20図 掘立柱建物跡3号



第21図 掘立柱建物跡5号

である。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

**掘立柱建物跡5号**（第21図・第24図1）

D-26区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡4号の南側で重複する。S4°Wを長軸とした1間×2間の建物で、平面形長方形を呈する。梁行（p1-p2）211cm、桁行（p2-p6）295cmである。柱穴の形状は円形に近く、平均長径35.7cm、平均短径32.2cm、平均した深さは46.7cmを測る。また、本遺構は伊跡2号と長軸を同じ方向にとり、伊跡2号の南側半分と重複する。何らかの関係性をもつ可能性も考えられるが、詳細については不明である。

p5から近世陶器片が2点、p8から弥生式土器と考

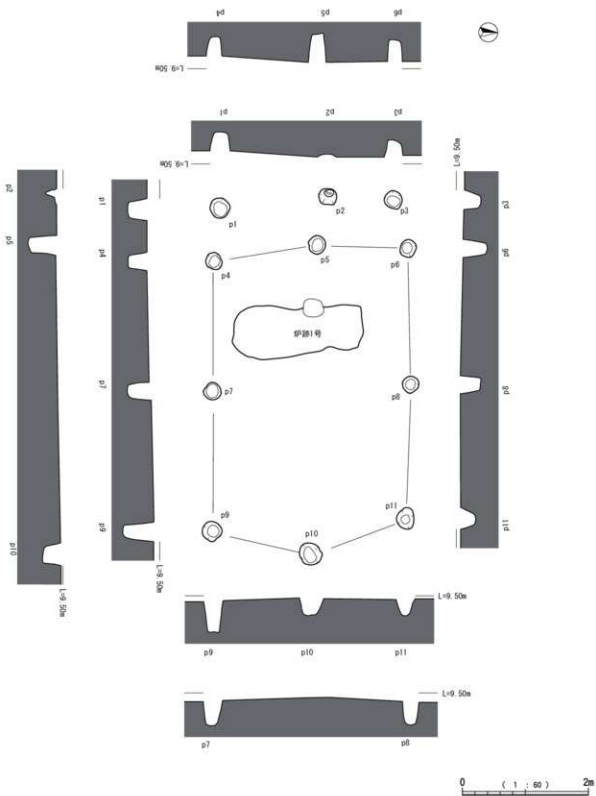
えられる胴部小片が1点出土した。1は、p5内で確認された近世陶器の底部である。底径18.5cmを測る。底面は、部分的にいびつで上げ底状となる。底部接地面から胴部にかけては直線的に立ち上がる。内面には、同心円状のタタキ痕が観察できる。薩摩焼苗代川産の甕と考えられる。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

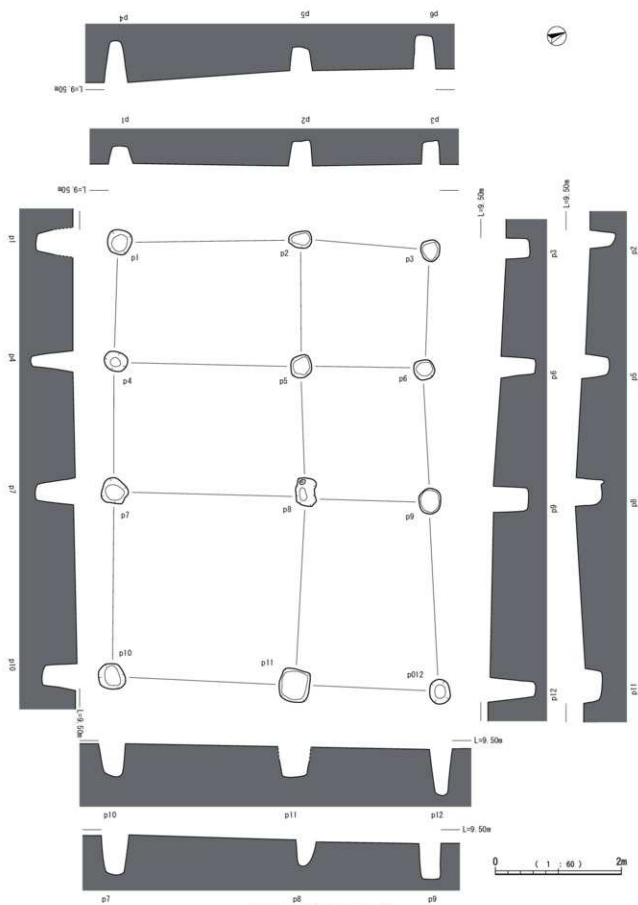
**掘立柱建物跡6号**（第22図）

C-26区のⅡ層で検出された。S89°Wを長軸とした2間×2間の建物で、平面形は長方形を呈する。建物の西側には庇をもつ。梁行（p4-p6）308cm、桁行（p6-p11）431cmを測る。柱穴の形状は円形に近く、平均長径30.3cm、平均短径27.6cm、平均した深さは35.5cm





第22図 据立柱建物跡 6号



第23图 掘立柱建物跡7号



第24図 掘立柱建物跡5号出土遺物

第4表 掘立柱建物跡柱穴測定表

掘立柱建物跡1号

柱穴 (cm)				柱穴間距離	
番号	長さ	短径	深さ	番号	距離 (cm)
p1	32	30	18	p1-p2	322
p2	35	33	36	p3-p4	190
p3	42	39	53	p4-p5	306
p4	47	41	27	p6-p7	196
p5	42	39	45	p7-p8	314
p6	31	28	58	p9-p10	187
p7	33	32	66	p1-p4	170
p8	32	32	33	p2-p5	214
p9	36	33	18	p3-p6	214
p10	37	30	20	p4-p7	216
				p5-p8	200
				p6-p9	302
				p7-p10	303

掘立柱建物跡3号

柱穴 (cm)				柱穴間距離	
番号	長さ	短径	深さ	番号	距離 (cm)
p1	45	44	35	p1-p2	313
p2	45	41	40	p2-p3	200
p3	37	35	35	p4-p5	308
p4	56	55	58	p5-p6	198
p5	42	39	50	p7-p8	284
p6	49	44	29	p8-p9	228
p7	66	43	72	p10-p11	306
p8	38	36	27	p11-p12	205
p9	52	39	31	p1-p4	193
p10	48	43	65	p2-p5	200
p11	47	38	64	p3-p6	199
p12	42	39	35	p4-p7	191
				p5-p8	191
				p6-p9	194
				p7-p10	296
				p8-p11	309
				p9-p12	305

掘立柱建物跡6号

柱穴 (cm)				柱穴間距離	
番号	長さ	短径	深さ	番号	距離 (cm)
p1	32	32	30	p1-p2	172
p2	27	25	4	p2-p3	103
p3	29	27	26	p4-p6	166
p4	27	26	30	p5-p6	143
p5	30	26	45	p9-p10	158
p6	27	24	38	p10-p11	163
p7	28	27	37	p1-p4	84
p8	27	26	32	p2-p5	86
p9	32	32	49	p3-p6	77
p10	37	32	29	p4-p7	206
p11	34	28	24	p6-p8	217
				p7-p9	223
				p8-p11	215

掘立柱建物跡2号

柱穴 (cm)				柱穴間距離	
番号	長さ	短径	深さ	番号	距離 (cm)
p1	20	18	11	p1-p2	116
p2	20	19	17	p2-p3	92
p3	17	16	13	p6-p7	103
p4	28	22	19	p7-p8	99
p5	18	17	20	p1-p4	192
p6	24	24	20	p3-p5	189
p7	19	17	16	p4-p6	203
p8	21	15	23	p5-p8	216

掘立柱建物跡4号

柱穴 (cm)				柱穴間距離	
番号	長さ	短径	深さ	番号	距離 (cm)
p1	68	47	71	p2-p4	201
p2	76	48	81	p6-p6	189
p3	55	35	83	p1-p3	214
p4	76	39	70	p5-p7	207
p5	54	52	58	p1-p8	227
p6	59	39	56	p4-p6	195
p7	64	55	74	p1-p2	221
p8	76	47	71	p3-p5	187

掘立柱建物跡5号

柱穴 (cm)				柱穴間距離	
番号	長さ	短径	深さ	番号	距離 (cm)
p1	32	32	22	p1-p2	211
p2	33	26	19	p5-p6	203
p3	39	36	85	p1-p3	185
p4	37	31	37	p2-p4	185
p5	41	37	58	p3-p5	111
p6	32	31	59	p4-p6	110

掘立柱建物跡7号

柱穴 (cm)				柱穴間距離	
番号	長さ	短径	深さ	番号	距離 (cm)
p1	39	38	59	p1-p2	288
p2	37	27	41	p2-p3	206
p3	34	30	38	p4-p5	296
p4	37	32	67	p5-p6	196
p5	39	34	41	p7-p8	300
p6	32	31	55	p8-p9	204
p7	43	43	62	p10-p11	290
p8	63	35	42	p11-p12	232
p9	41	34	56	p1-p4	189
p10	44	40	54	p2-p5	202
p11	52	48	48	p3-p6	188
p12	39	32	74	p4-p7	207
				p5-p8	203
				p6-p9	209
				p7-p10	292
				p8-p11	303
				p9-p12	303

であった。底部分の柱穴の長径と短径はほぼ同じであるが、深さが浅くなる。建物内の西側には長軸をほぼ90° 離れたが跡1号が収まる。建物内に収まることから、両遺構には何らかの関係性があると考えられるが、確証を得るには至らなかった。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

#### 掘立柱建物跡7号（第23図）

C・D-26区のⅡ層で検出された。S92°Wを長軸とした2間×3間の総柱の建物である。掘立柱建物跡6号の北側の一部と重複する。梁行（p1-p3）494cm、桁行（p3-p12）701cmを測る。柱穴の形状は隅丸方形に近いものが多く、平均長径41.7cm、平均短径35.3cm、平均した深さ53.1cmである。ただし、p1とp11については検出に手間取り、掘下げすぎていることから推定値である。

#### 2 柱穴（第14・25図）

ここで扱う柱穴は柱痕が残る、掘立柱建物跡を構成しないものである。調査区内から5基確認した。低地部のD-26区で検出した柱穴1・2は柱痕跡を確認出来たこと、低湿地部のB・C-20区で検出した柱穴3～5は柱の一部が残存していたことから柱穴と判断した。低湿地部で検出した柱穴3～5の3基は、検出面の付近で土壌がすぐに水で重く重くなっていた。さらに、掘り下げ途中で水が湧いてくる状況であったため、柱穴下面の検出状況については多少不安定な要素もある。このように常に水が供給されるような区域であったことから、柱の一部が残存したと考えられる。しかし、出土した柱は、実測できる強度ではなかった。

柱穴3～5から出土した柱は放射性炭素年代測定を行った結果、15～17世紀という数値が得られている。樹種についてはスダジイ及びクスノキ科であった。詳細については、第3分冊「第8章」を参照いただきたい。

柱穴1・2の時期については検出層及び埋土から、柱穴3～5については柱穴の埋土と放射性炭素年代測定結果から中・近世とした。柱穴の位置については、第14図に示してある。

#### 柱穴1（第25図）

D-26区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡4号のp6の南側に位置する。平面形は34×30cmのほぼ円形で、深さは50.3cmを測る。柱穴の埋土は黒色土を基本とするが、混じる土や軟度の違いにより分層した。

#### 柱穴2（第25図）

D-26区のⅡ層で検出された。柱穴1の南側50cmに位置する。柱穴の平面形は52×52cmの円形に近く、深さは50cmを測る。柱穴1とは柱穴の平面プラン、柱穴埋土の堆積状況がほぼ同じである。さらに、掘立柱建物跡4号のp6に柱穴1・2とも隣接することからこれとの関連も考えられる。

#### 柱穴3（第25図）

C-20区のⅢ層で検出された。平面形が26×23cmのほぼ円形に近く、深さ43cmを測る。柱穴の下部に長さ26cm、太さ15cmの柱の一部が確認された。柱の下側の先端は鋭角になるように加工され、側面は面取りされていた。

#### 柱穴4（第25図）

C-20区のⅢ層で、柱穴3の南側180cmの位置で検出された。柱穴は25×22cmのほぼ円形で、深さ12cmであった。柱穴より先に柱の一部を確認した。残存する柱は、長さ12cm、太さ15cmであった。柱の太さは、柱穴3とは同じである。下側の先端は丸く加工され、側面の半分は面取りされていた。

#### 柱穴5（第25図）

B-20区のⅢ層中で検出された。最初に89×39cmの不定型なプランを検出した。北東側に隣接して土坑23号・24号が検出され、それらとの切り合い関係が明確でなく、また、樹痕の可能性もあったことから半載して調査を進めた。その結果、深さ25cmの底面から径18cm、深さ85cmの掘り込みがあり、中に柱の一部が残存していた。柱は長さ65cm、太さ14cmで、下側の先端は鋭く加工が施されていた。柱の半分は面取りされていたが、残りの半分には加工痕は見られなかった。周辺に検出された柱穴3・4及びピットとの関連を探ったが、掘立柱建物跡を構成するものとはならなかった。なお、柱穴5は、弥生時代の土坑23号及び24号を切る。その関係については、第95図に示した。

#### 3 ピット（第14・15・26図）

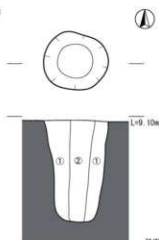
ピットはⅡ層検出とⅢ層以下検出のものに大別できるが、調査区内において1,019基を確認した。前述のとおり、Ⅱ層検出のピットは中・近世、Ⅲ層以下で検出したピットは時代を特定することが困難であることから、Ⅱ層とⅢ層以下で検出されたものに分けて掲載する。Ⅱ層検出のピットの配置図は掘立柱建物跡及び柱穴とともに第14図に、Ⅲ層以下で検出されたピットの配置図は第15図に示した。なお、ピットという名称は柱穴と同様の掘り込みをもち、柱及び柱痕跡が確認できなかった遺構という意味で便宜的に使用している。

#### (1) Ⅱ層検出ピット（第14・26図）

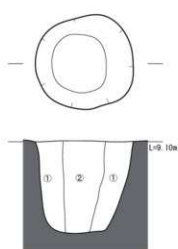
Ⅱ層検出のピットは、20区から29区までで228基を確認した。そのうち大半は25区から29区に集中する。19区から北側には検出されなかった。基本的にⅡ層で検出されたピットの時代は、中近世と判断した。この中で礫がまとまって埋土中に確認されたものを4基（P1～P4）掲載する。いずれも柱穴であった可能性も考えられる。

また、ピットの埋土中から出土した遺物で固化したものについては、その実測図のみを第27図に掲載し、その出土したピットの位置については第14図の配置図に示した。

柱穴 1



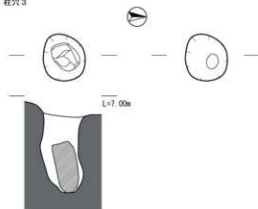
柱穴 2



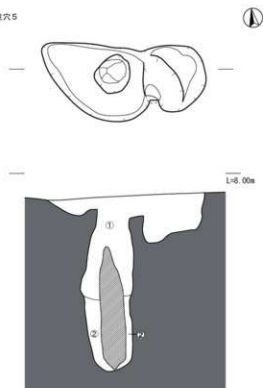
柱穴 1・2 埋土

- ① 黄褐色土 黄褐色土が僅かに混じる。  
 ② 黒色土 黄褐色土が僅かに混じるが、①より軟質である。  
 柱痕跡と考えられる。

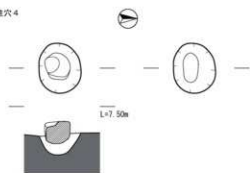
柱穴 3



柱穴 5



柱穴 4



柱穴 3・4 埋土  
 明褐色砂質土  
 しまりはあるが、粘性はない。

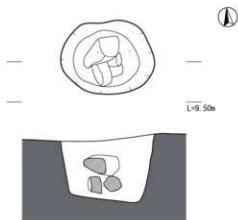
柱穴 5 埋土

- ① 黄褐色土  
 ② 灰白色砂質土 しまりは強く、粘性はない。  
 シラスが入り込んだものと考えられる。

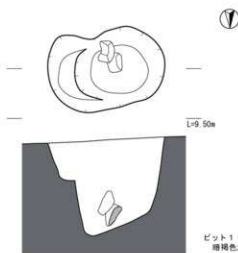
0 ( 1 : 20 ) 0.5m

第25図 柱穴

ビット1

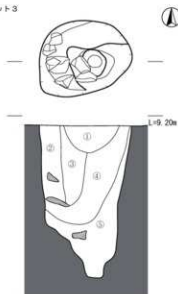


ビット2



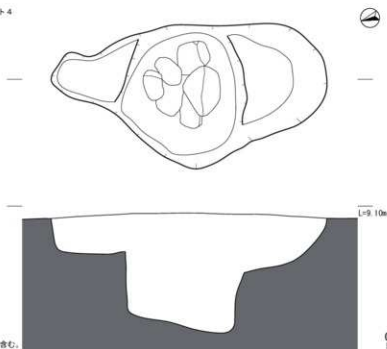
ビット1・2埋土  
緑褐色土 φ2m大の明赤褐色土を含む。

ビット3



ビット3埋土  
①黒色土  
φ10m大の明黄褐色の火山灰を含む。  
②黒色土  
φ5m大の黄褐色火山灰を含む。  
③黒色土  
φ2m大の褐色火山灰を含む。  
④黒色土  
φ3~6m大の黄褐色火山灰を含む。  
⑤黒色土

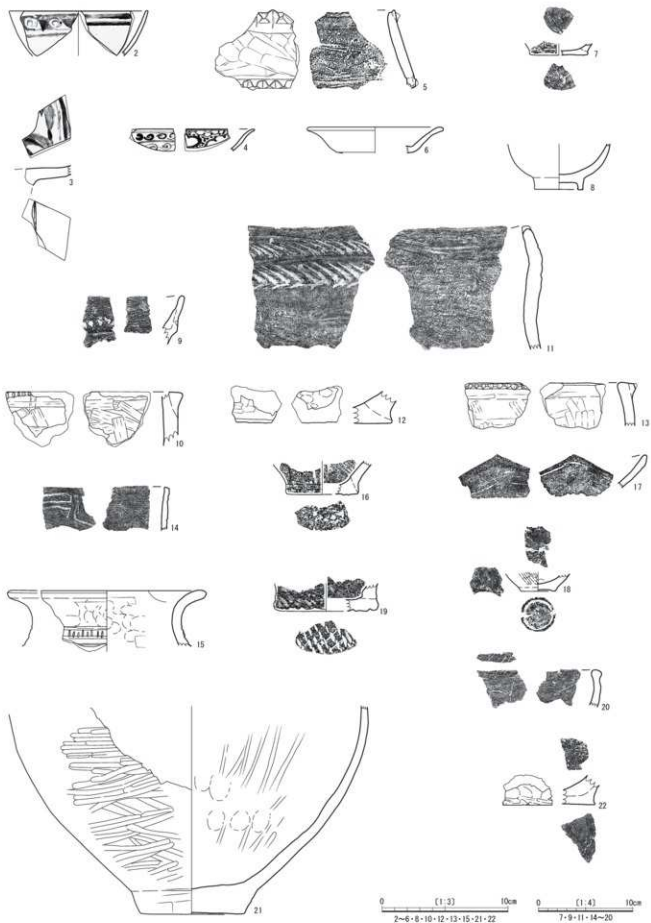
ビット4



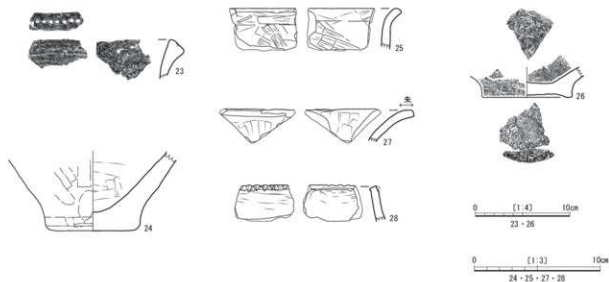
ビット4埋土  
緑褐色土 明黄褐色土と赤褐色土を含む。

0 ( 1 : 20 ) 0.5m

第26図 ビット



第27図 ビット出土遺物（1）



第28図 ビット出土遺物(2)

P 1 (第26図)

D-28区のⅡ層上面で検出された。平面形は50×38cmの楕円形で、深さ35cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。

埋土中から20cm大と10cm大の礫がそれぞれ1点、5cm大の礫が2点出土した。

P 2 (第26図)

D-28区のⅡ層上面で検出された。P 1から南東へ3mの位置で、平面形は60×40cmのいびつな楕円形である。埋土は単層で、暗褐色土である。

埋土中から10cm大の礫が2点出土した。

P 3 (第26図・第27図2・3)

D-27区のⅡ層で検出された。50×40cmの楕円形に近いプランである。深さ80cmを測るが、深さ50cm程度から底面に向かって細くなる。埋土については、平面図と共に示してある。

埋土中から陶器片と染付、20cmと10cm大の角礫7点が出土した。2は青花碗の口縁部、3は青花碗の底部である。いずれも中世後半と考えられる。

P 4 (第26図)

D-26区のⅡ層で検出された2段掘のビットである。平面形は145×75cmの不定型なプランで20~30cmの深さをもつ。このビットの中央部には60×65cmの円形に近いプランで、さらに30cmほど垂直に掘り込んでいる。埋土は明黄褐色土と赤褐色土を含む暗褐色土で、2mm程度の炭化物も確認された。

埋土中から30cm大、20cm大、10cm大の礫が6点出土している。

P 5~P 8 (第27図4~7)

以下、Ⅱ層検出のP 5からP 8の埋土内から出土した

遺物について記述する。

4は、D-27区で検出されたP 5埋土から出土した。青花皿の口縁部で、口縁端部が短く外反する。中世後半に比定される。5は、C-26区で検出されたP 6出土の土器である。内傾する口縁部の上下に突帯を巡らせ、棒状の工具を強く押し当てて刻みを施すものである。内外面ともナデ調整を施す。弥生時代前期の土器と考えられる。6は、C-26区で検出されたP 7から出土した龍泉窯産の青磁皿である。中世後半と考えられる。7はC-25区の南端で検出されたP 8から出土した土器で、薄く仕上げられた底部片である。底部から胴部にかけてはかなり開く器形をもつ鉢と考えられる。内外面ともナデ調整が施される。縄文時代後期から晩期に比定できる。

(2) Ⅲ層検出のビット(第15図)

Ⅲ層検出のビットは、15区から29区にかけて791基を検出した。Ⅱ層検出のビットが調査区の南側に偏在することに対して、Ⅲ層検出のビットはより広い区域に亘って確認された。その中でも、24区から26区にかけて集中している。

ビットから出土した遺物の中で図化し得るものについては、その実測図のみを第27・28図に掲載し、遺物が出土したビットの位置については第15図の配置図に示した。

P 9~P 28 (第27図・第28図8~28)

以下、Ⅲ層以下で検出されたP 9からP 28の埋土内から出土した遺物について記述する。

8は、D-29区で検出されたP 9から出土した小振りの磁器碗である。豊付には軸を施していない。肥前系で近世と考えられる。9は、D-29区で検出されたP 10から出土した土器片である。断面が三角形を呈する口縁部



で、外面には巻貝の頂部によると考えられる刺突を横位に施す。内外面とも器面調整の痕が部分的に残る。縄文時代後期の市来式土器に比定できる。10は、D-29区、P11から出土した土器である。口縁部上端の突帯に細い刻みを施す。内外面ともナデによる丁寧な器面調整が行われている。弥生時代前期と考えられる。11は、C-29区で検出のP12から出土した口縁部から胴部にかけての土器片である。頸部から胴部へは膨らみ、頸部で幾分縮まった口縁部はその上方で内側へ屈曲する器形をもつ。口縁部は波状を呈すると考えられる。器壁は厚く、口縁部は丸く取める。外面屈曲部にはヘラ状工具で横位の区画を施し、その上下に斜位の貝殻刺突を連続して行う。下位の貝殻刺突の下端には横位もしくは横位に近い1cm程度の貝殻刺突を施す。縄文時代後期の丸尾式土器と考えられる。12は、C-29区で検出されたP13からの出土である。底部片で底面が幾分張り出し、胴部に向かって開く器形である。外面は丁寧なナデが施される。弥生時代前期の土器と考えられる。13は、C-29区で検出されたP14からの出土である。口縁部上端に三角突帯を貼り付け、口唇部を平坦に仕上げ、その先端に細い刻みを等間隔に施すものである。弥生時代前期に比定される。14は、C-28区で検出されたP15から出土したものである。口唇部を平坦に仕上げた口縁部は直立し、外面には沈線で文様を施す。器壁は薄く、焼成は極めて良好である。指宿式土器に比定できる。15は、C-27区で検出されたP16からの出土品である。口縁部は大きく外反し、その口縁部は丸く取める。頸部の屈曲部よりやや下方には上下に沈線を伴った低い突帯を巡らせ、細い刻みを施す。さらに下方に横位の沈線が残ることから、突帯は少なくとも2条あったと考えられる。内外面との指押さえとナデで丁寧な器面調整が行われている。弥生時代前期のもので考えられる。16はD-23区、P17から出土した。底部接地面が張り出し、底部から胴部へは開く器形である。底面には網代痕が観察できる。復元底径は7.5cmであった。縄文時代後期の土器と考えられる。17は、D-23区から検出されたP18から出土した。鉢形土器の口縁部で、内面には口縁部に沿って沈線を施す。内外面とも器面調整はナデを施す。縄文時代後期の土器と考えられる。18は、D-21区で検出されたP19から出土した。深鉢の底部片で、上げ底の底径は3.6cmを測る。底部から胴部へは開き気味に立ち上がる。外面にはヘラ磨きで器面調整を行う。縄文時代晩期に比定される。19は、D-21区で検出されたP20からの出土である。もじり底で復元底径は11cmである。底部から胴部へはあまり開かず立ち上がる。成形は全体的に粗い。縄文時代後期の指宿式土器と考えられる。20は、D-19区から検出されたP21から出土した。口縁部を肥厚させた土器片である。その幅広い口唇部には細い沈線を斜め

に施す。成形は粗いが、焼成は良好である。21・22は、D-19区から検出されたP22から出土したものである。21は土器片9点が接合したが、その中でP22から出土したものは2点である。そのほかは周辺の包含層出土である。胴径28.5cm、底径8.3cmを測る。底部は器壁の厚い平底で、底部から胴部へは湾曲しながら立ち上がる。器面調整は内面がナデと指押さえ、外面がヘラ磨きである。胴下部には被熱により表面が剥落している部分がある。弥生時代中期の incoming 土器と考えられる。22は底部端が細く張り出し、胴部へは開きながら立ち上がる器形をもつ。器面調整は内面がナデ、外面が指押さえとナデである。弥生時代の土器と考えられる。23は、D-19区から検出されたP23から出土した。幾分外に開く口縁部は肥厚し、平坦な口唇部の中央に竹管文を口縁に沿って1条施す。器面調整は、内外面ともナデである。縄文時代後期のものと考えられる。24は、B-18区から検出されたP24から出土したものである。復元底径6.8cmを測る。全体的に厚い器壁をもつ。内面にはナデ、外面には工具ナデで器面調整を行う。弥生時代の土器と考えられる。25は、B-18区で検出されたP25から出土した。直行する口縁部は、その端部で「く」の字状に外反し、口唇部は丸く取める。内面はナデ、外面は工具ナデで丁寧な器面調整である。弥生時代の土器と考えられる。26は、C-17区から検出されたP26から出土した。厚い器壁をもつ上げ底の底部片である。復元底径9.6cmを測る。器面調整は、内外面ともナデである。底面にはシダ系植物の圧痕が観察できる。縄文時代後期のものと考えられる。27は、B-17区でP27から出土した。大きく外反する壺の口縁部で、その端部の断面は方形を呈する。器面調整は内外面ともナデが行われる。弥生時代に比定される。28は、C-16区でP28から出土した。口縁部はやや内傾するが、胴部は屈曲すると考えられる。口唇部は平坦面をもち、口縁上端には米粒大の刻みを施した突帯を巡らす。内面の器面調整はナデである。弥生時代前期のもので考えられる。

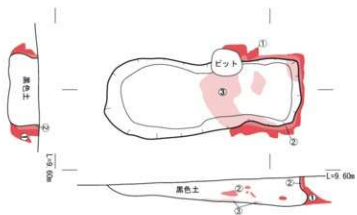
#### 4 伊跡 (第16・21・22・29区)

伊跡は平成25年度の調査において、掘立柱建物跡が集中する区域で2基検出された。2基の距離は約10mで、主軸はともに北を向く。時期については、検出層、掘立柱建物跡との関連も想定されることから中・近世とした。掘立柱建物跡との位置関係については、第21・22区に示した。また、被熱により変色した部分が本体、変色のない部分が灰溜り、本体と付帯部分に分かれる所が焚口と考えられる。

#### 伊跡1号 (第16・22・29区)

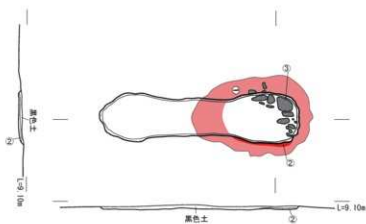
C-26区のⅡ層で検出された。N6°Eを長軸とする長辺205cm、短辺85cmを測る。平面形は隅丸方形で、焚き口と考えられる部分は50cm程度に狭くなる。断面は南

炉跡 1号



- ① 被熱により、にがい黄褐色に変色した部分
- ② 被熱により、橙色に変色した部分
- ③ 陥り付けた粘土、被熱により明黄褐色に変色

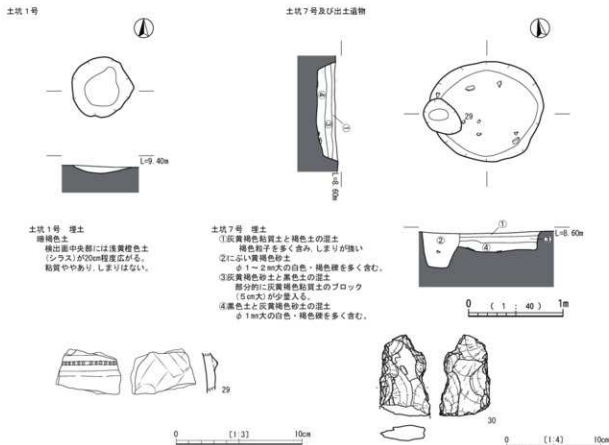
炉跡 2号



- ① 被熱により、赤褐色に変色した部分
- ② 被熱により、明黄褐色に変色した部分
- ③ 灰化物

0 ( 1 : 40 ) 1m

第29図 炉跡 1・2号



第30図 I類土坑及び出土遺物

から北方向へ徐々に深くなり、最深部は30cmとなる。竪本体の壁及び周辺は被熱による変色が著しく、床面には貼り付けられた粘土が部分的に残る。また、焚口付近の西側には竪跡を切るピットが検出されたが、竪跡との関係はないと判断した。

さらに、この竪跡は掘立柱建物跡6号の長軸とはほぼ直交するが、掘立柱建物跡6号の西側のp4~6に並行して掘立柱建物跡の中に取まる。竪跡の床面とこの掘立柱建物跡の柱穴の床面を比べると、柱穴のほうが10cm程度低くなる。何らかの関係も考えられるが、判断はできなかった。

遺構内から遺物は確認されなかった。

#### 伊跡2号 (第16・21・29図)

D-26区のⅡ層で検出された。伊跡1号から北西へ約10mに位置する。N2°Eを長軸とし、長辺210cm、短軸53cmを測る。検出面からの深さは5cm程度で、ほぼ床面しか残っていない状況であった。平面形は細長い楕円形であるが、焚口付近は35cmと狭くなる。竪壁及び周辺は一樣に被熱による変色が見られた。竪内の北西側には炭化物が集中していた。埋土は黒色土の単層であるが、

埋土中には5cm以下の被熱により変色した赤褐色土や明黄褐色土のブロックが散在していた。

この竪跡は掘立柱建物跡5号と長軸がほぼ同じで、竪本体は建物の外にあるが、灰溜まりは建物の中になる。掘立柱建物跡を構成する柱穴の底面は竪跡の床面より約20cm以上低い。竪跡1号と同様に掘立柱建物跡5号と何らかの関係性も考えられるが、詳細については不明であった。

遺構内からの遺物の出土はなかった。

#### 5 土坑 (第16図)

土坑は、平成25・27・28・29年度の調査において16区から29区にかけて13基が検出された。検出面は本来Ⅱ層であるが、攪乱や削平の影響を受けてⅢ層やⅣ層のものもある。時期について、明記していないものについては中・近世である。

その平面形から次のように分類できる。

I類・・・ 円形もしくは円形に近いもの

(1号・7号)

Ⅱ類・・・ 方形もしくは方形に近いもの

(6号・9号・10号・12号・13号)

### Ⅲ類・・・不定形なもの

(2～5号・8号・11号)

以下、分類に従って記述する。

#### 【Ⅰ類】

##### 土坑1号(第30区)

C・D-29区のⅢ層で検出された。平面形は径65cmのほぼ円形で、深さは10cmに満たない。遺構の断面は、ボウル状を呈する。本遺構は溝状遺構1号と土坑3号と重複している。切り合い関係から中・近世と判断した。

遺構内から遺物は確認されていない。

##### 土坑7号(第30区29・30)

C-23区のⅡ層、溝状遺構7号の西側で検出された。平面形は122×104cmのほぼ円形に近いプランで、深さ20cmを測る。床面はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。

土坑内から8点の土器と1点の石器が出土した。土器は胴部片で、内1点を掲載した。29は、断面三角形の突帯に細かい刻みを密に施すものである。弥生時代前期に比定できる。30は、打製石斧または半磨製石斧の基部と考えられる。破損後の再加工等は見られない。この土坑の時期についてはⅡ層検出であることと溝状遺構7号を切っていることから中・近世とし、出土した遺物は流れ込みの可能性が高いと考えられる。

また、この土坑の西側では、土坑を切った状態でピットを検出した。ピットは土坑より20cm程深く掘り込まれており、底面付近からは水が湧く状況であった。ピットの時期は土坑7号との切り合い関係や埋土から土坑7号より新しいが、ほぼ同時期と考えられる。

#### 【Ⅱ類】

##### 土坑6号(第31区31)

C-23区のⅡ層、溝状遺構7号の西側で検出された。長軸160cm、短軸90cm、深さ42cmを測る。床面は平坦で壁は急な角度で立ち上がる。本遺構はⅢA層まで掘り込んで構築しているが、床面付近では水が湧き出る状況であった。

埋土中からは縄文時代の土器や中世・近世の陶磁器等に加えて釘と考えられる鉄片が出土したが、図化し得たのは1点であった。31は磁器の染付碗で、底部から体部まで残存する。畳付は露胎し、見込みと外面には草花文が施される。近世と考えられる。

釘の可能性のある鉄片の出土や埋土の堆積状況が他の土坑とは異質であることから、木棺墓の可能性も考えられる。

##### 土坑9号(第31区32～34)

C-17区のⅢ層上面で検出した。Ⅲ層上面で検出したが、構築面はⅡ層と思われる。平面形は長軸216cm、短軸174cmの隅丸方形である、深さ62cmを測る。床面は平坦で、壁は急激に立ち上がる。本遺構は15・16世紀の陶磁器が出土している溝状遺構17号を切っていることか

ら、中・近世と考えられる。

埋土中から30数点の土器片と木製の曲物出土した。土器は縄文土器と考えられるものが7点、その他は弥生土器、土師器であった。その中で、土器2点と曲物を掲載する。32は、弥生時代の壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、口唇部には横位の沈線を施す。33は、土師器の坏である。口径13.2cm、底径7.3cm、器高4.2cmを測る。回転ヘラケズリによる器面調整で、底部には糸切りとヘラ切り両方の痕跡が観察できる。34は、曲物の底板と考えられる。柁目板を使用している。形状は径12cm程度の円形で、厚さ7mmである。放射性炭素年代測定を行った結果、10～11世紀の数値が得られた。なお、詳細については「第8章」を参照いただきたい。

##### 土坑10号(第32区)

C-17区、溝状遺構17号の掘削中にその床面で土坑10号が確認された。溝状遺構17号に切られ、床面付近しか残存しない。土坑9号の北側にも隣接する。検出された平面形は長軸119cm、短軸65cmの方形で、深さは10cmを測る。床面はほぼ平坦で、北壁は緩やかに、南壁は急な角度で立ち上がる。埋土から中・近世と判断した。なお、本土坑は溝状遺構17号に切られ、さらに土坑29号を切っている。その関係の詳細については土坑29号の項で述べる。

遺構内から遺物の出土はなかった。

##### 土坑12号(第32区35・36)

B-16区のⅣA層で検出された。本遺構の周辺はⅡ・Ⅲ層の残存状況が悪く、表土下はほぼⅣA層となる。平面形は長軸110cm、短軸82cmの台形に近い。深さは11cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は全体的に急激に立ち上がる。ⅣA層検出ではあるが、床面近くでの検出であり、また、埋土がⅡ層相当と考えられることから時期は中・近世とした。

35は、指宿式土器の口縁部である。直線的に開く口縁外面に沈線で文様を構成する。器面調整は内外面とも条痕の後ナデを施す。36は市来式土器の口縁部で、上端が欠損する。口縁部文様帯に縦位と斜位の刺突を施す。

##### 土坑13号(第32区)

B-16区のⅢ層上面で検出されたが、遺構の一部がC-16区に及ぶ。平面形は長軸157cm、短軸68cmの隅丸方形で、深さは34cmを測る。床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。埋土の①と②については、調査時の埋土観察から遺構の埋没後に掘り返された可能性も考えられる。

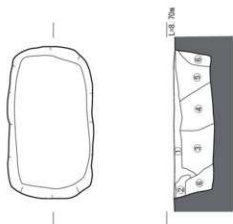
遺物は土器の小片が出土したが、時期を特定できるものはなかった。

#### 【Ⅲ類】

##### 土坑2号(第33区)

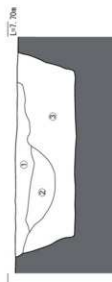
C-29区のⅢ層、土坑1号の北東の隣接して検出された。長軸90cm、短軸52cmを測る不定形な平面である。

土坑6号・出土遺物

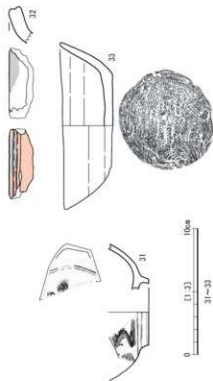


- 土坑6号 埋土  
 ①灰褐色砂土  
 ②51~60cmの自然崩石を多く含む、51~60cmの自然崩石を少量含む埋土  
 ③褐色砂土と黒褐色砂土の埋土  
 ④黒褐色土に多い黄褐色砂土の埋土  
 ⑤に黒褐色砂土、60cmのフロッパー入る。  
 ⑥褐色砂土と灰褐色砂土の埋土  
 ⑦51cm次の自然崩石を含む。

土坑9号・出土遺物



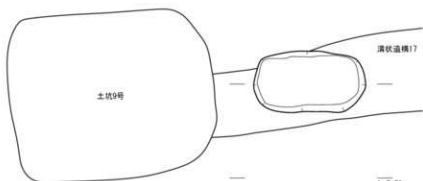
土坑17号



- 土坑9号 埋土  
 ①黒褐色(アカヤ)の1~5cm次のハリスを少量含む、しまり、粘りともある。  
 ②黒褐色土  
 ③50cmの明褐色土(アカヤ)を含む。  
 ④黄褐色砂土と黒褐色土の埋土  
 ⑤黒褐色土  
 ⑥黒褐色砂土を少量含む、しまりは無いが粘りは強い。  
 ⑦黄褐色砂土  
 クミ子紋に覆積

第31図 II類土坑(1)及び出土遺物

土坑10号



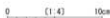
土坑10号 埋土  
 黒褐色土 やや黒味が強い、  
 しまり・粘性とも弱い。



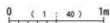
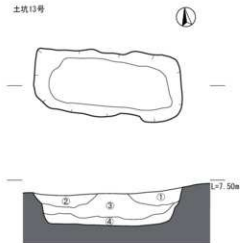
土坑12号・出土遺物



土坑12号 埋土  
 黒褐色土 赤褐色の鉄成分を少量含む。  
 しまりは強いが、粘性は弱い。



土坑13号



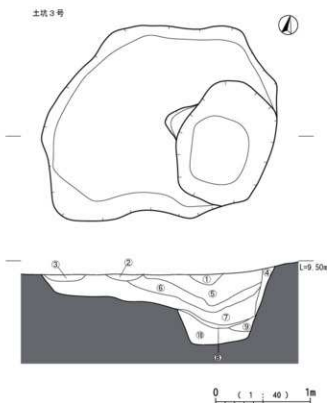
土坑13号 埋土  
 ①黒褐色土 φ5~10cm大のぶい黄褐色砂質土が  
 ブロックで入る。  
 しまり・粘性もある。  
 ②黒褐色土 φ5~10cm大のぶい黄褐色砂質土が  
 ブロックで入る。  
 しまりは弱い。粘性は強い。  
 ③黒褐色土 にぶい黄褐色ノミスを極少量含む。  
 しまりは強いが、粘性は強い。  
 ④にぶい黄褐色土

第32図 II類土坑(2)及び出土遺物



土坑2号  
埋土 黒褐色土 φ1cm大の灰白色小バミスを極少量含む。  
粘質ややあり、しまりはない。

- 土坑3号  
埋土
- ①黒色土 φ1~2mmの明褐色小バミスを極少量含む。  
しまりはなく、粘質はややある。  
褐色土をまばらに含む。
  - ②黒褐色土 しまり、粘質ともない。
  - ③黒褐色土 褐色土を2より多く含む。  
ややしまりあり。
  - ④黒色土 褐色土を少量含む。  
しまりはないが、粘質はややある
  - ⑤黒色土 φ1~2mmの褐色小バミスを極少量含む。  
しまりはないが、粘質はややある。
  - ⑥黒色土 φ1~2mmの褐色小バミスを極少量含む。  
部分的に褐色がかった層もある。  
しまりはないが、粘質はある。
  - ⑦黒色土 しまりはないが、粘質はある。
  - ⑧黒色土 黒褐色砂質土が定じる。  
しまりはないが、粘質は非常に強い。



- ⑨黒色土 φ1~2mmの黄褐色バミスを少量含む。  
しまりはないが、粘質は非常に強い。
- ⑩黒色土 しまりはないが、粘質は非常に強い。

第33図 Ⅲ類土坑(1)

西側の深さは約10cm、東側はさらに一段掘り込まれて深さ35cmとなる。本道構は、溝状遺構20号の中に掘り込まれている。

遺構から遺物の出土はなかった。

#### 土坑3号(第33図)

C・D・29区のⅢ層で、古墳時代と考えられる溝状遺構20号を分断するような状況で検出された。長軸248cm、短軸200cmを測る不定形なプランの土坑である。検出面からの深さは浅い部分が20~30cmで西から東に向かって下る。また、土坑内の東端はさらに掘り込まれ、二段掘りとなる。二段掘りの検出面からの深さは、75cm程度である。

遺構内から土器小片が出土したが、時代を特定できるものではなかった。

#### 土坑4号(第34・35図37~46)

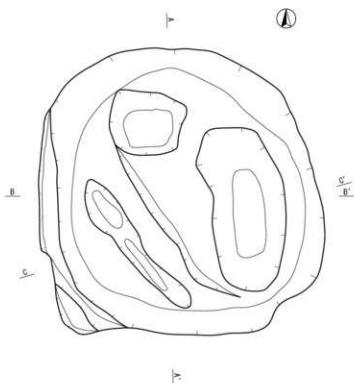
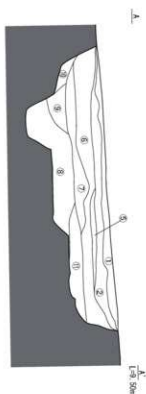
C・27・28区のⅢ層で検出された。古墳時代と考えられる溝状遺構20号を分断するように掘り込まれている。長軸・短軸とも300cm程度の不定形なプランである。床面の形状は複雑であるが、南東方向に向かって階段状に浅くなる。遺構の北側と東側にさらに掘り込まれた部分がある。検出面からの深さは北側の掘り込みで82cm、東

側の掘り込みで95cmである。この二つの掘り込みでは埋土の堆積状況に違いがある。また、土層断面の埋土⑩、⑧、⑨、⑩が南から北に向かって同心円状に面的な広がりをもっていたことから、人為的な埋戻しが行われた可能性も考えられる。

遺構内からは、弥生時代前期と考えられる土器、土師器、青磁、白磁が出土している。そのうち、7点を図化した。37は、龍泉窯系の青磁の口縁部である。口縁上部に雷文帯をもち、その下にラマ式連弁と考えられる文様を施す。復元口径は17.0cmである。38は中国産の白磁碗の底部で、底径は4.2cmを測る。高台には4か所に挟り込みがあり、見込みには4か所の目跡が残る。39は陶器碗の底部で、復元底径4cmである。高台は台形状で、見込みには黒釉が厚く溜まる。40は、土師器の灯明皿である。口径7.6cm、底径5.6cm、器高1.9cmを測る。糸切り底で、回転ナデによる器面調整が施される。部分的にススが残る。41は土師皿で、口径8.1cm、底径7cm、器高2.1cmを測る。糸切り底で回転ナデによる器面調整が施される。灯明皿に転用されたため内外面にススが残り、

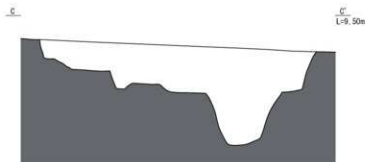
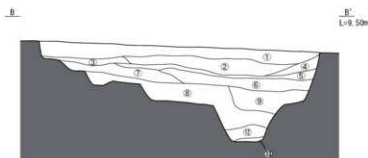
42は、甕の口縁部である。口縁端部に断面三角形の突

土坑4号



土坑4号  
埋土

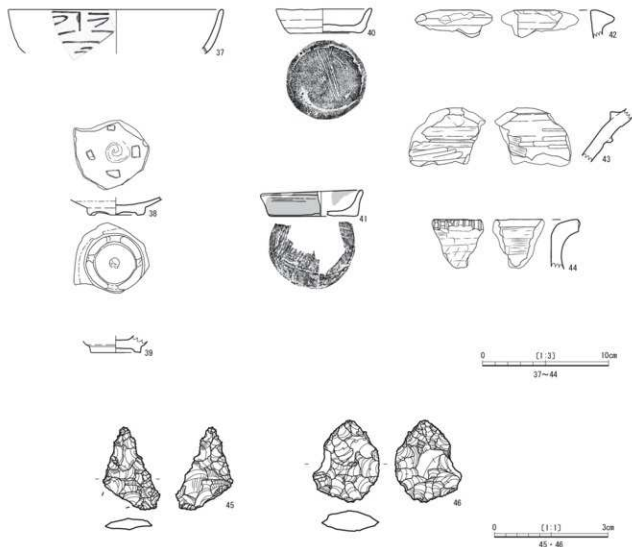
- ① 黒色土  
φ 1~3cm大の褐色土のブロックを少量含む。  
しじりはややなく、粘性もない。
- ② 黒褐色土  
φ 5~10mm大のアカネヤブロックを少量含む。  
しじりがあるが、粘性はない。
- ③ 黒褐色土  
φ 1~5cm大のアカネヤブロックを含む。  
しじりはややあるが、粘性はない。
- ④ 黒褐色土  
しじり、粘性ともない。
- ⑤ 黒色土  
φ 1~2cm大のアカネヤブロックを含む。  
しじりはややなく、粘性はややある。
- ⑥ 黒褐色土  
φ 2~3mm大のアカネヤハリスを少量含む。  
しじりはややあるが、粘性はない。
- ⑦ 黒褐色土  
φ 1~2cm大のアカネヤブロックを含む。  
しじりはややなく、粘性もない。
- ⑧ 黒色土  
φ 1~10mm大のアカネヤブロックを多く含む。  
しじりはあるが、粘性はややない。
- ⑨ 黒色土  
φ 1~3cm大のアカネヤブロックを少量含む。  
しじりはややあるが、粘性はややない。
- ⑩ 黒褐色土  
φ 1~3cm大のアカネヤブロックを含む。  
しじりはあるが、粘性はややない。
- ⑪ 黒褐色土  
φ 1~10mm大のアカネヤを含む。  
しじりはあるが、粘性はややない。
- ⑫ 黒褐色土  
φ 1~2cm大のアカネヤブロックを含む。  
しじりもなく、粘性もややない。
- ⑬ 黒褐色土  
φ 1~3cm大のアカネヤブロックを多く含む。  
しじりはなく、粘性もややない。



0 ( 1 : 40 ) 1m

第34図 III類土坑(2)





第35図 III類土坑出土遺物

帯をもち、その上部は外側に向かって傾斜する。弥生時代前期から中期にかけての土器である。43は壺の口縁部で、端部を欠損する。内外面の三角突帯を貼り付ける。突帯を貼り付けるために、その上下には強く押しつぶした凹みが残る。弥生時代前期の土器と考えられる。44は、口縁部片である。大きく外反する口唇部に縦の刻みを連続して施す。詳細については不明であるが、器種は壺で、古墳時代の土器と考えられる。

45は二等辺三角形に近い形状で、左脚部を欠損する石鏃の未成品と考えられる。石材は、腰岳産黒曜石である。46も石鏃の未製品で、石材は上牛鼻産黒曜石である。

遺構の時期については、出土遺物から中世と考えられる。

#### 土坑5号（第36図47～49）

C-24区のⅡ層下面からⅢ層上面にかけて検出された。この土坑は、同じ調査区を東から西へ延びる溝状遺構6号を切る。平面形は長軸330cm、短軸240cmの楕円形

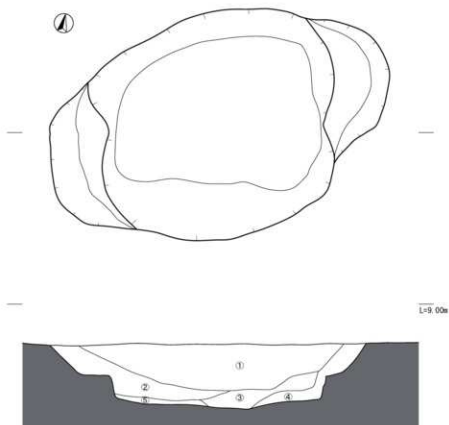
の両端に張り出しをもつような不定形となる。深さは検出面から70cmで、床面はほぼ平坦である。

遺構内からは、弥生時代と考えられる土器、須恵器、土師器、青磁、白磁が出土している。47は口径11.0cm、底径3.8cm、器高2.4cmの青磁皿である。体部は幾分丸みをもつが、口縁部は外反する。高台に軸葉はかからず、その中央部には突起がつく。48は、須恵器の壺である。胴部から底部が残存し、底部から胴部へは直線的に開く。外面には平行タキが部分的に残る。49は、両脚を欠損する腰岳産黒曜石の石鏃である。基部の挟りは素材の段階で入っていたとみられる。

#### 土坑8号（第37・38図50～57）

C-23区のⅡ層で検出された。南端の調査は不十分で、平面プラン全体を検出できなかった。推定する平面形は長軸約196cm、短軸165cmの楕円形で南端に方形の張り出しをもつ不定形なプランである。遺構内には3基のピットが検出された。2基は床面からさらに掘り込まれ

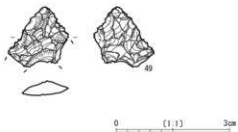
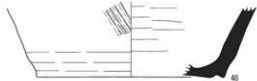
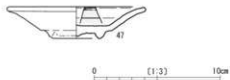
土坑5号



土坑5号 埋土

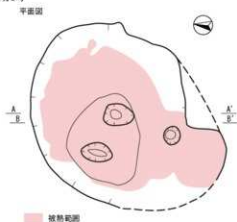
- ①黒色土  $\phi$  1cm大の反白色パミスと $\phi$  1cm大黄褐色土のブロックを含む。  
 下部には3cm大の礫も含む。  
 ②黒色土  $\phi$  1~3cm大の黄褐色土のブロックを含む。  
 ③黄褐色土  $\phi$  3~4cm大の反白色パミスと $\phi$  1~2cm大の黄褐色土のブロックを含む。  
 ④黒色土  $\phi$  1~2cm大の黄褐色土のブロックを含む。  
 ⑤黒色土 黄褐色土(アカホヤ)を含む。

0 (1:40) 1m

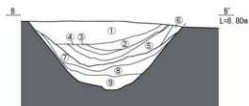
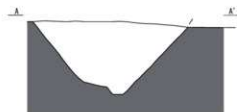


第36図 III類土坑(3)及び出土遺物

土坑8号



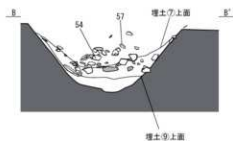
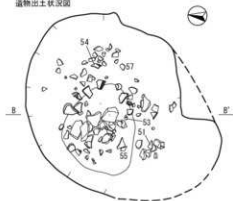
■ 焼熱範囲



土坑8号 埋土

- ① 灰褐色砂土  $\phi$  1cm大の白色軽石や $\phi$  2mm大の褐色小礫を多く含む。しまりあり。
- ② 褐色砂土 灰褐色砂土が混じる。しまりあり。
- ③ 濃褐色土  $\phi$  5mm大の白色軽石や白色・黄色小礫を多く含む。しまりなし。
- ④ 褐色砂土  $\phi$  1mm大の白色軽石を多く含む。しまりなし。
- ⑤ 褐色砂土 褐色土が混じる。 $\phi$  5mm大の白色軽石。 $\phi$  1mm大の白色・黄色小礫を多く含む。しまりなし。
- ⑥ 濃褐色土 褐色砂土や $\phi$  5mm大の褐色軽石土がブロック状に混じる。しまりややあり。
- ⑦ にぶい褐色粘土と褐色粘土が混じる。しまりあり。
- ⑧ 濃褐色砂土 にぶい褐色粘土が混じる。
- ⑨ 褐色粘土とにぶい褐色粘土が混じる。しまりあり。

遺物出土状況図



土坑11号

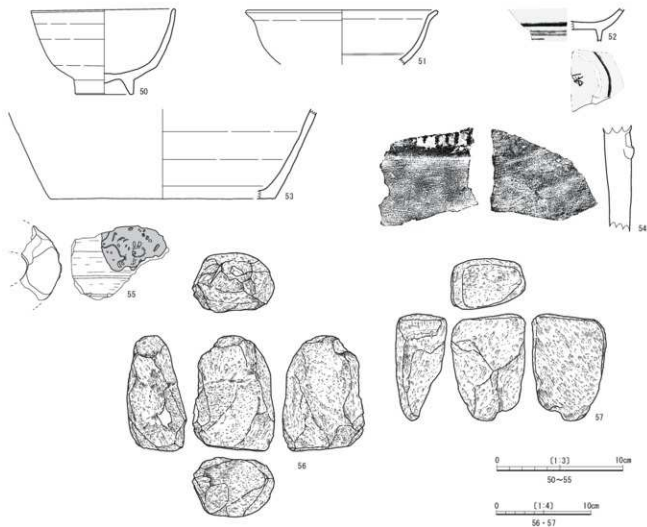


土坑11号 埋土

- 濃褐色土  $\phi$  1mm大の灰白色パミスを極少量含む。しまりは弱く、粘性はややある。

0 ( 1 : 40 ) 1m

第37図 III類土坑(4)



第38図 Ⅲ類土坑出土遺物

ていた。最深部は80cmを測り、Ⅳa層のアカホヤ二次堆積層まで掘り込まれている。調査の過程で底面に貼り付けられた粘土を外すと砂層になり、その下部にはさらに貼り付けられた粘土層が検出された。埋土中から廃棄されたと考えられる籾、鉄滓、輪の羽口等が出土した。床面には被熱により変色した部分があること等から鉄鍛冶関連の遺構と考えられる。

50は、肥前系の青磁碗である。色調はオリブ黄であるが、部分的に明褐色や浅黄橙色となる。口径11.4cm、底径4.6cm、器高6.8cmを測る。底部から直線的に開く体部は肩曲部から口縁部へ湾曲しながら立ち上がる。見込み中央は盛り上がり、畳付と高台内は露胎する。51は、肥前系系の青磁碗である。復元口径15.2cmを測る。体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁部は反外する。見込みの境には界線を巡らす。52は、磁器の染付碗である。胴部上半と畳付を欠損する。高台は器壁が薄く、高く作られる。高台外面に界線が3条、体部の高台近くに1条巡る。高台内には詳細は不明だが、文字らしきものが施さ

れる。53は、鉢の底部である。平底で体部は直線的に立ち上がる。内外面とも黒褐色の釉がかかる。復元底径は17.8cmである。底面には貝目跡が1か所残る。苗代川産の薩摩焼である。54は、瓦質土器の火鉢の胴部と考えられる。突帯が2本走り、その間に方形の文様を施す。55は、輪の羽口の破損品である。内外面とも工具によるナデ調整が施される。表面は赤褐色に変色し、黒色の付着物も残る。

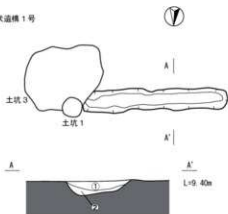
56・57は、軽石製の加工品である。56は各面に切り取った痕跡があり、表面には一部磨面が観察される。57は、上面と両側面に切り取った痕跡と表表面には部分的に磨面が残る。

土坑8号は、近世のものと考えられる。

土坑11号(第37図)

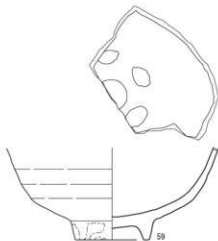
C-17区、Ⅳa層で検出した。遺構の周辺はⅡ・Ⅲ層の残存状況が悪い。長軸97cm、短軸74cm、深さ11cm。平面形は楕円形である。遺構の検出面の埋土から洪武通宝3枚が出土した。そのほか土器小片も出土した。遺構の

溝状遺構 1号

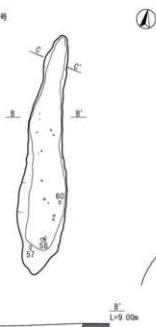


溝状遺構 1号 埋土

- ①暗褐色土  $\phi$  1~2mmの灰白色ノミスを極少量含む。しまりがあり、粘質も中である。  
 ②暗褐色土 ①に近い暗褐色土を少量含む。しまりはないが、粘質はある。

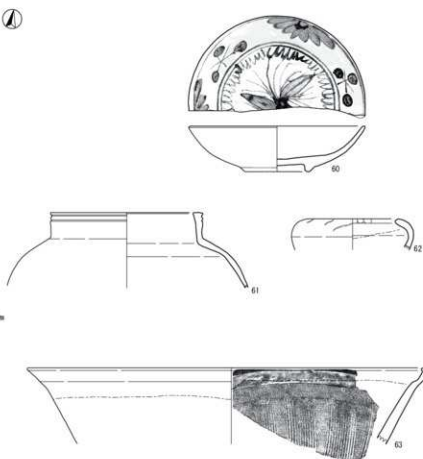


溝状遺構 2号



溝状遺構 2号 埋土

- 暗褐色土 いずれも 2mm 大の灰色軽石、黒色灰、明赤褐色土を含む。



第39図 溝状遺構 1・2号及び出土遺物

埋土はⅡ層相当であり、中・近世と判断した。土坑30号を切っている。

埋土中からの出土した遺物の図化は行っていない。

#### 6 溝状遺構 (第16図)

溝状遺構は、15区から29区にかけて19条検出された。全長約90mにわたるものから5mに満たないものまで様々な長さがある。また、低地部より低湿地部に多く検出されている。排水を目的とした溝状遺構の可能性も考えられる。報告書作成段階で近代以降の溝状遺構については除外した。時期について明記していない溝状遺構は、中・近世である。溝状遺構の配置図は、第16図に示した。

#### 溝状遺構1号 (第39図458)

D-29区のⅢ層で、ほぼ東西に検出した。検出した長さ4.9m、最大幅72cm、最大深度19cmを測る。溝状遺構の東端は土坑1号及び3号に切れ、検出面の西端と東端の比高差はほぼない。

埋土内から遺物が7点出土し、1点を図化した。58は口縁部片で、口縁端部以外は表面が剥離していると考えられる。口縁端部は丁寧な調整が行われ、平坦に仕上げられた口唇部は内傾する。弥生時代の土器と考えられる。検出面等から近世の遺構と考える。

#### 溝状遺構2号 (第39図59~63)

D-25・26区のⅡ層、溝状遺構の南端が掘立柱建物跡4・5号に隣接する位置で検出された。長さ7.62m、最大幅1.52m、最大深度0.25mを測る。ほぼ南北に延びる溝状遺構で、その幅は北方向へは狭く、南方向へ広がる形状である。

土坑内から出土した遺物のうち、59~63を図化した。59は底部から胴部が残存する肥前系の無文の磁器碗で、明緑灰色の釉薬を施す。底径は6cm、畳付と高台外面の所々に釉薬が施されない。60は口径14cm、底径5cm、器高3.6cmを測る磁器の集付皿である。灰白色の釉薬が施され、口縁部の内面と見込みに界線が巡り、草花文が配される。高台には砂目が付着する。61は、口縁部から胴部上半が残る壺と考えられる。短い口縁部は、頸部からはほぼ直する。口唇部を肥厚させ、平坦に仕上げられる。口縁外面には2条の沈線が巡る。口唇部や肩部には部分的に灰オリーブ色の自然釉がかかる。62は、灰オリーブ色を呈する磁器である。器種については香炉の可能性も考えられる。口縁部には斜位のヒビが同じように走るが、意図的なものなのかは不明である。内面は口縁部付近しか釉は施されない。63は、薩摩焼苗代川産の播鉢である。復元口径32.4cmを測る。口縁部上部の内面は窪みをもち、口唇部は平坦になる。口縁部の内外面には浅黄色の釉薬が施される。

近世の溝状遺構と考えられる。

#### 溝状遺構3号 (第40図)

D・E-25区、Ⅱ層で検出された。本遺構はほぼ東西

に延びるが、西側は調査区外となり、その全容は不明である。検出された長さは5m、最大幅は1.5m、最大深度は0.27mであった。

埋土から須恵器片、陶磁器片が出土したが、図化し得なかった。検出面等から近世の遺構と考える。

#### 溝状遺構4号 (第41図71~80)

C-24区からE-24・25区の調査区境へ向かって調査区を横断するようにⅡ層で検出された。長さ21.1m、最大幅1.65m、最大深度0.32mを測る。D-24区から西へ約15mにわたって溝状遺構の南側が攪乱を受け、溝状遺構の幅が幾分狭くなる。また、C-24区の東端は溝状遺構7号に切られている。出土遺物等から近世の溝状遺構と考えられる。

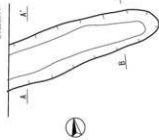
埋土から縄文土器、土師器、磁器、陶器が出土したが、10点を図化した。71・72は、薩摩焼苗代川系の壺である。71は、胴下部の把手は欠損する。復元底径は12.5cmで、底面に貝目跡が残る。茶道具の可能性も考えられる。72は壺の胴部から底部で、復元底径16.0cmである。底面に貝目跡が残る。73は無文の青磁碗で、口縁端部が外反し、外面の一部に軸のかからない部分がある。龍泉窯産と考えられる。74は青花碗で、復元口径は14.6cmを測る。外面は成形が粗いため凹みが残る。緑部外面には唐草文、体部外面には芭蕉葉文を配する。75・76は瓦質の播鉢で、いずれも6条のすり目を施す。75は、片口である。77は深鉢の口縁部で、内湾する。内傾した口唇部は面取りを行う。口縁部外面には、斜位もしくは横位に連続した刺突で文様を構成する。内外面ともナデ調整を施す。縄文時代後期に比定できる。78は外傾する深鉢の口縁部で、断面は三角形に肥厚する。肥厚帯には貝殻刺突を斜位に、屈曲部直上には横位に施す。内面には器面調整のための条痕が残る。79は深鉢で、断面三角形の口縁部は肥厚する。口唇部に沿って刺突を巡らせ、その下方には斜位の貝殻刺突を施す。内外面とも器面調整の条痕が残る。78・79とも市来式土器である。80は、明瞭な銅代直のある深鉢の底部である。底径8.8cmを測る。底部接地面は外に張り出す。縄文時代後期に比定できる。

#### 溝状遺構5号 (第40図64~70)

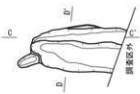
B・C-24区の溝状遺構6号や土坑5号と隣接した位置にある。B-24区の調査区境で検出し、長さ約3.4m、最大幅1.5m、最大深度0.67mであった。検出面はⅢ層であるが、本来はⅡ層から掘り込んだ遺構である。西端に張り出した部分があるが、この溝状遺構と一体のものとして判断した。調査時には土坑と形状が他の溝状遺構に類似することから、溝状遺構と判断した。

埋土中からは縄文土器、弥生土器、土師器、青磁等の破片及び黒曜石の剥片が確認された。64は、壺の底部である。上げ底で、外面や底面は丁寧なナデが施される。内面には

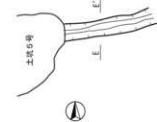
溝状遺構3号



溝状遺構5号



溝状遺構6号



C



D



溝状遺構3号 埋土



溝状遺構5号 埋土



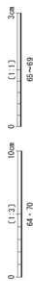
溝状遺構6号 埋土



溝状遺構6号 埋土  
 ① 黒褐色土  
 ② 黒色土  
 ③ 暗褐色土  
 の10cmの黄褐色アカヤマトロツクを  
 埋り、埋り下は赤土が露出している。  
 の3〜10cmの褐色のアカヤ  
 マトロツクを含む。しまりは弱く、  
 やや粘性をもつ。

溝状遺構5号 埋土

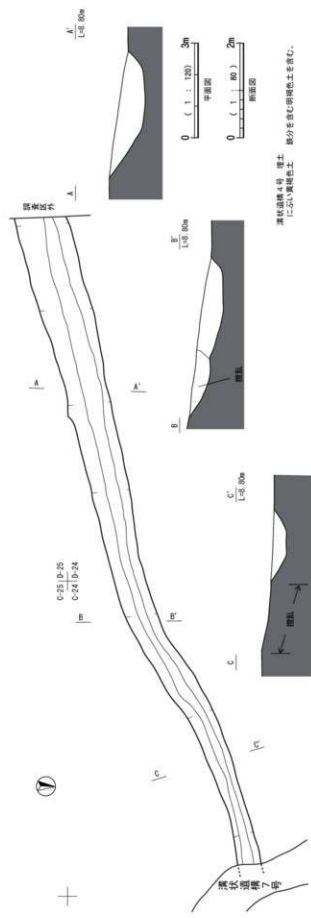
溝状遺構5号 埋土  
 ① 黒褐色土  
 ② 黒褐色土  
 ③ 黄褐色土  
 の3cmの黄褐色アカヤマトロツクを  
 埋り、埋り下は赤土が露出している。  
 の10cmの黄褐色アカヤマトロツクを  
 含み、しまりは弱く、やや粘性あり、  
 プロツクを含む。しまりは弱く、やや粘性あり、  
 の3cmの黄褐色アカヤマトロツクを  
 含む。しまり、粘性とも強い。



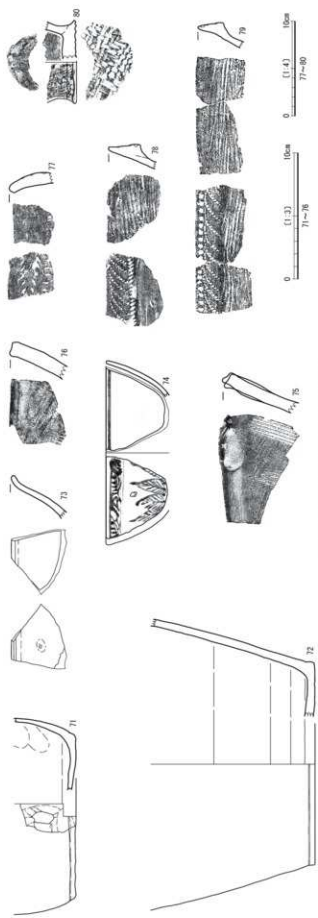
64・70

66-69

第40図 溝状遺構3・5・6号及び出土遺物

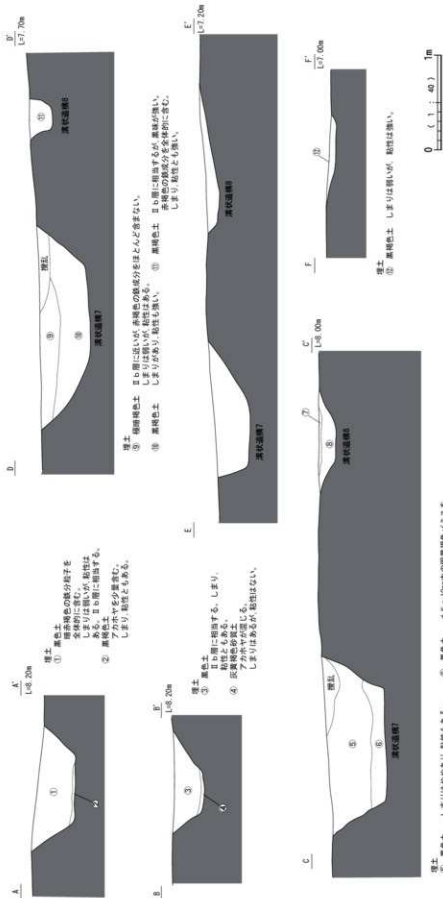
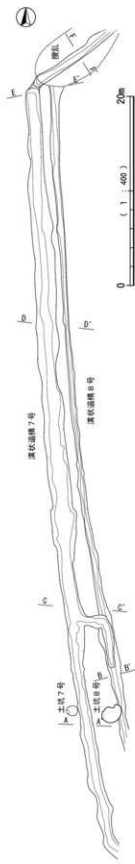


溝状遺構4号 遺土  
 により黄褐色土 部分を赤心褐色土を伴心。



第41図 溝状遺構4号及び出土遺物





第42図 溝状遺構 7・8号

ケズリの痕跡が残る。弥生時代後期に比定される。65は腰岳産黒曜石製の石鏃で、左脚を欠損する。素材は薄い剥片ではあるが、深い押圧剥離と微細な調整でやや外湾する側縁を形成する。66は小型で薄い腰岳産黒曜石製の石鏃で、先端部が欠損する。67は、厚みのある不定形剥片の縁辺に3か所剥離加工が観察される。石鏃未製品の可能性も考えられる。石材は、腰岳産の黒曜石である。68は、小形の縦長剥片の基部周辺と下縁部に細かい剥離加工が入る。石鏃もしくは異形石器の未製品と考えられる。石材は、腰岳産黒曜石である。69は、左側縁のみやや深い剥離が入る。製作途中の未成品と考えられる。石材は、腰岳産黒曜石である。70は、敲石である。上下端部及び側縁部全体に使用痕が残し、使い込まれている。

#### 溝状遺構 6号 (第40回)

B・C-24区、IV a層で検出されたが、II層からの掘り込みと考えられる。同じ方向を向く溝状遺構4号と5号に挟まれ、西端は土坑5号に切られ、東側は溝状遺構7号により切られていると考えられるが、攪乱等のため詳細は不明である。長さ3m、最大幅58cm、深さ30cmを測る。遺構の時期は、近世と考えられる。

遺構内からの遺物出土はなかった。

#### 溝状遺構 7号 (第42・43～47回81～156)

B-24区からC-16区にかけてのIV a層面を、ほぼ北方向へ直線的に延び、B-16区で北東方向へ向きを変え、B-16区とB-15区境付近まで延びる溝状遺構である。南端はC-24区とB-24区の境付近で南東方向へ向きを変え、延長約92m、最大幅3.5m、深さ0.5mであった。本遺構は様々な攪乱等で上部が削平を受け、幅が一定しないが、検出した中で最大規模のものである。B-24区でも本遺構の上部には攪乱が入り、詳細に確認はできなかったが、溝状遺構4号と6号を切っていると考えられる。C-22区では溝状遺構が枝状に伸び、溝状遺構8号と重なる。床面はC-23区付近からC-17区付近に向かって約1m下る。D-16区で北東方向に向きを変えると同時に床面が30cm程度高くなり、B-15区まではほぼ同じレベルである。埋土がII層に相当することや出土遺物、溝状遺構4号との関係から近世の遺構と判断した。

遺構内から多くの遺物が出土したが、69点を実測し掲載した。81は土師甎の底部で、底径7.4cmを測る。高台の内面中央が幾分凹む。内面と高台にスズが附着する。82は内黒土師器の坏で、高台を欠く底部である。83～87は、土師甎である。83は、口径13.2cm、底径8.2cm、器高2.9cmを測る。底部から口縁部には、直線的に開く器形である。底部には糸切り痕とヘラ切り痕の両方が残る。84は、口径12.8cm、底径9.8cm、器高2.6cmを測る。口縁部は、幾分外反する器形である。底部の切り離しは、糸切りである。85は底径8.4cmを測り、内面はヘラケズリによる凹凸が残る。底部切り離しは糸切りによる。86

は底径11.0cmで、内面中央部は凹んで器壁がかなり薄くなる。底部には糸切り痕が見られる。87は、底面中央部が肥厚する。底部切り離しは糸切りである。

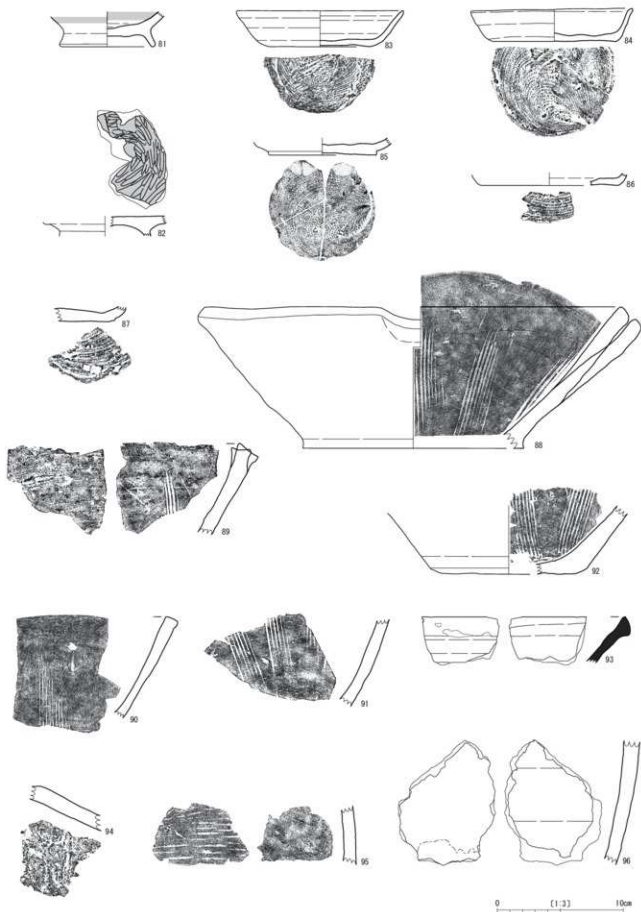
88～92は、播鉢である。88は片口の播鉢で、土師質の胎土をもち、内面は橙色、外面は褐色の色調を呈する。口径34.2cm、底径17.6cm、器高10.2cmである。89は口唇部に自然軸がかり、瓦質で放射状に3条のすり目をもつ。破片端部が幾分湾曲することから、注ぎ口をもつと考えられる。90は、11条のすり目をもつ。91と92は、いずれも放射状のすり目をもつ。93は須恵器の捏鉢で、玉縁状の口縁には釉薬がかかる。

94～97は、陶器片である。94は常滑産の甕の肩部で、自然軸がかかる。95は、古瀬戸産と考えられる甕の胴部片である。96は古瀬戸産の胴部片で、器種については不明である。97は古瀬戸産で、甕の胴部と考えられる。

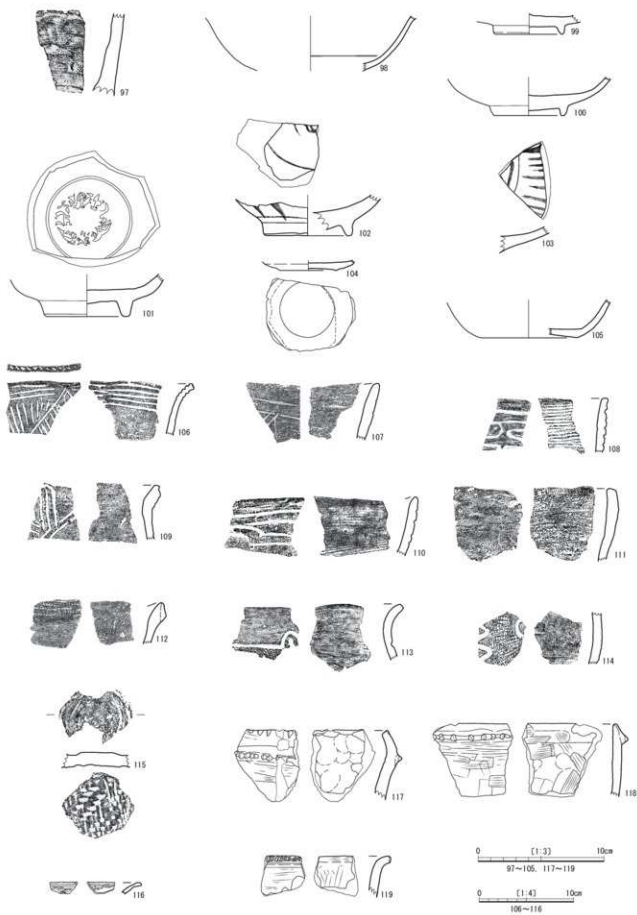
98～104は、青磁である。98は無文の碗で、口縁部は欠損するがやや外反すると考えられる。見込みに界線が巡る。14世紀頃の中国産と考えられる。99は碗の底部で、底径は5.2cmを測る。高台の外端は面取される角高台で、内面は露胎する。見込みの中央が盛り上がる。釉薬の色調は灰黄色、胎土にはぶい橙色を呈する。14世紀頃の中国産と考えられる。100は、底部から胴部が残存する無文の碗である。高台の外端には面取を施す角高台で、内面の一部は露胎する。龍泉窯産と考えられる。101は、見込みに團線と草花文様の印文を施す碗の底部である。底径は6.6cmを測る。高台内面の一部は露胎する。龍泉窯産と考えられる。102は碗の底部で、底径は7.0cmである。外面には團線と蓮文、見込みに界線と草花文が施される。高台内は露胎する。龍泉窯産と考えられる。103は、甕の胴部片である。釉薬は一定の厚さで均等にかかる。龍泉窯産と考えられる。104は、同窯系器の皿の底部である。底径は4.4cmを測る。体部中位で屈曲する器形である。また、体部下位から底部にかけては露胎する。軸は薄く透明で光沢をもつ。

105は、白磁の皿である。平底で胴部まで残存し、底径7.7cmを測る。中国産と考えられる。

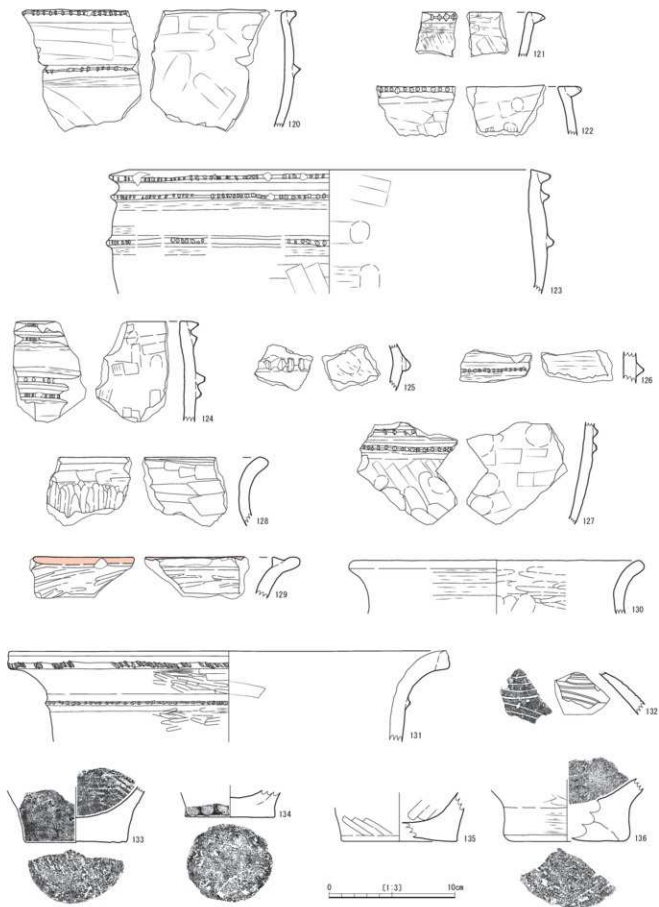
106～116は、縄文土器である。106は、沈線で幾何学紋様を施す菅煙式土器の胴部である。口縁部内面にも横位の沈線、口唇部にも刺突が施される。107～111は、指宿式土器である。107と110は、波状口縁となる。108の内面には糸痕が明瞭に施される。109は口縁部が幾分肥厚し、外反する。111は無文で、幾分内湾する器形である。112は、肥厚した口縁部に横位の貝殻刺突を施す市来式土器である。113・114は、唐滑縄文と沈線で文様を構成する土器である。113の口縁部は外反し、口縁部は平坦に仕上げる。器面調整は丁寧で、焼成は良好である。115は、網代痕が残る底部である。116は、玉縁状に口縁部が肥厚する縄文時代晩期の浅鉢である。全面に



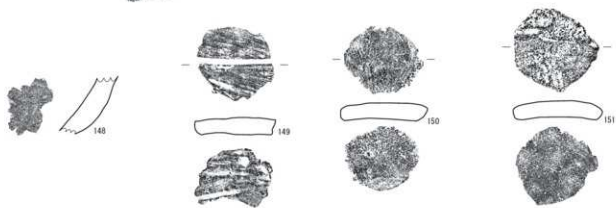
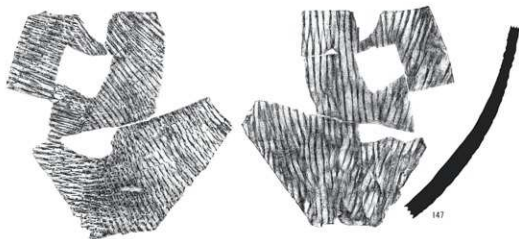
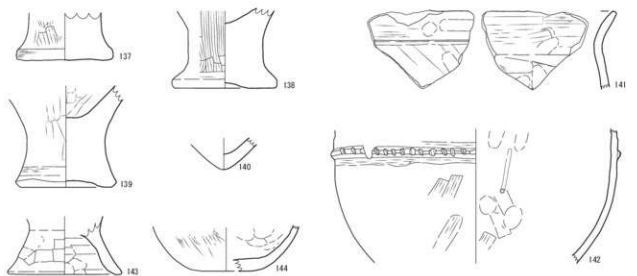
第43図 溝状遺構7号出土遺物(1)



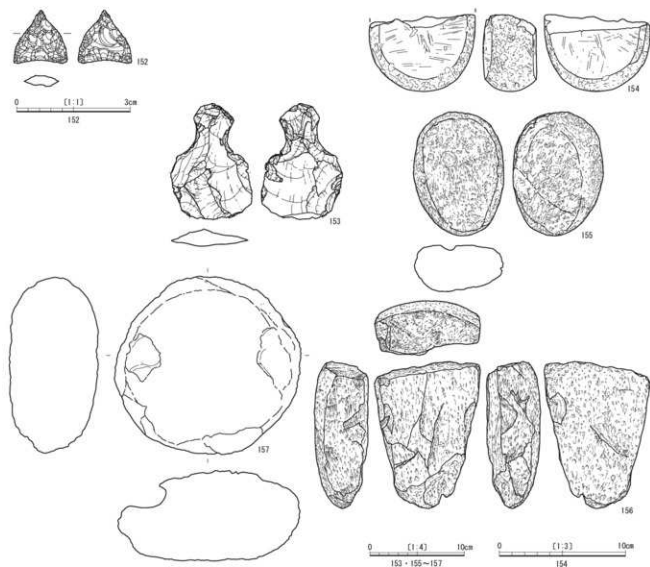
第44图 清状遗構7号出土遺物(2)



第45图 满汉道横7号出土遗物(3)



第46圖 清伏遺構7号出土遺物(4)



第47図 溝状遺構7号出土遺物(5)

亘ってミガキが施される。

117～140は、弥生土器である。117～127は甕、128～132は壺である。117は、内湾する器形をもつ口縁部である。面取りされた口唇外端と屈曲部に貼り付けられた突帯に刻みが施される。118は直線的に立ち上がる口縁外端に断面三角形の突帯を貼り付け、間隔の空いた刻みを施す。内外面とも器面調整は丁寧である。119は口縁端部が外反し、口唇部に刻みを施す。120はやや内湾する口縁部の外端と胴部に断面三角形の突帯を貼り付け、細かい刻みを施すものである。121・122は口縁部外端に断面三角形の突帯を貼り付け、刻みを施す。123は直線的に立ち上がる口縁部の上端と直下、さらに間隔をおいた下位に突帯を3条貼り付け、それぞれの突帯に刻みを施す。口径は35cmを測る。124は幾分内湾気味の口縁部外端に2条、間隔を空けた下位に2条の刻み目突帯が巡

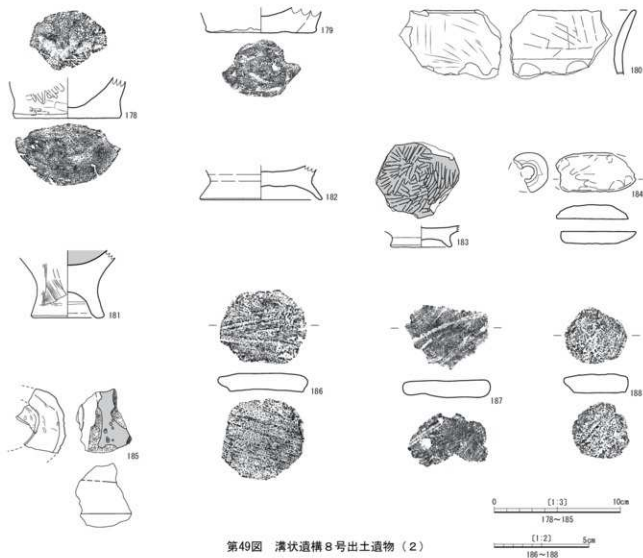
る。125～127は、いずれも胴部片で刻みのある突帯をもつ。125は、5mm程度の棒状工具を押し当てて刻みを施す。126は1条、127は2条の突帯に細かな刻みを施す。128～131は、外反する壺の口縁部である。129は内面に三角突帯をもち、口唇部から三角突帯まで朱が塗布される。焼成は堅固である。130は、口径22.4cmを測る。131は幅広い口唇部の中央に横位の凹線を巡らせ、その上下に刻みを施す。上部の刻みは表面の剥落のため、僅かに痕跡が確認できる。また、口縁部の屈曲部よりやや下方に細い突帯を1条巡らせるが、表面の摩耗で刻みの有無は不明である。口径は34.6cmである。132は肩部片で、沈線が弧状の文様が施される。

133～139は甕、140は壺の底部である。133～136は平底で、底部は高さのない円柱状となるもので、弥生時代前期と考えられる。137～139は平底で、底部は接地面が



第48图 溝状遺構8号出土遺物(1)





第49図 溝状遺構8号出土遺物(2)

張り出し、高さのある円柱状となる。138・139は、底面中央が凹む。弥生時代中期に比定できる。140は尖底気味の丸底で、小型の壺と考えられる。

141~144は、古墳時代の土器である。141は頸部で締まり、口縁部が外反する。142は胴部に1条の刻目突帯を巡らす。143は甕の脚で、底径は9cmである。144は、平底気味の丸底である。

145~147は、古代の須臾器である。145・146の外面には平行タタキが、147の外面には格子目タタキが施され、中岳産と考えられる。

148は焼塩壺の底部で、内面には布目痕が残る。

149~151は、土器の胴部片の縁辺部を加工した円盤形土製品である。151の下面には、赤色顔料の痕跡が残る。

152は、黒曜石を素材とした小型の石鏃である。基部の扱りは浅く、ほぼ正三角形の形状を呈する。153は打製石斧で、やや基部が大きく、バランスの悪いラケット形を呈する。下端部は欠損するが、顕著な使用痕は見ら

れない。石材は、ホルンフェルスである。154は磨礐石で、ほぼ半分欠損する。磨面はかなり平坦である。裏面の磨面右端には角度の異なる狭い磨面も見られる。銅緑部には敲打痕も残る。155・156は、加工痕がある軽石製品である。155は表裏面に磨面をもち、表面には径1.7mm、深さ5mm程度の穴が穿たれる。156は、表面以外の面に大振りの刃物状のもので大きく切り込まれている。157は暗淡紅色を呈する輝石安山岩を顔頭状に整形し、表面は平坦面を形成する。用途は不明である。

溝状遺構8号(第42図・第48・49図158~188)

D-16区からB-23区にかけてのIV a層で、溝状遺構7号の東側を沿うように検出された。長さ約70m、最大幅1m、深さは0.2~0.4mと溝状遺構7号より規模が小さい。北端は擾乱のため途切れ、南端は調査区外へ延びる。床面は溝状遺構7号より30~50cm高くなるが、同じように北側に向かって50~60cm低くなる。埋土や出土遺物から近世と考えられる。

遺構内から出土した遺物の中で、31点を実測・掲載する。158～160は近世の遺物で、肥前系と考えられる。158は磁器碗で、口径11.4cm、底径4.3cm、器高6.5cmを測る。口縁端部がやや外反し、畳付に砂粒が付着する。外面には草花文が施される。159は磁器碗で、外面には唐草文と考えられる文様が、内面には口縁部と見込みに界線が施される。160は陶器皿で、底径4.8cmを測る。見込みに砂目が4か所残る。

161～167は、中世の遺物である。161は口縁部を欠損する土師器の皿で、底径6.8cmを測る。成形は粗く、外面には一部スガが付着し、底部の切り離しは糸切りである。162は底部を欠損する青磁碗で、口径15.8cmを測る。口縁部が外反する器形で、無文である。163は、青磁碗の口縁部である。外面には蓮葉文が施される。162・163は、龍泉窯産と考えられる。164は青磁碗で、厚みのある器壁をもつ。外面には、蓮弁文が施される。165は青花碗の底部で、底径5.6cmを測る。外面には芭蕉文、見込みに丸線と蓮花文が施される。166・167は播鉢で、いずれもすり目が放射状に入る。

168～172は、縄文土器である。168は、波状を呈する口縁部片である。凹線を放射状に施文する。表面がかなりざらつており、二次焼成の可能性もある。169は、口縁端部に向かって器壁が薄くなる。外面には短沈線を連続して施す。168・169は、出水式土器と考えられる。170・171は器面調整の条痕が残る。外面には幅広い沈線で文様を構成する。いずれも指宿式土器である。172は直線的に開く口縁部で、その端部で幾分浅する。口縁部には横位の浅い沈線が施され、内面は浅い沈線により、段差が作られる。内外面ともヘラミガキが施される。西平式土器と考えられる。

173～179は、弥生土器である。173は、甕の口縁部である。口縁端部に貼り付けられた痕跡を残す断面三角形の突帯には、細かい刻みを施す。174は、甕の口縁部である。口縁端部に貼り付けた断面三角形の突帯上面は外傾へ傾斜し、その頂点は「M」字状となる。175は壺の口縁部で、口縁端部は丸く仕上げられるが、浅い沈線を施し、「M」字状となる。176は、玉縁状の口縁をもつ壺である。177は壺の肩部で、沈線を2条巡らせる。外面はミガキによる器面調整である。178は底径8.4cmを測り、底面には白色土が付着している。甕の底部と考えられる。179は底径は8.8cmを測り、外面はナデで丁寧に器面調整が施される。底面には付着した白色土が観察できる。甕の底部と考えられる。

180・181は、古墳時代の成川式土器である。180は甕の口縁部で、器壁が薄く仕上げられている。181は甕の脚部で、底径5.8cmを測る。

182・183は古代の土師器で、いずれも底部である。182は、底径9.6cmの碗である。183は底径4.8cmの内黒土

師器で、底面も一部黒色化している。184は長さ5.9cm、径3.1cmの土錘、185は輪の羽口片である。

186～188は円盤形土製品で、いずれも胴部片を利用してしている。

#### 溝状遺構 9号 (第50図)

C-21区、Ⅲ層上面で検出された。残存する長さ1.75m、幅0.58mを測る。この付近では攪乱のため、深さ5cmと残存状況が悪く、遺構の下部しか検出できなかった。溝状遺構はさらに南側へ延びると考えられるが、C-22区では検出できなかった。埋土中から遺物は確認できなかったが、埋土から中・近世の遺構と考えられる。

#### 溝状遺構 10号 (第50図189・190)

B・C-19区、ⅣA層上面で検出された。検出された長さ3m、最大幅0.57m、深さ0.18mを測る。この付近は表層を取り除くとⅢ層となり、遺構の上部層は削平されていた。埋土中から弥生土器等も出土したが、埋土から中・近世の遺構と考えられる。

埋土中から40点ほどの土器小片が出土した。189は、磨石で、表面に凹みが残る。190は5cm程度の敲石で、敲打痕が側面に残る。

#### 溝状遺構 11号 (第50図191・192)

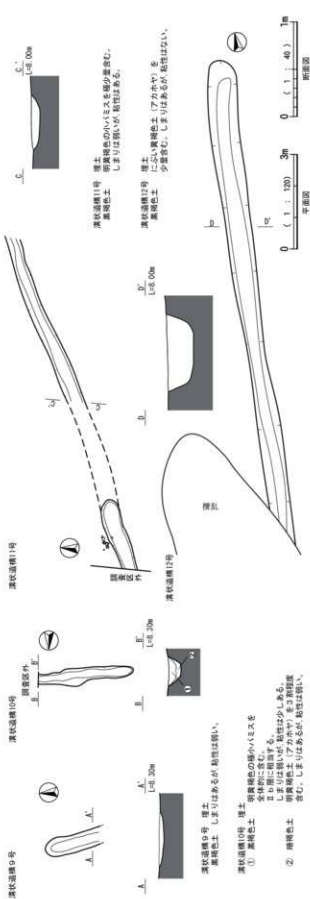
D・E-19区、Ⅲ層上面で検出された。E-19区の調査区境から東へ約2m延びる溝状遺構とD-19区を東西に約6m延びる溝状遺構が検出されたが、その規模と埋土の堆積状況から本来は繋がっていた遺構と判断した。検出面での最大幅が0.6m、深さはE-19区で6cm、D-19区で10cm程度でいずれも浅いが、本体はⅡ層から掘り込まれていたことを調査区境の土層断面で確認した。埋土から遺構の時期は、中・近世と考えられる。

埋土中からは主に弥生土器の小片が出土した。191は甕の胴部片で、細やかな刻みを施す突帯が巡る。192は壺の口縁部で、口唇部から内面にかけて赤色顔料が塗られている。

#### 溝状遺構 12号 (第50図193～197)

C-17～19区、ⅣA層上面で長さ14.6m、最大幅1m、深さ0.28m、ほぼ南北に延びる溝状遺構を検出した。南端は近現代の攪乱のため不明であった。出土遺物及び埋土から中世に比定できる遺構と考えられる。

193は、中世に属する瓦質の播鉢である。口唇部には浅い沈線が3条、内面には11条のすり目が放射状に施される。194は、内傾する口縁部の上端と下端に米粒大の刻みを施す突帯が巡る。外面には意図的か否かは不明だが、「N」か「W」に類似する線刻が観察できる。弥生時代前期に比定できる。195は、胴部片であるが、表面が摩擦している。196は、壺の肩部片である。ヘラミガキで丁寧に仕上げられ、細い貝殻刺突が曲線状に2段施される。搬入品の可能性が高いと考えられる。197は、指宿式土器の口縁部片で、内外面に横位の沈線が施される。

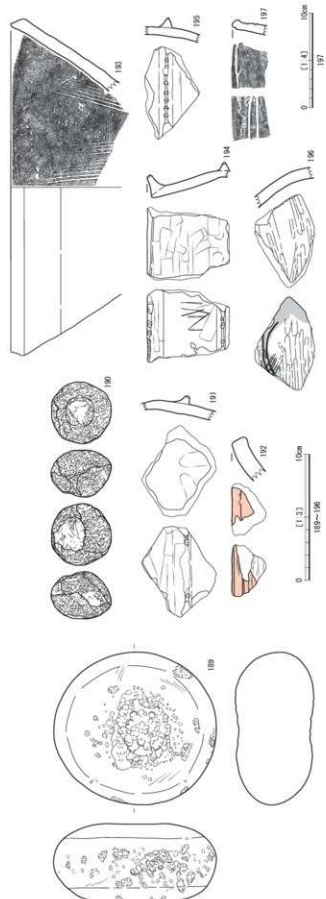


清状透構11号  
理土  
明黄褐色の小ハミを埋込み、  
黒褐色土  
しまりは粗いが、胎性は良。

清状透構12号  
理土  
に少し黄褐色土（ワカホ）を  
黒褐色土  
少量含む。しまりはあるが、胎性は良。

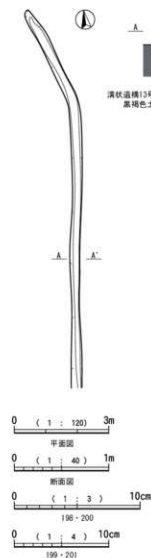
清状透構9号 理土  
黒褐色土 しまりはあるが、胎性は良。

清状透構12号 理土  
明黄褐色の小ハミを  
全体的に含む。  
まじりに相当する。  
しまりは粗いが、胎性は少しある。  
黒褐色土に若干の明黄褐色土を  
含む。しまりはあるが、胎性は良。

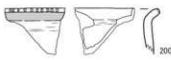
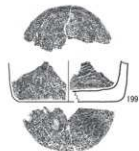


第50図 清状透構9～12号及び出土遺物

溝状遺構13号



溝状遺構13号 埋土  
 黒褐色土  
 下部にぶい明褐色土  
 (アカホヤ)を稀少量含む。  
 しまりはあるが、粘性は弱い。

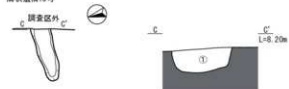


溝状遺構14号



溝状遺構14号 埋土  
 黒褐色土 しまりはあるが、粘性は弱い。

溝状遺構15号



溝状遺構15号 埋土  
 黒褐色土  
 明褐色の極小(ミス)を  
 稀少量含む。  
 しまりはあるが、粘性は弱い。

溝状遺構16号



溝状遺構16号 埋土  
 ① 黒色土  
 数分を含む明褐色の1cm大の  
 ブロックを稀少量含む。  
 しまりはないが、粘性はややある。  
 ② 黒褐色土と暗褐色砂質土が交互に堆積



第51図 溝状遺構13~16号及び出土遺物

## 溝状遺構13号 (第51図198~200)

C-17区から18区に亘って、IVa層上面で検出された。周辺は削平を受け、表層下はIVa層となる。溝状遺構12号に沿うようにほぼ南北に延びるが、北端は北西方向へ屈曲する。南端は擾乱のため不明であるが、さらに南方向へ延びると考えられる。長さ12.3m、最大幅0.4m、深さ0.15mを測る。

埋土から遺物が数点出土したが、3点図化した。198は内黒土師器の塊で、底径6.8cmを測る。古代・中世に比定できる。199は底部からは垂直に立ち上がる器形で、底径は10.6cmを測る。縄文時代後期と考えられる。200は口縁端部を折り曲げて外反させ、丸く仕上げた口唇部に刻みを施す。弥生時代前期に比定される。

## 溝状遺構14号 (第51図)

B-17区、IVa層上面で検出され長さ4.6m、幅0.25m

を測る。検出面からの深さは浅く6cmしかなかった。周辺はIII層まで削平を受け、本遺構はIVa層に掘り込まれた遺構の下部がかるうじて残存する状況であった。

埋土から遺物の出土は確認されなかった。

## 溝状遺構15号 (第51図)

B-17区、III層上面で検出された。表土下はIII層となり、これに掘り込まれた溝状遺構は長さ1.63m、幅0.63m、深さ0.23mを測る。東端は調査区外へ延び、西端の延長部分は削平により検出できなかった。

遺構内から土器小片が10数点出土したが、図化し得なかった。

## 溝状遺構16号 (第51図201)

C-16・17区、III層で検出された。本遺構はほぼ南北に延びるが、北端は削平を受けている。長さ3.1m、最大幅0.9mを測る。削平のため、遺構の下部しか残存せ

ず、検出面からの深さは僅か9cmであった。遺構内から縄文土器の小片が数点出土したが、埋土から中・近世の遺構と判断した。

201は波状口縁を呈し、波頂部は器壁が肥厚し、口唇部には刻みを施す。小片のため器種は不明であるが、鉢の可能性も考えられる。縄文時代後期の磨滑縄文である。

#### 溝状遺構17号 (第52図202~204)

C-16・17区、ⅣA層上面で検出された。長さ12.8m、最大幅1.2m、深さ0.1~0.2mを測る。ほぼ南北に延びるが、北端は南端より20cm程度低くなる。南端で土坑9号に、北端近くでは溝状遺構18号と溝状遺構19号に切られている。さらに、本遺構の床面を検出中に土坑10号を確認したことから、本遺構は土坑10号の上に構築されている。土坑10号は、さらに土坑29号を切る。溝状遺構17号・土坑10号・土坑29号の関係については土坑29号の項で述べる。埋土及び他の遺構との切り合い関係から中・近世に比定できる。

遺構内から弥生土器を中心に50数点の土器片が出土した。出土遺物の内、3点を掲載した。202は堯の口縁部で、端部に三角突帯を貼り付ける。突帯に刻目が施されたか否かについては、摩耗しているため不明である。203は内湾する口縁端部に三角突帯を貼り付け、細かい刻みを施す。いずれも弥生時代前期と考えられる。204は石製の未製品で、やや肉厚の素材剥片を用いる。

#### 溝状遺構18号 (第52図205~207)

一部D-16区にかかると、C-16区をほぼ北東から南西に横切る本遺構はⅣA層上面で検出された。北東側は溝状遺構17・19号を切り、南西側は溝状遺構16号の手前まで延びる。長さ6.5m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。

遺構内からは100点以上の遺物が出土した。黒曜石の剥片、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器と様々であった。とりわけ多いのが弥生土器片であった。ここでは出土遺物のうち、3点を掲載した。205は、土師器皿である。糸切り底の内面にスガが付着する。底径は10.0cmを測る。206は、内外とも明確な沈線で施す薄い器壁の土器である。縄文時代前期の管煙式土器である。207は幾分上底気味の底部で、丈の短い円柱状の形状をもつ。縄文時代後期に比定できる。

#### 溝状遺構19号 (第52図)

B・C-16区、ⅣA層上面で検出された。溝状遺構17号を切り、18号に切られる。B-16区から西方向へ約8m延びた付近で南西方向へ向きを変えるが、溝状遺構18号に切られているため詳細は不明である。長さ約11m、幅0.8~1mを検出したが、この付近は擾乱のため深さ約0.1m程度しか残存していなかった。

遺構内からの遺物出土はなかった。

#### 7 足跡 (第53・54・55図)

足跡はF-12・13区の一群(足跡1)、B-14区の一

群(足跡2)、E-9・10区及びF-10区の一群(足跡3)が検出された。

足跡は指や踵の形状がはっきりしているものを基本とし、平面形が台形状のもの、楕円形状のものを実測した。ただ、平面形は足跡状でも小さいものについては除外した。指の形状が残る足跡は、長さ20cmで幅10cm程度のものが多かった。また、埋土は灰白色と明褐色砂質土の混土が多かった。

足跡1は道跡4の北側に63か所、足跡2は道跡5の北側を沿うように16か所、足跡3は道跡1の南側と暗渠の北側に、さらに道跡1と暗渠の間に合わせて79か所確認された。足跡1・2は、低湿地(11~15区)基本層序のⅡ層での検出である。足跡3は、低湿地の基本層序のⅡa層での検出となる。ただし、E-10区ではⅡA層上位と中位で検出されたものがあり、その平均した検出面のレベルには17cmの差があった。検出面に比高差があることから時期が異なる可能性もある。

調査当初、表層下で検出されたことから新しい時代のもので考えていた。しかし、道跡に沿うように検出され、道跡の造成に使われた杭より総じて20cm程度検出レベルが低かった。このことから道跡(もしくは畦畔)との関連する水田に残った足跡で、時期については道跡が長い期間使用されていることから判断できなかった。

#### 8 土木遺構

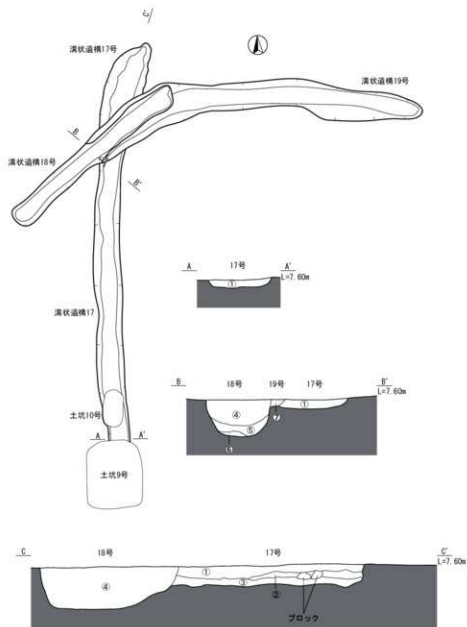
土木遺構は、軟弱な地盤に打ち込んだ杭列と敷丸太・敷粗朶・敷葉によって造られた道跡及び排水のための暗渠で構成されている。検出面は概ねⅡ層以上であるが、低湿地では層序が一定せず、明確に検出層を確認できなかった区域もある。現在、道跡の北側を西流する境川は、昭和時代の早い時期までは調査区の7区付近を流れていた。このことから、この周辺の地盤は、かなり軟弱と考えられる。

なお、敷丸太・敷粗朶・敷葉とは、樹木の枝や葉を敷き並べて透水性を良くすることにより地盤や盛土を補強する工法のことである。遺構を検出した周辺は氾濫原で地盤が軟弱なことから、これらの工法が採られたと考えられる。

#### (1) 道跡 (第17・53・56~62図208~220)

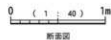
調査区内において主に南北方向と東西方向に延びる2列一組を単位とした杭列が検出された。杭列は全て連続していないが、同じ幅と方向性をもち、部分的に杭列の間から敷丸太等も確認されたことから道跡とした。杭列は盛り土で道を造成するにあたり、路肩部分に打ち込み補強したものと考えられる。

検出された道跡は、便宜上1から7の番号を付して記述する。道跡の造成に使われたと考える杭9点については、放射性炭素年代測定を行っている。その杭の出土地点については、第58図に示した。詳細な測定結果は、第



溝状遺構17~19号  
埋土

- ① 黒褐色土 濃い黄褐色砂質土に濃い赤褐色の鉄成分を極少量含む。しまり、粘性ともあるが、部分的にしまりの弱い所もある。
- ② 黒褐色土 濃い黄褐色土や褐色土などのアカホヤブロックを含む。
- ③ 黒褐色土 明黄褐色土を少量含む。しまりはなく、粘性はある。
- ④ 黒褐色土 赤褐色の鉄分ブロックを少量含む。しまり、粘性ともややある。
- ⑤ 黒褐色土 しまりはなく、粘性はややある。
- ⑥ 黒色土と黒褐色土の混土 濃い赤褐色の鉄成分を全体に極少量含む。
- ⑦ 黒褐色土 濃い赤褐色の鉄成分を全体に極少量含む。しまり、粘性とも弱い。



第52図 溝状遺構17~19号及び出土遺物

3分冊「第8章自然科学分析」を参照いただきたい。

#### 道跡1

低湿地部のE-8区から低地部のD-E-17区にかけて検出された。E-8区から多少湾曲しながらD-15区までほぼ南北に伸び、D-16区で南西方向へやや向きを変える。未検出部分もあるが、1条の道跡とするに延長約90mとなる。杭列は重複するが、2列一組を単位とすると幅約2mと考えられる。低湿地部の8-9区では路床に多量の枝葉・丸太・板材等を敷いた敷粗朶が確認された。この付近では軟弱な地盤に対応するため杭に加えて敷粗朶による工法を用い、その上に盛り土を行い道を造成したと考えられる。杭は路肩部分だけでなく敷かれた粗朶等の間からも検出されている。

部分的ではあるが、道跡1の詳細な実測図及び断面図を第56・57図に示した。断面図は見通し図であるが、その範囲については、矢印で示してある。また、道跡1を構成する杭及び丸太8点(試料No58~64・66)の放射性炭素年代測定の結果は次のとおりである。

試料No58	紀元前6~5世紀
試料No59	10~11世紀
試料No60	14世紀
試料No61	14世紀
試料No62	18~19世紀
試料No63	15~16世紀
試料No64	14世紀
試料No66	14世紀

E-10区では3条の杭列がほぼ平行して南北に伸びる。試料No60・No64を含む杭列と試料No59・No61・No63を含む2条の杭列は同じ幅をもちながら東よりにやや湾曲する。試料No60・No61・No64の放射性炭素年代測定結果は14世紀で、ほぼ同時期に道跡に打設された杭と考えられる。同じ杭列でも試料No59・試料No63は異なる測定結果であるが、同じ道が改修や補強を繰り返しながら継続的に使用されたと思われる。試料No62を含む残りの1条は、E-10区から9区へは北進する。明確に2列一組の杭列は確認されなかったが、その西側には杭列に平行して暗渠が検出されたことから近世の道跡と考えられる。

また、試料No60を含む2列一組の杭列と試料No66を含む2列一組の杭列は連続していないが、その方向性と杭の年代測定結果が同じであったことから連続する道跡と判断した。D-15・16区境でも道跡は途切れるが、周辺に杭列の検出がなかったことから連続すると判断した。

さらに、試料No59を含む杭列の東側には敷丸太と数本の杭が確認されていることから、それぞれに道跡の可能性もある。つまり、道跡1と便宜的に番号を付したが、試料No60と61を含む杭列で構成される14世紀の道跡の西側に18~19世紀の道跡があり、南側には時代は不明であるが、もう一条の道が造成されたか、道の拡幅が行われ

た可能性も考えられる。同じように13区から17区にかけても杭列が数条見られることから、道跡は重複していることが考えられる。

E-10区の道跡1(第56図実測図1)では杭列と杭列の間の粗朶等はE-9区と比べると少ない。断面図ではIIa層に土層注記の⑦(灰黄褐色砂質土)に記される黄褐色砂質土が交互に堆積)が入り込んでいる。このことから杭列の間に人為的に土を入れ、道を造成した可能性もある。ただし、人為的に土を入れた造成面が堅くしまったり、その上部に硬化面が確認されたという記録はなかった。また、E-9区の道跡1(第57図実測図2)は粗朶でしがらみを組み、そこに杭を打設している状況が確認できた。しがらみの両側には、さらに多くの杭が打設され、杭列となるが、杭の長さには統一感はない。また、E-12区では道跡3と交差する付近で敷葉も確認されている。同じ道跡であってもE-10区とE-9区では工法に違いがあるのは、E-9区の地盤がより軟弱であったことが推測される。

なお、試料No58はIII層出土で、資料No59~64・66はII層出土もしくはII層からの打設である。試料No58の杭は、出土層から道跡1を構成する杭ではないと考えられる。

#### 道跡2

E・F-8区をほぼ東西に伸びる。長さ約9m、幅約2mで検出された。敷丸太・敷粗朶・敷葉工法で造成され、E-8区で道跡1の北端と交差する。調査時には確認されていないが、平面図では北西から南東へ伸びる道跡とも交差しているようにも見える。道跡2は、道跡1より板材や丸太が多く使われている。田境川が7区付近を西流していたことから堤防の役割も担っていた可能性も考えられる。また、E-8区ではヘゴの葉柄あるいは中軸と考えられるものがほぼ同じ方向に向きをそろえた状況で確認された。さらに、これの上には板材や丸太を重ねた状況が3つの層にわたって確認された。

#### 道跡3

B-E-12区で検出され、東西方向にほぼ直線的に伸びる。延長は調査区の東西幅と同じ約40m、幅は2m程度である。東端に行くにしたがって杭の検出範囲が広がるが、道の補修や付け替え等が考えられる。E-12区では道跡1とはほぼ直角に交わり、さらに西へ伸びる。

道跡3を構成する杭1点(試料No65)を放射性炭素年代測定し、11~12世紀の結果が得られた。測定結果から道跡1とはほぼ同時期に造られていたと考えられる。

#### 道跡4

一部杭列が検出されなかった部分もあるが、E-13区で道跡1から分岐し湾曲しながら西へ伸び、さらに調査区外へ続くと考えられる。検出された道跡は長さ約12mで幅は2mに満たないが、西端では幾分広がる。F-13区では道跡の北側に63か所の足跡が検出されている。

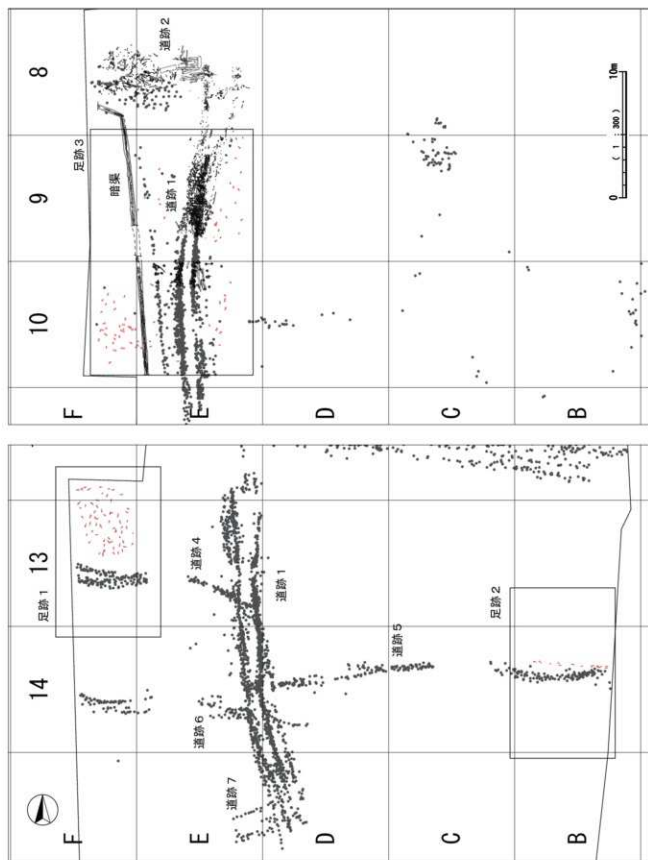
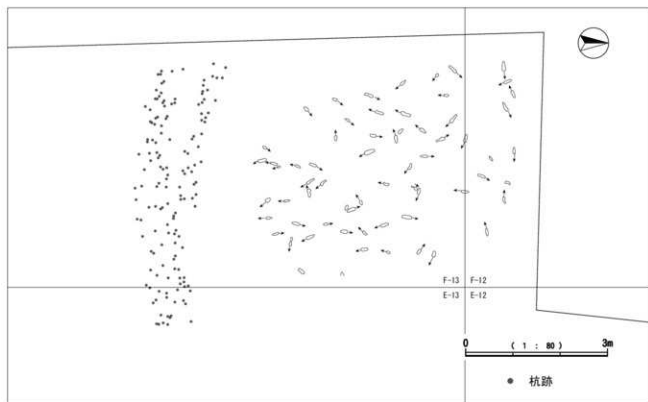


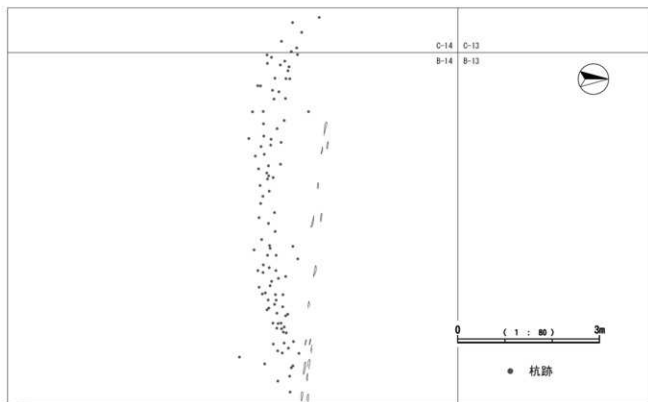
圖 53 圖 福 田 縣 野 間 町 長 十 一 丁 遺 址



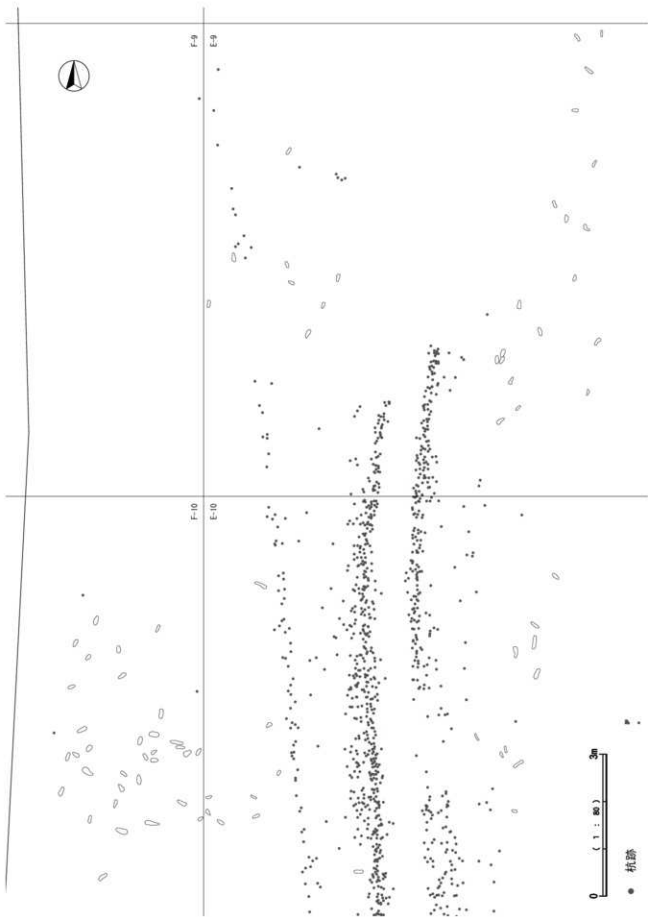
足跡 1



足跡 2

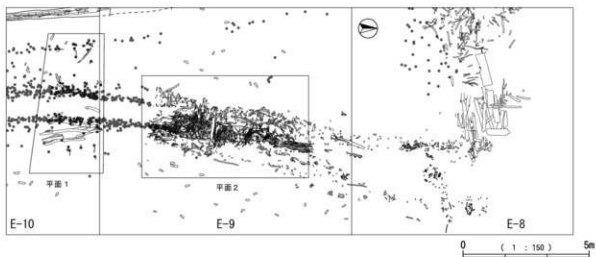


第54図 足跡 1・2

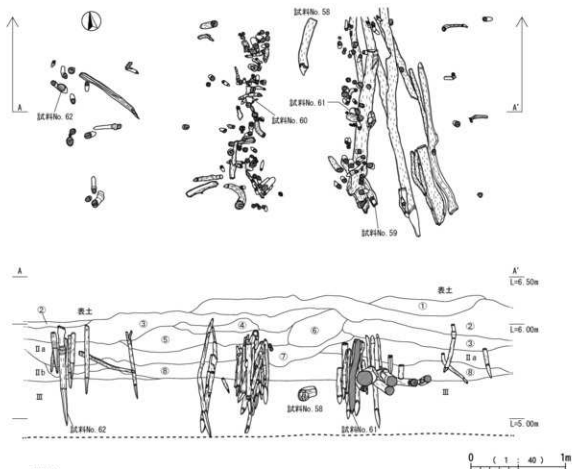


第55図 足跡3

道跡1実測位置図



平面1

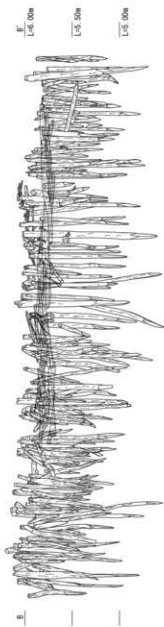
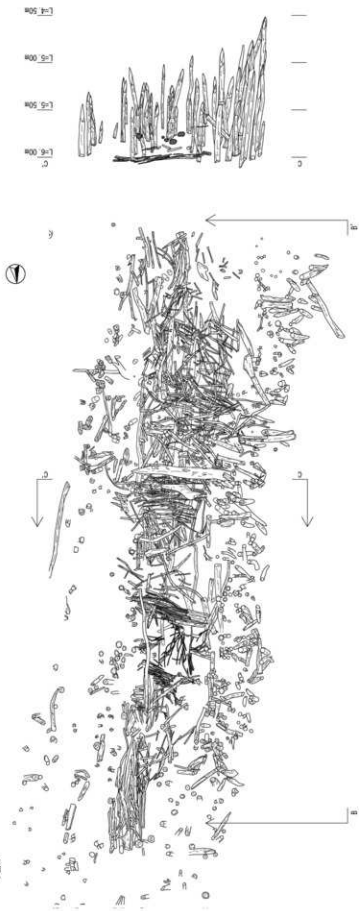


道跡1

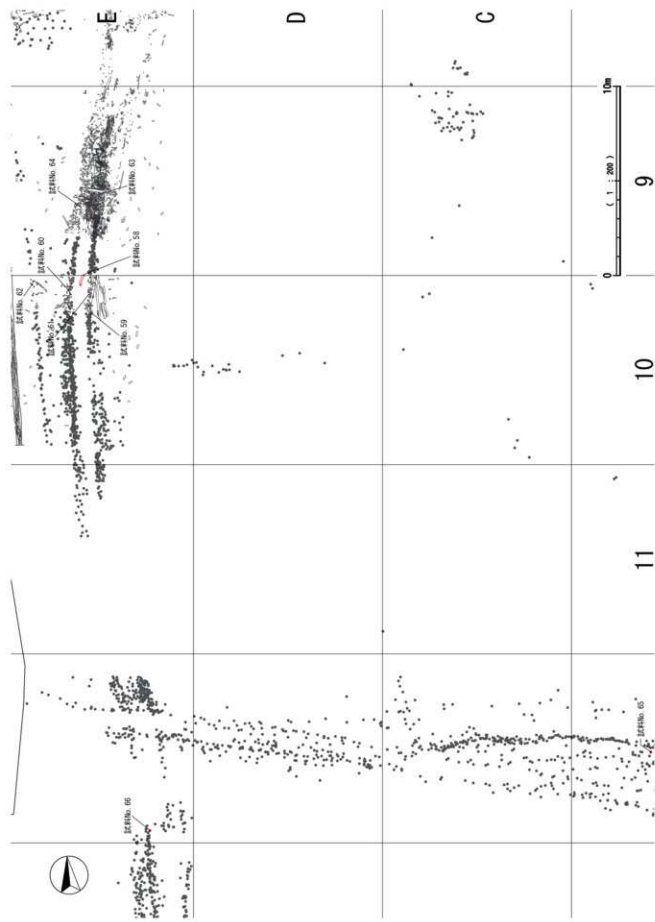
- |   |   |
|---|---|
| <p>① 灰褐色砂質土と褐色砂質土が交互に堆積。<br/>しまりはない。</p> <p>② 黒褐色土 鉄分を多く含む。しまりあり。</p> <p>③ 褐色土 <math>\phi</math> 1m以下の小礫を含む。<br/>鉄分を多く含む。しまりあり。</p> <p>④ 褐色砂質土と灰褐色砂質土の交互。<br/>しまりはない。</p> | <p>⑤ 黒褐色粘質土<br/>粘性はあるが、しまりはない。</p> <p>⑥ にぶい茶褐色砂質土<br/>上部は砂質が強い。しまりはない。</p> <p>⑦ 灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が交互に堆積。</p> <p>⑧ 灰黄色砂質土と黒褐色砂質土と互層がマール状に堆積。</p> |
|---|---|

第56図 道跡1実測図(1)

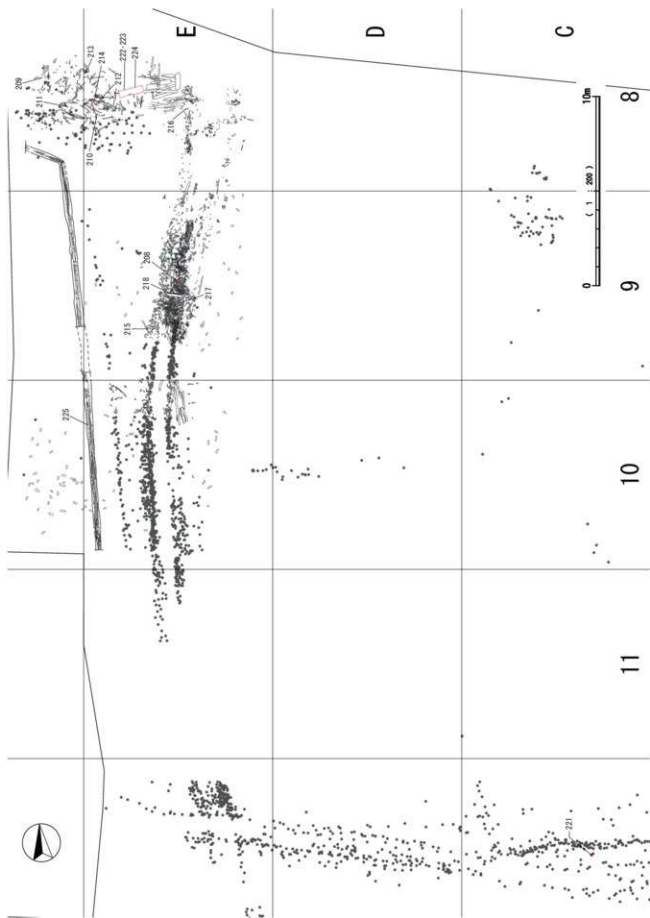
甲種2



第57圖 道跡1 葉刺圖(2)



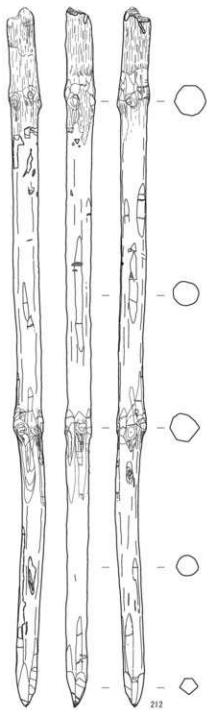
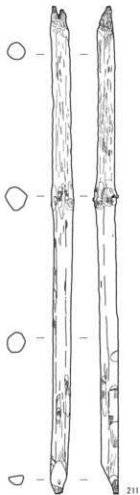
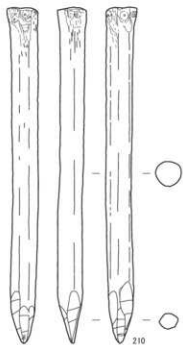
第58圖 放射性炭素年代測定試料採取地点



第59圖 杭等出土地点

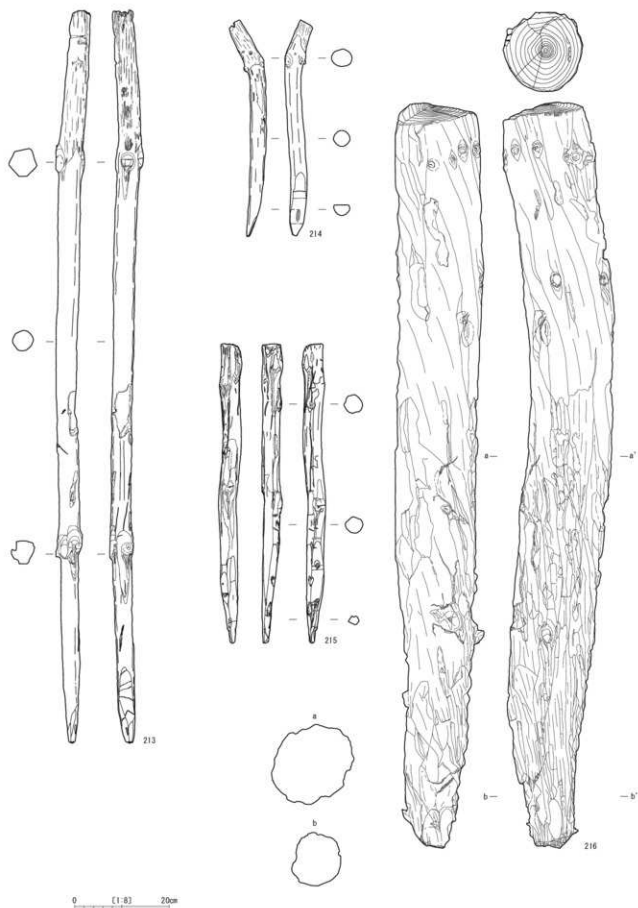


0 (1:4) 10cm



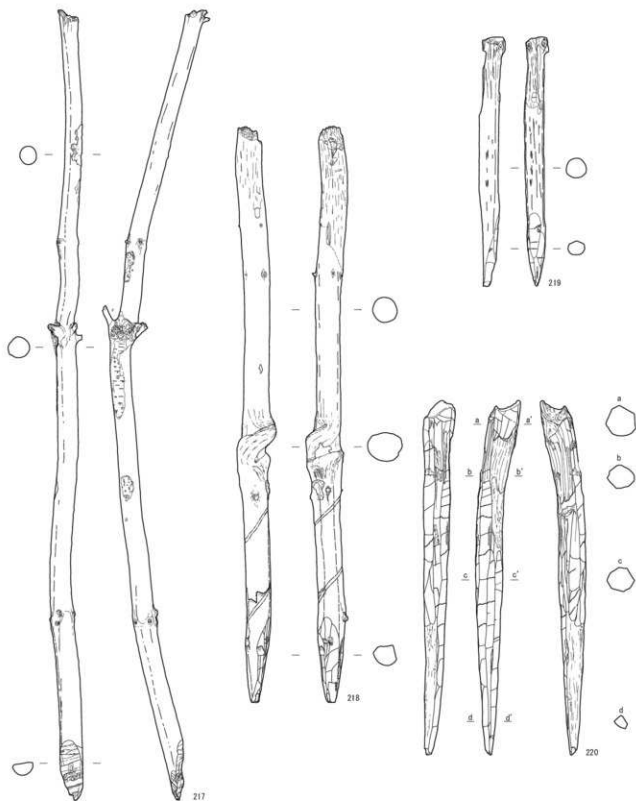
0 (1:8) 20cm

第60圖 道跡関連遺物(1)



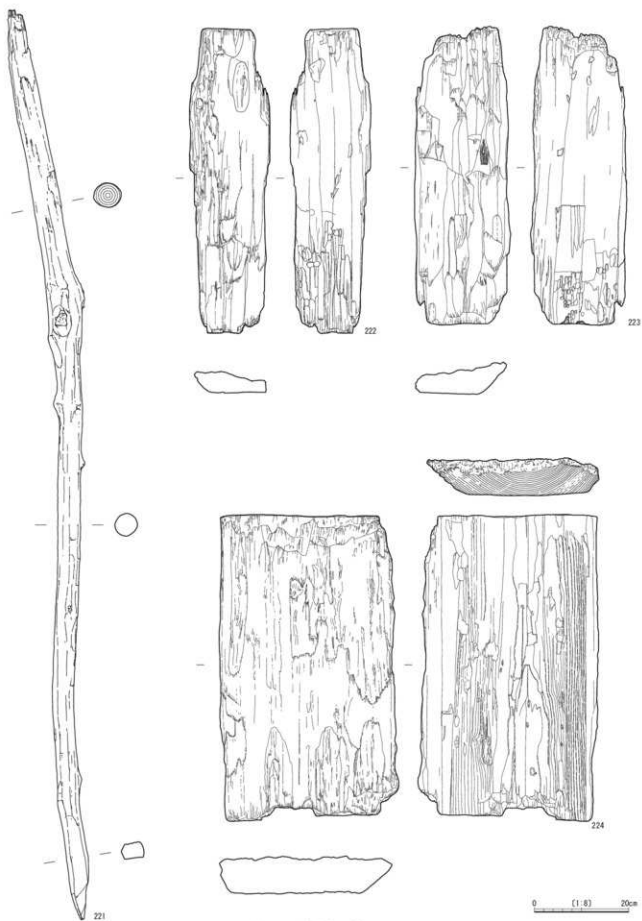
第61図 道跡関連遺物 (2)





0 [1.8] 20cm

第62圖 道跡関連遺物（3）



第63圖 道跡関連遺物(4)

#### 道跡5

D-14区で道跡1から分岐し、東側の調査区域まで延びる。途中、未検出部分もあるが、長さ約27m、幅約1m程度を測る。

#### 道跡6

E-14区で道跡1から分岐し、西側へほぼ直線的に延びる。杭列の検出されなかった部分も含め、その長さは約14m、幅は1m程度である。道跡1を挟んで1列の杭が3m程検出されたが、道跡か否かは不明である。

#### 道跡7

D-15区で道跡1から分岐し、西側へ3mほどしか検出されなかったが、さらに西側へ延びると考えられる。幅は約2mと東西の延びる道跡では広い。

道跡1～7以外にA～D-8～11区でも杭が確認されている。8区から低地部の17区にかけて検出され、その総数は5,721本を数えた。杭の長いものは192cm、平均で51.5cmであった。直径は1cmから10.5cmのものがあり、平均は4.0cmであった。杭先は鉄製工具で1～2回切り取って尖らせてあるが、その尖らせ方に特徴の規則性は確認できなかった。また、敷丸太は、特に地盤が軟弱な8区から10区で確認されている。その径は10～15cmのものも多く、長さは短いもので50cm、中には200cmを超えるものもあった。丸太を敷いた同じ範囲に打ち込まれた杭もあり、補強の意味合いもあると考えられる。

道跡を造成する際に使用されたと考えられる杭は低湿地部の8区から低地部の17区にかけて検出され、その総数は5,721本を数えた。杭の長いものは192cm、平均で51.5cmであった。直径は1cmから10.5cmのものがあり、平均は4.0cmであった。杭先は鉄製工具で1～2回切り取って尖らせてあるが、その尖らせ方に特徴の規則性は確認できなかった。また、敷丸太は、特に地盤が軟弱な8区から10区で確認されている。その径は10～15cmのものも多く、長さは短いもので50cm、中には200cmを超えるものもあった。丸太を敷いた同じ範囲に打ち込まれた杭もあり、補強の意味合いもあると考えられる。

#### 道跡関連遺物

道跡に関連する遺物は、まとめて掲載する。遺物の出土地点については、第59図に示した。

208は、E-9区の道跡1から出土した縄である。道跡の上部の粗朶が検出された砂質土から出土した。結び目があるため全長は不明で、太さは7mm程度で材質はシュロと考えられる。根元は結ばれており、先端はちぎれたような形状である。放射性炭素年代測定の結果、15世紀の数値を得た。道跡1の敷粗朶を構成する杭（試料No 63）の年代測定結果が似たような数値を示すことから道跡1を造成する際の杭や粗朶を束ねた可能性がある。

209～221は、杭である。209～214・216は道跡2を、215・217～220は道跡1を、221は道跡3を構成する杭である。219と220の出土地点は示していないが、E-9区からの出土で道跡1を構成する杭である。209は長さ66.4cm、太さ4.9cmで基部は折れている。杭の先端は、2つの面取りを行っている。210は長さ71cm、太さ6.5cmで、基部は折れていると考えられる。杭の先端は、3回面取りを行い尖らせている。211は長さ103.2cm、太さ5.3cmで基部は折れ、杭の先端は1回だけ面取りが行われる。212

は長さ147.9cm、太さ6.4cmの完形品である。杭の先端は、3回の面取りを行い尖らせている。213は長さ155cm、太さ6cmの完形品で、2つの面取りが残る。214は長さ45.6cm、太さ4.5cmで基部は欠損する。杭の先端は、1回の面取りで鋭く加工している。215は長さ63.3cm、太さ4.2cmで基部は欠損する。面取りを3回行っている。216は長さ158cm、太さ18.2cmを測り、地中に打設されていた。他の杭の太さが5cm程度であることから特徴的な杭である。杭の先端が僅かに加工しているように観察でき、先端部以外には樹皮が残る。217は長さ164cm、太さ8cmの完形品である。先端は1回の面取りが行われる。218は長さ121.7cmと短い完形品と考えられる。太さ7.3cmで3回面取りが行われる。219は長さ52.7cm、太さ4.2cmで基部は欠損する。杭の先端は、1回の面取りが行われる。220は長さ75.1cm、太さ6.4cmで基部は欠損する。杭の先端部の面取りは丁寧に4回行われる。221は出土した杭の中でも最長の192.5cm、太さ8.2cmを測る。杭の先端を3回の面取りで尖らせているが、他は樹皮が残る。

222～224は、E-8区の道跡2から出土した板である。本来1枚の板であったが、軟弱で、取り上げる際に割れたものである。本来は長さ128cm、幅約36cmの大きさで、厚さは222が4cm程度、224が8cmと一定しない。222の左側面、223の右側面、224の両側面が同じような形状であることから面取りを行った可能性が高い。何らかの部材であったものを再利用したと考えられる。

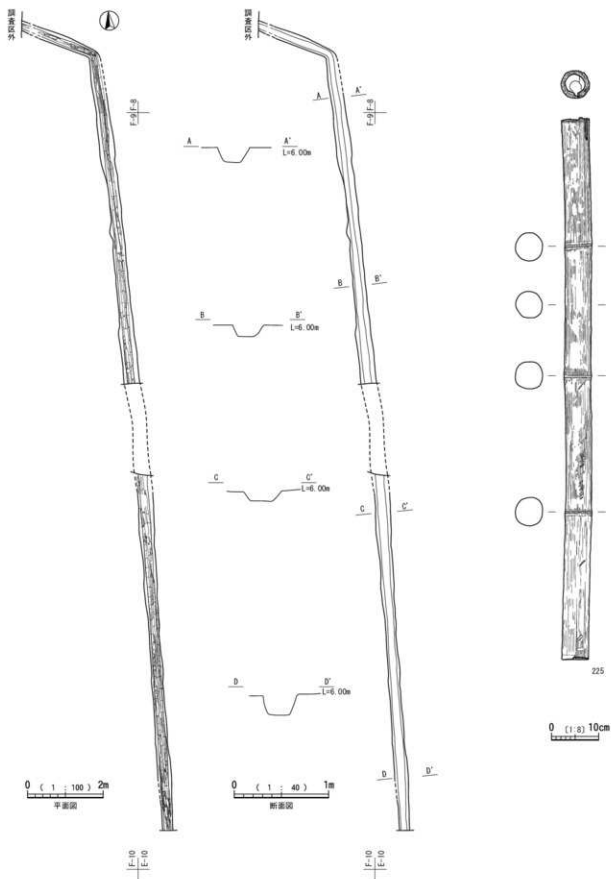
#### (2) 暗渠 (第64図225)

F-8区からE-11区にかけてⅡA層で、延長約20mにわたって暗渠と考えられる遺構が検出された。F-8区の調査区域から南東方向へ約2m延びた後、ほぼ南側へ角度を変え、E-10区まで直線的に延びる。幅約25～35cm、検出面からの深さ10～20cmの溝の中に長さ約2m、太さ3～6cm程度の竹を隙間なくほぼ4本ずつ敷き詰められていたが、土圧のために潰れた状態であった。溝の底には竹を支えるためと考えられる横木が3本確認された。床面は南に行くに従って低くなる。

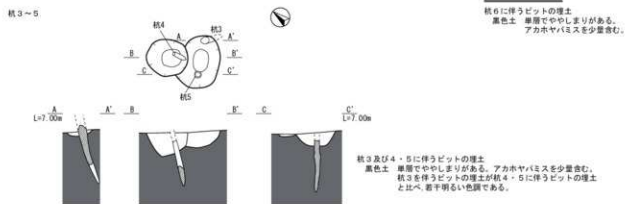
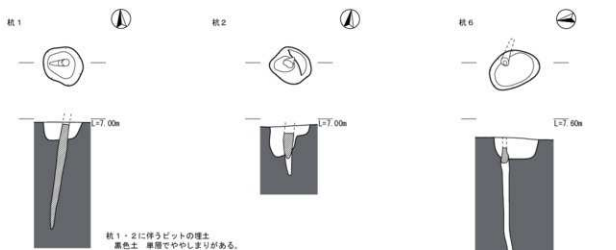
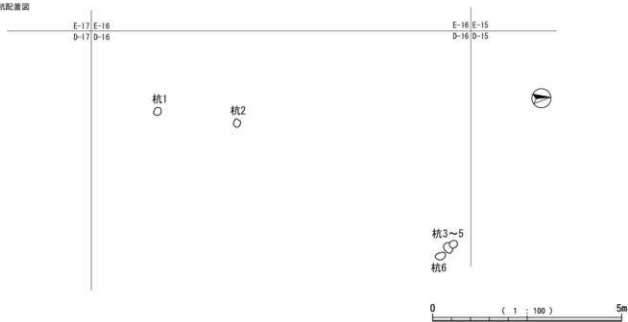
225は、溝に敷き詰められた竹である。長さ114.6cm、径5.8cmを測る。節は、他の竹と同様にくり貫かれていた。

#### (3) ビットを伴う杭 (第65図)

ビットの中に意図的に杭を打設したか否か等の関係性や時期は不明であるが、道跡等との関連も考えられることから、便宜的にここに掲載した。D-16区でビットに打ち込まれた杭が5本検出された。全ての杭の先端部は加工して尖らせて、ビット内に打設しているように見える。基部は欠損しているため、打設時の全長は不明である。また、ビットの床面からさらに60cm程度打ち込まれた杭もあれば10cm程度のもので様々である。ビットの径は20cm程度で、平面形は円形もしくは楕円形である。ビットの埋土は黒色土の単層であった。



第64図 暗渠及び出土遺物



杭6に伴うビットの埋土  
黒色土 単層でやしまりがある。  
アカホヤバミスを少量含む。



第65図 ビットを伴う杭

第5表 中近世遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（1）

地区 館名	調査 番号	遺構名	出土区	種類	形状	部位	時代	法量 (cm)		法量		色澤		焼成	土質	土質						備考		
								口径 (直径)	底径 (底径)	高さ (最大高)	外面	内面	文様			外面	内面	灰白	灰黒	赤	黒		黄	緑
27	5	P6	C-26	土器	壺	口縁部	弥生時代 前期	-	-	ナデ	ナデ	黒目灰青	紅い 裏焼	紅い 裏焼	良好	-	○	○	○	○	○	○		
	7	P8	C-25	土器	深鉢	底部	縄文時代 後期	-	6.2 (11.2)	ナデ	ナデ	黒目灰青	紅い 裏焼	紅い 裏焼	良好	-	△	○	○	○	○	○		
	9	P10	D-25	土器	深鉢	口縁部	縄文時代 中-後期	-	-	粗面正直 ナデ	ナデ	黒目灰青	紅い 裏焼	紅い 裏焼	普通	-	△	○	○	○	○	○		
	10	P11	D-29	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	黒目灰青	紅い 裏焼	黒	普通	-	○	○	○	○	○	○		
	11	P12	C-29	土器	深鉢	口へ 裏部	縄文時代	-	-	工具ナデ 赤黒	工具ナデ	黒目灰青	紅い 裏焼	黒	普通	-	○	○	○	○	○	○	丸底式	
	12	P13	C-29	土器	壺	底部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	粗面正直	-	黒	普通	-	○	○	○	○	○	○		
	13	P14	C-29	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	黒目灰青	紅い 裏焼	紅い 裏焼	良好	-	○	○	○	○	○	○		
	14	P15	C-28	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	ナデ	ナデ	沈み	紅い 裏焼	紅い 裏焼	良好	-	○	○	○	○	○	○	指形式	
	15	P16	C-27	土器	壺	口縁部	弥生時代 前期	15.8	-	(4.5)	粗面正直 ナデ	粗面正直 ナデ	沈み, 沈 焼	紅い 裏焼	黒	良好	-	○	○	○	○	○	○	入来式
	16	P17	D-23	土器	深鉢	底部	縄文時代 後期	-	7.5 (13.5)	ナデ	ナデ	-	灰黒	紅い 裏焼	普通	-	○	○	○	○	○	○	縄文式	
	17	P18	D-23	土器	鉢	口縁部	縄文時代	-	-	ナデ	ナデ	内面に 黒い点	黒	黒	良好	-	○	○	○	○	○	○	西平系	
	18	P19	D-21	土器	深鉢	底部	縄文時代 後期	-	3.6 (11.6)	ヘラミガキ	ナデ	-	紅い 裏焼	黒	普通	-	○	○	○	○	○	○		
	19	P21	D-19	土器	深鉢	底部	縄文時代 後期	-	11.0 (13.9)	ナデ	ナデ	-	紅い 裏焼	黒	良好	-	○	○	○	○	○	○	ちりり	
	20	P21	D-19	土器	深鉢	口縁部	縄文時代 後期	-	-	ナデ	ナデ	沈み	黒	黒	普通	-	○	○	○	○	○	○		
	21	P22	D-20	土器	壺	裏へ 裏部	弥生時代	-	8.3 (16.5)	ミガキ, ナ デ	ナデ 粗面正直	-	黒	紅い 裏焼	良好	-	○	○	○	○	○	○	入来?	
	22	P22	D-20	土器	壺	底部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	粗面正直 ナデ	ナデ	黒	紅い 裏焼	普通	-	○	○	○	○	○	○	白土?
	23	P23	D-19	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	ナデ	ナデ	溝線刻文 (?)	黒	黒	良好	-	○	△	○	○	○	○	商業系	
	24	P24	B-18	土器	壺	底部	弥生時代	-	6.8 (8.2)	工具ナデ 粗面正直	ナデ	-	黒	紅い 裏焼	良好	-	○	○	○	○	○	○	?	
	25	P25	B-18	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	-	紅い 裏焼	灰	良好	-	○	○	○	○	○	○		
	26	P26	C-17	土器	深鉢	底部	縄文時代 後期	-	9.6 (13.2)	ナデ	ナデ	-	黒	黒	良好	-	○	○	○	○	○	○		
	27	P27	B-17	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	-	紅い 裏焼	紅い 裏焼	普通	-	○	○	○	○	○	○	赤色顔料	
	28	P28	C-16	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	沈み	赤黒	紅い 裏焼	良好	-	○	○	○	○	○	○		
29	土器甲	C-22 C-23	土器	壺	底部	弥生時代 前期	-	-	ナデ	ナデ	黒目灰青	黒	黒	普通	-	○	○	○	○	○	○			
31	33	土器甲	C-17	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	沈み	赤黒	紅い 裏焼	良好	-	○	○	△	○	○	○	赤色顔料 スス ちりり ヘラミガキ	
	33	土器甲	C-17	土器	杯	底部	中世	13.2	7.3	4.2	粗面 ヘラケズリ	粗面 ヘラケズリ	紅い 裏焼	紅い 裏焼	普通	普通	○	○	○	○	○	○		
32	35	土器12号	B-16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	赤黒・ナ デ	赤黒・ナ デ	沈み	紅い 裏焼	紅い 裏焼	良好	-	○	△	○	○	○	○	指形式	
	36	土器12号	B-16	土器	深鉢	底部	縄文時代 前期	-	-	赤黒, ナ デ	赤ナ デ	粗面	紅い 裏焼	灰白	不良	-	○	○	○	○	○	○	商業式	
35	40	土器甲	C-27 C-28 C-29	土器	灯籠	底部	中世	7.6	5.6	1.9	粗面ナ デ	粗面ナ デ	-	紅い 裏焼	紅い 裏焼	普通	普通	○	○	○	○	○	○	スス ちりり ヘラミガキ
	41	土器甲	C-27 C-28 C-29	土器	壺	底部	中世	8.1	7.0	2.3	粗面ナ デ	粗面ナ デ	-	灰白	灰黒	普通	普通	○	○	○	○	○	○	入来?式
	42	土器甲	C-27 C-28	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	突面	黒	黒	普通	-	△	○	○	○	○	○		
	43	土器甲	C-27 C-28	土器	壺	底部	弥生時代	-	-	ヘラナ デ	ヘラナ デ	三角突面	紅い 裏焼	黒	普通	-	○	○	○	○	○	○	○	
	44	土器甲	C-27 C-28	土器	壺	口縁部	古墳時代	-	-	ナデ	ナデ	沈み	紅い 裏焼	紅い 裏焼	良好	-	○	○	○	○	○	○	縄文式	
	48	土器5号	C-24	土器	深鉢	壺へ 裏部	古代C へ	-	14.7 (15.9)	-	-	-	-	オリ ブ	黒	普通	-	○	○	○	○	○	○	自然
38	54	土器甲	C-22 C-23	土器	火鉢	底部	中世	-	-	工具ナ デ	工具ナ デ	赤黒(黒) 凸クツブ	黒	黒	普通	普通	○	○	○	○	○	○		
	55	土器甲	C-22 C-23	土器	フイゴ	口	中世	-	-	工具ナ デ	工具ナ デ	-	紅い 裏焼	紅い 裏焼	普通	-	○	○	○	○	○	○		
41	56	溝川遺構 1号	D-29	土器	鉢	口縁部	弥生時代	-	-	ナデ	ナデ	-	黒	黒	普通	-	○	○	○	○	○	○		
	64	溝川遺構 5号	B-24 B-25	土器	壺	底部	弥生時代	-	7.6 (13.0)	ナデ	ヘラケズリ	-	黒	灰	良好	-	○	○	○	○	○	○	○	私本館へ 譲渡式
	75	溝川遺構 4号	C-O-1 -2-25	土器	鉢	口縁部	中世	-	-	粗面 ヘラケズリ	粗面 ヘラケズリ	-	黒	灰	良好	-	○	○	○	○	○	○		
	76	溝川遺構 4号	C-O-1 -2-25	土器	鉢	口縁部	中世	-	-	粗面 ヘラケズリ	粗面 ヘラケズリ	-	灰	灰	良好	-	○	○	○	○	○	○		
	77	溝川遺構 4号	C-O-1 -2-25	土器	鉢	口縁部	弥生時代 後期	-	-	ナデ	ナデ	溝線刻文	粗面	粗面	良好	-	○	○	○	○	○	○	○	商業式
	78	溝川遺構 4号	C-O-1 -2-25	土器	壺	口縁部	縄文時代	-	-	ナデ	ナデ	溝線刻文	赤黒	赤黒	普通	-	○	○	○	○	○	○	○	商業式
	79	溝川遺構 4号	C-O-1 -2-25	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	ナデ	ナデ	貝殻付突 面	紅い 裏焼	紅い 裏焼	普通	-	○	○	○	○	○	○	○	
	80	溝川遺構 4号	C-O-1 -2-25	土器	深鉢	底部	縄文時代 後期	-	8.8 (13.3)	ナデ	ナデ	-	紅い 裏焼	紅い 裏焼	良好	-	○	○	○	○	○	○	○	縄文式
	81	溝川遺構 7号	D-16	土器	壺	底部	中世	-	7.4 (12.7)	ナデ	ナデ	-	赤黒	赤黒	良好	-	○	○	○	○	○	○	○	スス
	82	溝川遺構 7号	C-22	土器	杯	底部	中世	-	-	ナデ	ミガキ	-	紅い 裏焼	黒	良好	-	○	○	○	○	○	○	○	内面
42	83	溝川遺構 7号	-	土器	壺	底部	古代へ 中世	13.2	8.2	2.9	粗面 ヘラケズリ	粗面 ヘラケズリ	-	赤黒	赤黒	良好	-	○	○	○	○	○	○	ヘラミガ キちりり
	84	溝川遺構 7号	C-21	土器	壺	底部	中世	12.8	9.8	2.6	ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	灰白	灰白	普通	普通	○	○	○	○	○	○	ちりり



第7表 中近世遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（3）

地区 番号	観察 番号	遺物名	出土区	種類	形状	部位	時代	法量 (cm)		重量		用途		色澤		焼成	土質	備考			
								口径 (直径)	底径 (底径)	高さ (最大寸)	外側	内側	文様	外側	内側						
46	146	美濃遺構 7号	C-22 C-22	土器類	壺	胴部	古代	-	-	-	字引タタキ	-	灰白 黄	良好	-	-	-				
	147	美濃遺構 7号	C-18 C-17	土器類	壺	胴部	古代	-	-	-	字引 タタキ	-	灰白 黄	良好	-	-	-				
	148	美濃遺構 7号	C-23	土器類	樽	底部	古代	-	-	-	ナデ	布目	灰白 黄	稍劣	普通	○	○				
	149	美濃遺構 7号	D-16	土器類	片取 土製品	胴部	縄文時代	4.2	3.9	0.9	打割欠 ナデ	赤黒	沈濁	黄灰	良好	-	○	○	片取式		
	150	美濃遺構 7号	D-16	土器類	片取 土製品	胴部	弥生時代	4.6	3.8	0.9	打割欠 ナデ	ナデ	-	黄灰	良好	-	○	○			
	151	美濃遺構 7号	D-16	土器類	片取 土製品	胴部	弥生時代	4.7	4.6	0.9	打割欠 ナデ	ナデ	-	沈濁	黄	普通	-	○	○	赤色顔料	
	161	美濃遺構 8号	C-20	土器類	壺	胴～ 底部	中世	-	6.8	11.0	-	煎茶 ナデ	-	灰白 黄	良好	普通	-	○	○	スズ 焼切り	
	166	美濃遺構 8号	B-23	瓦類 土器	埴輪	口～ 胴部	中世	-	-	-	ナデ	すり目	-	黄灰	良好	-	-	-			
	168	美濃遺構 8号	C-20	瓦類 土器	埴輪	胴～ 底部	中世	-	12.7	65.3	-	ハラナデ	ナデ, すり 目 煎茶 ナデ	-	黄灰	良好	-	-	-		
	169	美濃遺構 8号	D-18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	-	ナデ	ナデ 煎茶 ナデ	沈濁	黄灰	良好	-	○	○	○	片取式	
48	169	美濃遺構 8号	D-16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	-	ナデ	煎茶	灰白 黄	良好	-	○	○	○	片取式		
	170	美濃遺構 8号	D-16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	-	ナデ	ナデ	灰白 黄	良好	-	○	○	○	片取式		
	171	美濃遺構 8号	C-22	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	-	ナデ	ナデ	沈濁	黄	普通	-	○	○	○	片取式	
	172	美濃遺構 8号	C-22	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	-	ナデ	ナデ, 三ツ ギ	沈濁	灰白 黄	良好	-	○	○	○	西平系	
	173	美濃遺構 8号	C-22	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	-	ナデ 煎茶 ナデ	煎茶 ナデ	黄灰	良好	-	○	○	○	△		
	174	美濃遺構 8号	C-21	土器	壺	口縁部	弥生時代	25.0	-	64.3	ナデ	ナデ 煎茶 ナデ	煎茶, 沈濁	黄灰	良好	-	○	○	○	入室式	
	175	美濃遺構 8号	D-18	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	-	ナデ, 三ツ ギ	ナデ, 三ツ ギ	沈濁	灰白 黄	良好	-	○	○	○		
	176	美濃遺構 8号	C-22	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	-	煎茶 ナデ	ハラナデ	-	沈濁	黄	普通	-	○	○		
	177	美濃遺構 8号	C-20	土器	壺	胴部	弥生時代	-	-	-	ナデ, 三ツ ギ	煎茶 ナデ	沈濁	灰白 黄	良好	-	○	○			
	178	美濃遺構 8号	C-22	土器	壺	底部	弥生時代	-	8.4	63.3	ナデ, 三ツ ギ	ナデ	-	灰白 黄	良好	-	○	○	○	白土	
49	179	美濃遺構 8号	C-22	土器	壺	底部	弥生時代	-	8.8	62.0	ナデ	ナデ	-	黄灰	普通	-	○	○	○	白土	
	180	美濃遺構 8号	-	土器	壺	口縁部	古墳時代	-	-	-	工具ナデ	煎茶 ナデ	灰白 黄	良好	-	-	-	-	成川式		
	181	美濃遺構 8号	D-17	土器	壺	底部	古墳時代	-	5.8	65.3	ハケム	ナデ	白	灰	普通	-	○	○	○	成川式	
	182	美濃遺構 8号	D-18	土器類	壺	底部	古代	-	9.6	62.6	煎茶 ハラケズリ	煎茶 ハラケズリ	灰白 黄	良好	-	○	○	○			
	183	美濃遺構 8号	C-22	土器類	壺	底部	古代	-	4.8	61.9	煎茶 ハラケズリ	三ツギ	-	灰白 黄	良好	普通	○	○	○		
	184	美濃遺構 8号	C-22	土器類	土師	-	古代	-	5.9	3.1	-	ナデ 煎茶 ナデ	-	黄灰	良好	普通	○	○	○		
	185	美濃遺構 8号	-	土器類	フイゴ	口	古代以降	-	-	-	-	-	-	黄灰	良好	-	-	-			
	186	美濃遺構 8号	C-22	土器類	壺	胴部	縄文時代	4.8	4.3	0.9	ナデ	ナデ	-	灰黄	良好	-	○	○		編入式 - 片取式	
	187	美濃遺構 8号	D-17	土器類	片取 土製品	胴部	縄文時代	4.6	0.7	6.9	ナデ	ナデ	-	黄灰	良好	-	○	○	△	編入式 - 片取式	
	188	美濃遺構 8号	C-22	土器類	片取 土製品	胴部	縄文時代	3.4	3.3	1.0	ナデ	ナデ	-	黄灰	良好	-	○	△	○	編入式 - 片取式	
50	191	美濃遺構 11号	D-19	土器	壺	胴部	弥生時代	-	-	-	ナデ	ナデ	煎茶 煎茶	灰白 黄	良好	-	○	○	○	赤色顔料	
	192	美濃遺構 11号	D-19	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	-	ナデ	ナデ	-	黄	普通	-	○	○	○		
	193	美濃遺構 12号	C-18	土器	埴輪	口～ 胴部	中世	26.0	-	68.6	煎茶 ハラケズリ	煎茶 ハラケズリ	灰白 黄	良好	-	-	-	-			
	194	美濃遺構 12号	C-18	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	-	ナデ	ナデ	-	黄灰	良好	-	○	○	○		
	195	美濃遺構 12号	C-18	土器	壺	胴部	弥生時代	-	-	-	ナデ	ナデ	煎茶 煎茶	灰白 黄	良好	-	○	○	○		
	196	美濃遺構 12号	C-18	土器	壺	胴部	弥生時代	-	-	-	三ツギ	三ツギ	煎茶 煎茶	灰白 黄	良好	-	○	○	○		
	197	美濃遺構 12号	C-18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	-	-	-	ナデ	ナデ	沈濁	灰黄	良好	-	○	○	○	片取式	
	198	美濃遺構 13号	C-18	土器類	壺	底部	古代	-	6.8	62.2	煎茶 ハラケズリ	煎茶 ハラケズリ	-	灰白 黄	普通	-	○	○	○	内果	
	199	美濃遺構 13号	C-17 C-18	土器	深鉢	底部	縄文時代	-	10.6	64.0	ナデ	ナデ	-	黄	普通	-	○	○	○		
	200	美濃遺構 13号	C-18	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	-	ナデ	ナデ	煎茶	黄	普通	-	○	○	○		
51	201	美濃遺構 16号	D-17	土器	鉢	口縁部	縄文時代	-	-	-	ナデ	ナデ	煎茶, 沈濁	黄灰	良好	-	○	○	○		
	202	美濃遺構 17号	C-17	土器	壺	口縁部	弥生時代	-	-	-	ナデ	ナデ	煎茶	灰白 黄	良好	-	○	○	○		
	203	美濃遺構 17号	C-17	土器	鉢	口縁部	弥生時代	-	-	-	ナデ	三ツギ	煎茶 煎茶	灰白 黄	良好	-	○	○	○		
	205	美濃遺構 16号	C-18	土器類	壺	底部	中世	-	10.0	61.1	-	煎茶 ハラケズリ	-	灰白 黄	良好	-	-	-	○	○	赤色 焼切り
	206	美濃遺構 16号	B-16 C-18	土器	深鉢	胴部	縄文時代	-	-	-	ナデ	ナデ	沈濁	灰白 黄	良好	-	-	-	-		
	207	美濃遺構 16号	C-18	土器	深鉢	底部	縄文時代	-	7.8	61.6	ナデ	ナデ	-	灰白 黄	良好	-	○	○	○		





第9表 中近世遺構内出土遺物観察表（縄）

発掘 番号	遺構 番号	遺構名	出土区	原種	材料	法量 (cm)			備考
						最大径	最大幅	重量 (g)	
40	308	遺跡1	E-9	縄	シュロ	-	0.70	-	図録No 69

第10表 中近世遺構内出土遺物観察表（木製品）

発掘 番号	遺構 番号	遺構名	出土区	原種	材料	法量 (mm)			備考
						最大径	最大幅	最大厚	
31	34	土坑内	C-17	漆物	スズ	12.5	12.1	0.7	図録No 86
40	209	遺跡2	-	杭	マンヌ層積層木炭炭	6.6	5.9	4.9	(遺構) 東西航列
	210	遺跡2	E-8-E-9	杭	マンヌ層積層木炭炭	71.0	6.6	5.4	(遺構) 東西航列
	211	遺跡2	-	杭	マンヌ層積層木炭炭	103.2	5.3	4.9	
	212	遺跡2	-	杭	アカマツ	147.9	6.4	6.6	
41	213	遺跡2	-	杭	アカマツ	155.0	6.0	5.9	
	214	遺跡2	E-9	杭	マンヌ層積層木炭炭	45.6	4.5	3.7	
	215	遺跡1	E-9	杭	ツバキ	63.3	4.2	3.7	
	216	遺跡2	F-10	杭(丸太)	マンヌ層積層木炭炭	156.0	16.2	16.8	
42	217	遺跡1	E-9	杭(板保?)	マンヌ層積層木炭炭	164.0	80.0	4.5	
	218	遺跡1	E-9	杭	マンヌ層積層木炭炭	121.6	7.3	6.0	
	219	遺跡1	E-8-E-9	板保(円)	-	52.7	4.2	4.2	
	220	遺跡1	E-9	杭	-	75.1	6.4	6.4	
43	221	遺跡3	-	杭	-	192.5	8.2	5.2	
	222	遺跡2	E-8	横板	マンヌ層積層木炭炭	64.3	16.9	4.5	
	223	遺跡2	E-8	横板	マンヌ層積層木炭炭	62.8	19.2	5.6	
	224	遺跡2	E-8	板	マンヌ層積層木炭炭	64.7	36.3	8.0	
44	225	埋蔵	E-F-9-10	記本類	竹	114.6	5.8	5.8	

第11表 中近世遺構内出土遺物観察表（石器・石製品）

発掘 番号	記帳 番号	遺構名	出土区	原種	石材	法量 (mm)			重量 (g)	備考
						最大径	最大幅	最大厚		
30	30	土坑内	C-23	打製石片	ホルンフェルス	8.60	5.30	1.60	93.76	
36	45	土坑内	C-27-C-28	石鏃	燧石(磨石)	0.151	0.50	0.30	0.64	
	46	土坑内	C-27-C-28	石鏃(未製)	燧石(上半磨)	2.15	1.75	0.55	1.68	
36	49	土坑内	C-29	石鏃	燧石(磨石)	0.60	0.60	0.40	0.73	
38	54	土坑内	B-23-B-23	輝石製石	輝石	12.20	8.65	6.30	169.00	
	57	土坑内	C-25-C-23	輝石製石	輝石	11.30	7.85	5.35	102.45	
	55	溝状遺構5号	B-24	石鏃	燧石(磨石)	1.35	0.20	0.20	0.29	
	56	溝状遺構5号	B-24	石鏃	燧石(磨石)	0.90	0.05	0.20	0.13	
40	67	溝状遺構5号	B-24	石鏃(未製)	燧石(磨石)	2.10	2.30	0.70	2.86	
	68	溝状遺構5号	B-24	石鏃(未製)	燧石(磨石)	1.75	1.30	0.35	0.74	
	69	溝状遺構5号	B-24	石鏃(未製)	燧石(磨石)	1.80	1.15	0.55	1.05	
	70	溝状遺構5号	B-24	磨石	輝石(山打)	6.50	6.00	4.30	234.7	
47	152	溝状遺構7号	D-16	打製石鏃	燧石(磨石)	1.41	1.42	0.30	0.53	
	153	溝状遺構7号	D-20	打製石片	ホルンフェルス	12.30	8.60	1.80	183.82	
	154	溝状遺構7号	C-23	磨石	砂岩	6.10	8.40	4.25	328.92	
	155	溝状遺構7号	C-20	輝石製石	輝石	12.15	9.60	4.90	165.27	
	156	溝状遺構7号	C-21	輝石製石	輝石	15.55	11.30	5.75	235.13	
	157	溝状遺構7号	D-16	石製石	輝石(山打)	19.80	18.90	9.60	336.00	
50	189	溝状遺構10号	C-21	磨石	砂岩	12.90	12.20	6.30	1,161.00	
	190	溝状遺構10号	D-16	磨石	玉髓	4.75	4.90	3.70	114.25	
52	204	溝状遺構17号	C-16	石鏃(未製)	燧石(磨石)	1.65	0.70	0.55	1.01	

## 第2節 遺物

### 1 遺物の出土状況及び分類方法

古代から近世に属する遺物を包含するのは、基本的にⅡ層である。しかし、調査区域には掘削や削平によりⅡ層は存在しない範囲もあった。従って、遺物が全く出土しないグリッドがあるなど出土状況には偏りが生じている。また、調査区域により土層の堆積状況が一定しないことによりⅡ層を分層して調査を進めた年度もあった。そこで、報告書を作成するにあたり、低湿地部分の一部を除いては標準土層の見直しを行い、古代から近世に属する遺物の包含層はⅡ層に統一した。古代・中世・近世の遺物の出土状況については第66・67図に時期毎に示した。

遺物は古代（8世紀～11世紀）、中世（11世紀後半～16世紀）、近世（17世紀～19世紀後半）に分け、詳細な分類は時代毎に記載する。

### 2 近世

近世の遺物は、Ⅱ層及び表土・掘削からの出土である。ここでは17世紀～19世紀後半（江戸時代）のものを報告する。近世の遺物の出土状況は全体的にはまばらであるが、E・F-8区と29区ではまとまって出土している。E・F-8区の出土状況は、道跡2とほぼ重なる。E・F-8区の調査は土木遺構の検出以前であったため、出土した遺物は包含層出土として取り扱い、土木遺構との関連を想定せずに調査を進めた。報告書を作成する段階において再検証を行ったが、その関連性を明確にすることはできなかった。道跡2の造成土からの出土の可能性もあることも記しておきたい。29区にも遺物の集中域が見られるが、詳細については不明である。

#### (1) 磁器（第68図226～232）

##### 碗

226～230は、碗である。体部が緩やかに膨らみながら口縁部に至る器形をもつ。226は、畳付を欠損するものである。外面と見込みに草花文を描く。外面には5条、内面には3条の界線を巡らせる。227は底部片で、高台が外に開く器形をもつ。外面と見込みに、力強い草花文が描かれる。内外面とも施軸が不十分な部分が窪み状に点在する。228の口縁端部は外反し、外面にはロクロ引きの稜線が明瞭に残る。内面には草花文が印刷される。229の口縁部は、体部と比べて器壁が薄くなる。230は無文で、口縁部は直口気味に立ち上がり、底面中央部が厚くなる。高台は露胎するが、一部軸垂れがある。見込みに砂粒が付着する。外面は緑灰色、内面には灰白色の釉がかかる。226・227・229・230は肥前系磁器で、228は波佐見焼と考えられる。

##### その他

231は小杯で、腰部がやや張る器形をもつ。体部の器壁は均一さを欠く。高台畳付から高台内面にかけて釉は

ぎが行われる。外面に唐草文、見込みに草花文が描かれ、高台内面には「福」の字を書く。また、高台内面には朱が付着しているのが観察できる。肥前系と考えられる。

232は仏飯具で透明釉がかかり、脚部中位から下半は露胎する。内野山窯産と考えられる。

#### (2) 陶器（第68図233～246）

##### 碗・皿

233～236は、碗である。233は、白色釉を全面に施す。口縁がゆがみ、やや前傾気味となる。口唇部は溝縁状を呈し、体部には段をつける。底部の器壁は厚く、高台中央部は盛り上がる。透明釉がかかり、内面には貫入が入る。見込みに目跡が輪状に残る。肥前系と考えられる。234は、黒褐色釉を施す天目碗の口縁部である。内面には緩い段を付ける。肥前産と考えられる。235は、苗代川産の碗の底部である。畳付に砂目が3か所あり、見込にも目跡が3か所残る。腰部で強く屈曲し、その内面には段を設け、見込みに白色釉で草花文を描く。236も苗代川産である。腰部から口縁部にかけては直行し、その端部は軽く外反する器形がかかり、外面底部付近まで黒褐色の釉を施す。高台は低く、畳付には砂目が残る。

237・238は内野山窯産の皿で、腰部がやや張り出す。外面には透明釉、内面には青釉が施されるが、外面にも一部青釉が及ぶ。高台と一部腰部が露胎する。見込みに蛇の目軸割ぎを施し、そこに砂目が残る。いずれも同じような器形、口径、底径ではあるが、237は器高4cm、238は器高3.3cmと違いがある。

##### 鉢・片口・土甌

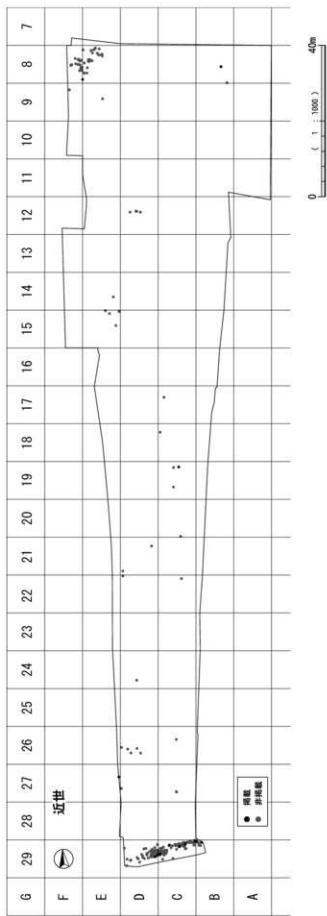
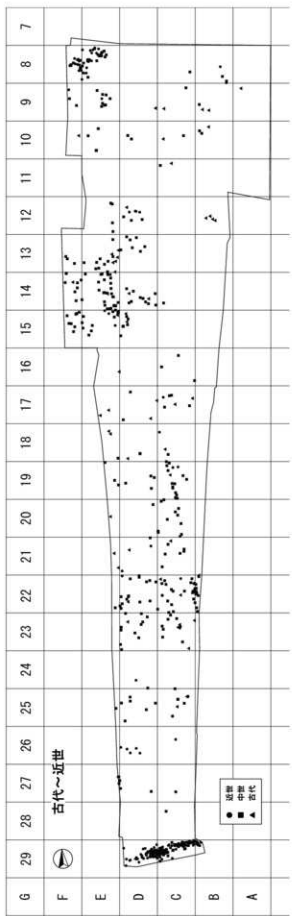
239～242は、苗代川産の鉢である。239の口唇部は軸割ぎを行い、底部から胴部の屈曲部付近には貝目跡が1か所残り、底部中央部分が凹む。軸垂のかり具合は濃淡がある。240は底部から胴部にかかる破片で、239と同一個体の可能性も考えられる。241は屈曲部を作りながら口縁部が大きく外反し、その端部は玉縁状に近い。内外面とも褐釉を施すが、胴部は部分的に露胎する。内面に白化粘土で印花を行う。鉢に分類したが、盤の可能性も考えられる。242は粘土を貼り付けて幅広い口唇部に仕上げ、その口唇部に軸割ぎを行う。底部には目跡が2か所残る。

243は、苗代川産の片口である。粘土を貼り付け幅広く仕上げた口唇部には筋状に軸割ぎが行われる。

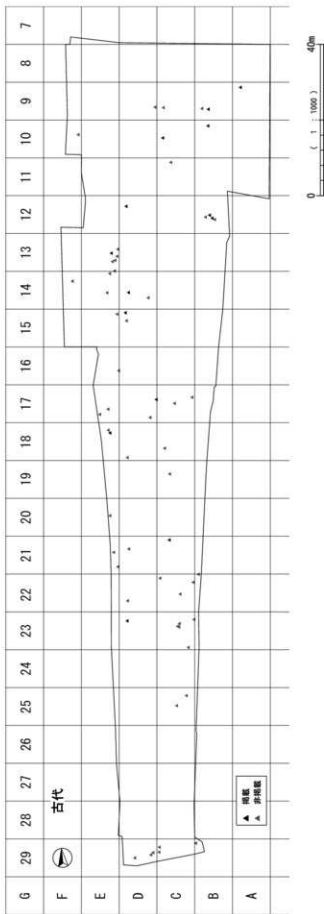
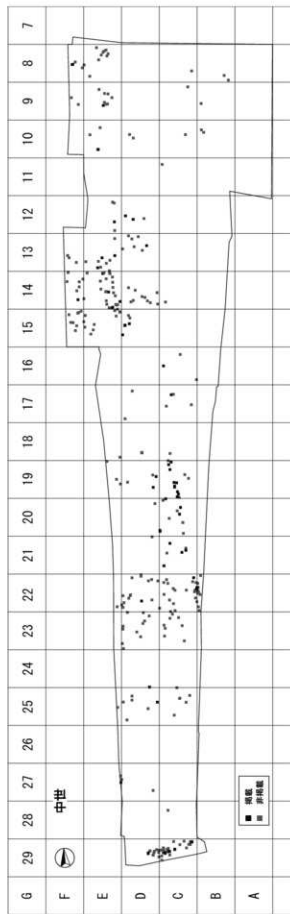
244・245は、ともに苗代川産の土甌の底部である。いずれも胴部中位から底部にかけて筋状のロクロ痕が多く残る。底部は、やや上げ底気味となる。円錐状の粘土を胴下部に貼り付け、脚とする。体部中位まで褐色釉を施す。

##### その他

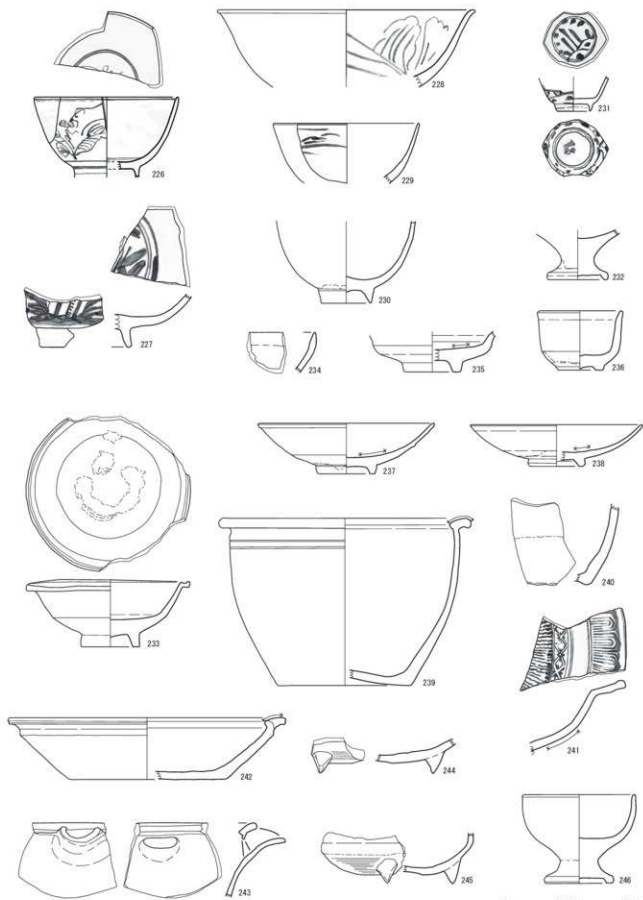
246は、内野山窯産の仏飯具である。青釉が施されているが、二次焼成を受け、外面が白色化する。



第66図 遺物出土状況図(1)

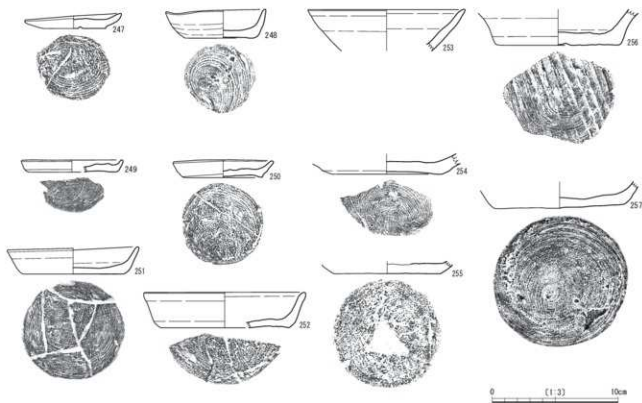


第67図 遺物出土状況図(2)



0 [1:3] 10cm

第68図 近世の遺物



第69図 中世の遺物（1）（土師器）

### 3 中世

中世の遺物もⅡ層を包含層とする。遺物出土状況は全体的にまばらであるが、中でもD・F-13～15区、C・D-19～23区、C・D-29区に集中域が見られる。11世紀後半から16世紀の資料を中世の遺物として報告する。分類方法としては、土師器、輸入磁器、国内産陶器、土師質土器、滑石製品、石製品、古銭、木製品に大分類し、さらに種別や産地、器種を考慮して細分類した。土師器は、底部の切り離しが糸切りの資料を中世土師器として取り扱った。輸入磁器は青磁、白磁、青白磁、青花に分類し、器種毎に分類した。ただし、古代（平安時代末：8～10世紀）に該当する越州系青磁は、中世の青磁の中で報告する。青花についても中世の遺物として取り扱った。

#### (1) 土師器（第69図247～257）

247～257は、底面糸切りの土師器皿である。247～250は、小型の皿である。247は口径7.7cm、底径5.0cm、器高1.2cmを測り、器形はかなりいびつである。248は口径7.9cm、底径5.4cm、器高2.3cmで、口縁がややいびつである。胎土が明るい橙色を呈し、内面に白色土や、やや赤色化する部分が見られる。249は口径8.0cm、底径7.2cm、器高0.9cmを測りかなり浅く、内面は3段のヘラケズリを行う。250は口径8.0cm、底径6.2cm、器高1.4cmで内面に薄

くススが残存する。灯明皿に使用されていたと考えられる。

251～255は、中型の土師器皿である。251は、口径10.4cm、底径8.0cm、器高2.2cmを測る。胎土が灰白色を呈し、精緻である。口縁部の一部は、黒色化する。252は口径12.8cm、底径10.2cm、器高2.8cmを測り、内外面とも摩耗する。253は口径12.4cmで、底部を欠損する。口縁部は、逆「ハ」の字に開く。254は底径8.6cmを測り、灰色を呈する須恵質の土師器である。底部は不定形で分厚い作りである。255は底径8.4cmを測り、内外面及び割れ面にスガが付着することから二次焼成を受けたと考えられる資料である。

256・257は、大型の土師器皿である。256は底径9.8cmを測り、見込みと底面にスガが付着する。底面には幅7～8mmの板目跡が残る。257は底径10.3cmを測り、底部のみが残る資料である。

#### (2) 輸入磁器（第70・71図258～318）

##### 青磁

258・259は、福建省産もしくは越州窯系と考えられる碗である。258は、外面口縁部下位まで施軸し以下は露胎すると考えられる。A期（8世紀末～10世紀中頃）に比定される。

260～263は、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（E

期：13世紀初頭～前半）に比定されるものである。260～262は、Ⅱb類で外面に稜を持つ幅連弁文である。260は、口径16cmを測る。262は底径5.6cmを測り、高台は幅広く低く、畳付から高台内面は露胎する。見込みに幾何学文の草花文を描く。263は、Ⅱc類の龍泉窯産の碗である。底径5.4cmを測り、高台は幅広く低く、畳付から高台内面が露胎する。外面に連弁、見込みにスタンプ印花文を描く。

264～267は、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅳ類（G期：14世紀初頭～中頃）に比定されるものである。264は、Ⅳe類の粗製で底径5.0cmを測る。畳付から高台内にかけて露胎し、高台外端部は面取し、角高台を呈する。高台と腰部の境はやや凹み、高台内中央部は凸部がある。見込み境に圈線を入れる。265は粗製のつくりで、Ⅳ類以降のものである。底径は、4.8cmを測る。畳付から高台内にかけて露胎し、角高台となる。見込み境に圈線を入れ、見込み中央及び高台内中央部が盛り上がる。高台は外に開く。266は底径6.4cmを測り、高台内を輪状に掻き取る。見込みに草花文様の印文を行い、高台は軸が厚くかかり、丸みをおびる角高台となる。267は、高台が欠損する。器形は判然としませんが、Ⅳ類以降と考えられる。見込みに草花文様の印文を行い、高台内に墨書のような墨跡が残る。

268～269は、上田分類のB類（15世紀以降）に比定されるものである。外面に連弁文を有する碗である。268は上田B2類もしくはB3類で、高台が欠損する。見込み境に圈線を入れる。269は、上田B3類もしくはB4類の体部片である。釉薬はオリーブ色を呈し、外面は細連弁文が施される。

270～271は、上田分類のC類（14世紀以降）に比定されるものである。270は上田C4類と考えられ、ラマ式連弁と考えられる文様が施される。16世紀の可能性もある。271は上田C2類で、高台内面を軸刺ぎする。

272～273は、上田分類のD類（14世紀～15世紀）に比定されるものである。口縁部が外反し、高台内面が露胎するものである。272は、上田D2類で無文である。273は外面に連弁文を施し、高台で端部を広く面取する。口縁部が欠損するため他の分類に含まれる可能性もある。

274～275は、元代までの皿である。274は福建省産と考えられる元代の皿で、龍泉窯系Ⅳ類に比定されるものである。口縁部が外反し、体部下半を露胎する。275は大宰府分類の龍泉窯系青磁皿Ⅳ類（G期：14世紀初頭～中頃）に比定され、底径6cmを測り、畳付は砂粒がよく付着し、釉剥ぎを行う。見込みにには菱形を描く。

276～277は、口縁部が外反する明代の後花皿である。276は口径12cm、底径6cm、器高2.9cmを測り、口縁部が1/4以上残存する。高台は厚く軸がかかり、畳付に3か

所の彫りをもち、高台内面を輪状に掻き取る。体部外面に唐草文、内面に草花文を施す。277は、口縁部内面に2条の界線を引く。

278～279は、坏である。278は口縁部が外反し、内外面にヘラ彫りが施される。底部を欠損するが萁筒底と考えられる。279は、口縁部を平坦に仕上げる。外面には連弁文を施す。

280～287は、明代の盤である。280～282は、口縁部の罫が上方に向いた盤である。280は、福建省産の盤である。281～282は口縁部の内面に明瞭な段をもち、その下にヘラ彫りが施される。283は口縁部が後花を呈する盤で、口縁部内面直下に界線1条を施す。284～287は、底部である。284は低い高台をもち、高台内面に粘土が一部付着する。福建省産の可能性もある。285～287は、萁筒底である。285は見込みに草花文様のスタンプ印文を薄く施し、高台内面を円上に掻き取り露胎する。286はⅣ類以降の福建省産の盤で、見込みに草花文様を薄く施す。高台内面を輪状に掻き取り露胎する。287は内面にヘラ彫りを行い、高台内面を輪状に掻き取り露胎する。二次焼成を受けたと考えられる。

288は、龍泉窯系の香炉である。口径6.7cmを測り、内面口縁部下位まで施軸する。

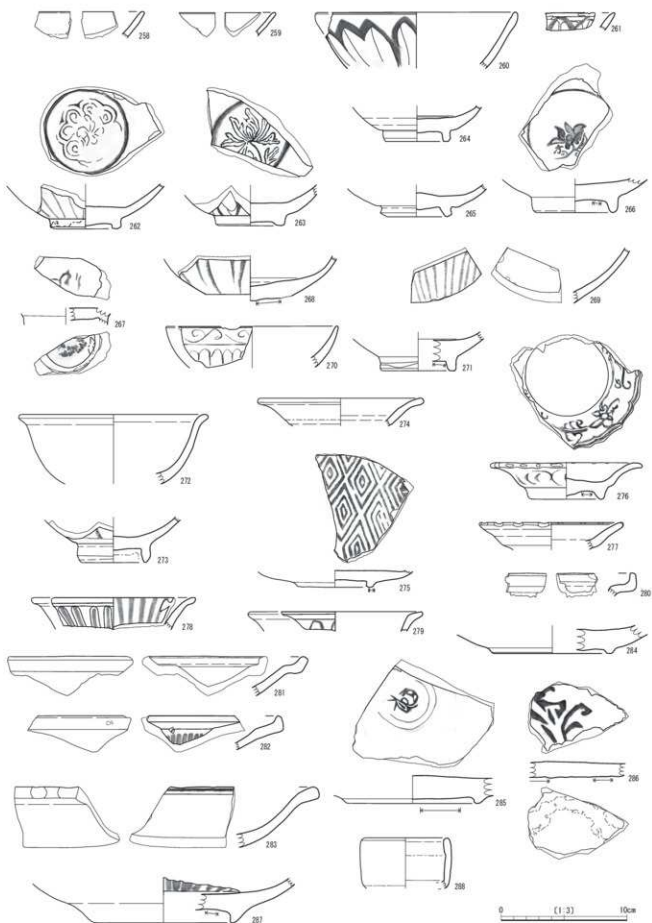
#### 白磁

289は、大宰府分類の白磁碗Ⅳ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。内厚で玉縁状の口縁をもつ。粗製で不良品と考えられる資料である。290は、大宰府分類の白磁碗Ⅴ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。口縁部は、水平あるいは水平に近い角度で外反する。291は、大宰府分類の白磁碗Ⅵ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。口径12.8cmの中型碗で、器高は低く浅形を呈する。口縁部は、弱く外反する。292は、大宰府分類の白磁碗Ⅶ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定されるものである。口縁部周辺の軸を掻き取るいわゆる口壳の碗である。

293は、ビロースタイプ皿類（14世紀初頭～15世紀）の碗である。口径16.4cm、底径5.2cm、器高7.0cmを測り、口径に対し底径が小さい。口縁部は弱く外反し、高台は直立する。体部下位まで施軸し、見込みに圈線と草花文のスタンプ印文を弱く施す。

294～296は、14世紀～15世紀の元代までの碗である。294は底径7.8cmを測り、高台は低い角高台で、外面は露胎する。見込みに草花文のスタンプ印文を施す。295は底径6cmを測り、体部下半を露胎し、低い高台を持つ。見込みに輪状に掻き取る。粗製のつくりである。296は底径5.4cmを測り、高台を粗雑につくる。外面は軸垂れがみられ、体部中位まで施軸する。見込みに菊花文のスタンプ印文を施す。





第70図 中世の遺物(2)(青磁)

297～300は、森田分類の白磁ⅢD群（14世紀後半～15世紀前半）に比定されるものである。体部下半を露胎する。297は口径7.6cm、底径3cm、器高3cmを測り、口縁がやや内湾する。298は底径4.4cmを測り、見込みを輪状に掻き取る。299は底径4.2cmを測り、高台が低い。300は底径4.4cmを測り、高台に4か所の挟り込みをおこなう。高台内面に「一」の墨書をし、その上に重ねて朱書きをおこなう。

301～304は、森田分類の白磁ⅢE群（15世紀～16世紀）に比定されるものである。301・302は、口縁部が外反する。301は、口径10.2cm、底径5.5cm、器高2.5cmを測る粗製のものである。高台内面は露胎し、高台が一部欠損した状態で釉薬をかけて製作している。302は口径8.9cm、底径4cm、器高2cmを測り、体部下位を露胎し、見込みを輪状に掻き取る。303・304は、稜花Ⅲである。303は、口径12cmを測る景徳鎮系の稜花Ⅲである。304は内外面を花卉状に削り出し、立体的な造形をもつ菊Ⅲである。

305・306は、森田D群の白磁Ⅲである。胴部が八角形を呈する多角杯で、高台に4か所の挟り込みを行い、体部下半を露胎する。305は見込みに3か所の目跡が残し、高台畳付に3か所釉薬が付着する。306は口径8cm、底径3.5cm、器高3.2cmを測り、見込みに2か所の目跡が残し、高台畳付に2か所釉薬が付着する。高台内面に「小」を墨書する。

#### 青白磁

307は、型作りによる合子の身である。受け部は露胎し、外面に菊花文を施す。

#### 青花

308～310は、小野分類の青花碗B群（H期：14世紀中頃～15世紀前半）に比定されるものである。口縁部が外反する増反りの碗である。308は、口唇部が欠損する。外面唐草文、口縁内面に界線、見込みに芭蕉葉文を施す。内外面に釉溜まりが見られ、畳付から高台内面にかけては一部露胎する。二次焼成を受けたと考えられる。309は口縁内外面に界線、外面に草花文を施す。310は口縁内外面に2条の界線、外面に唐草文を施す。口縁部は強く外反する。

311～313は小野分類の青花碗C群（15世紀～16世紀中頃）に比定されるもので、いわゆる「蓮子碗（レンツー碗）」である。311は粗製で、内外面に釉溜まりが多く見られる。外面に芭蕉葉文、見込みに梵字を施す。見込みが緩やかに盛り上がっているが、外面に芭蕉葉文を施すためC群に含めた。312は見込みに花卉文を施し、畳付は釉剥きする。313は、粗製で畳付が欠損する。外面に簡略化された芭蕉葉文、見込みに草花文が描かれる。

314は小野分類の青花碗E群（K期：16世紀中頃～17世紀前半）に比定されるもので、粗製で釉薬のわからない部分が複数か所見られる。口縁内外面に界線を施し、

外面に簡易な唐草文を描く。

315～317は小野分類の青花ⅢC群（15世紀～16世紀中頃）に比定されるもので、碁笥底をもつ皿である。315は外面に芭蕉葉文を描き、口縁がやや内湾気味である。316は見込みに草花文を描き、体部下半を露胎する。317は、見込みに文字を記す。

318は分類できなかったⅢで、16世紀代と考えられる。外面に唐草文を描き、体部下半及び見込みは露胎する。（3）国内産陶器（第72図319～323）

#### 古瀬戸

319は、古瀬戸の飯子の底部と考えられる。胎土は灰白色を呈し、外面及び見込みに灰オリープ色の釉薬をかける。

#### 常滑焼

320・321は、常滑焼の甕である。320は胎土は暗灰色を呈し、白色砂粒・石英を多く含む。口縁部は「N」字状を呈し、口縁帯は2.7cmを測る。6b型式（13世紀後半～14世紀）に比定される。321は、甕の肩部と考えられる。胎土は灰褐色を呈し、内外面無釉で焼締めである。

#### 備前焼

322・323は、備前焼の播鉢である。胎土は明赤褐色・灰褐色を呈し、口縁部上角と下角の突出が強く、口縁内面と口縁外面中央に屈曲部をもつ。322は、1単位6条のすり目が放射状に施される。口縁帯中央に浅い凹みを有する。15世紀代と考えられる。323は、内面ににぶい赤褐色を呈する釉薬をかける。口縁帯中央に凹みを2条有する。すり目は1単位7条で密に行う。（4）中世須恵器（第72図324～331）

#### 東播系須恵器

324～327は、東播系須恵器の捏鉢である。324は、片口部分である。326・327は底部で、内面は使用により滑らかである。326は、底面に糸切り痕が残る。327は、焼成不良である。

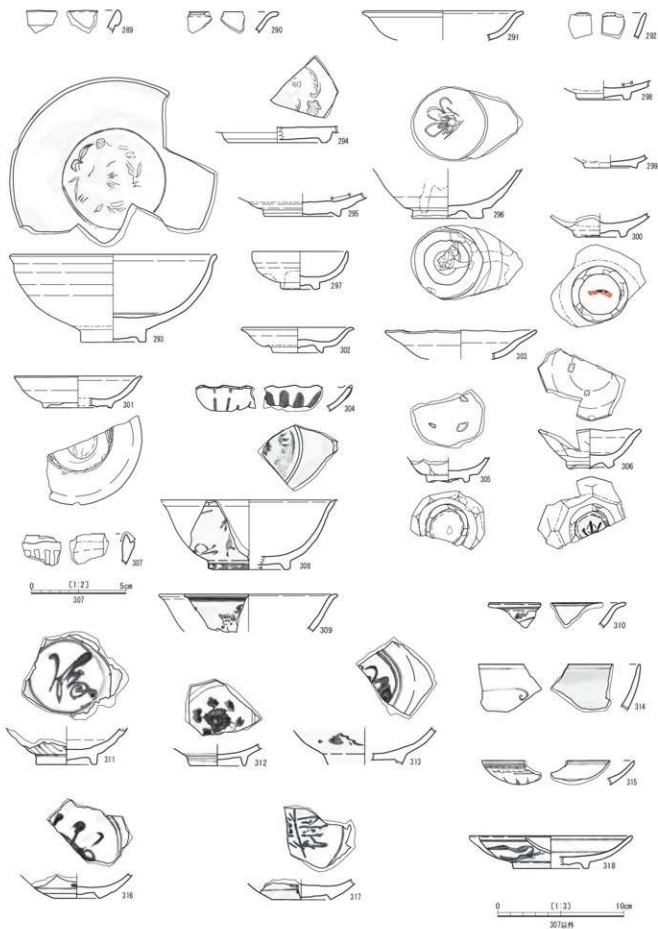
#### 棒万丈産

328～330は、棒万丈産の甕である。外面に格子目タタキが残し、内面はハケメ状の調整痕が残る。

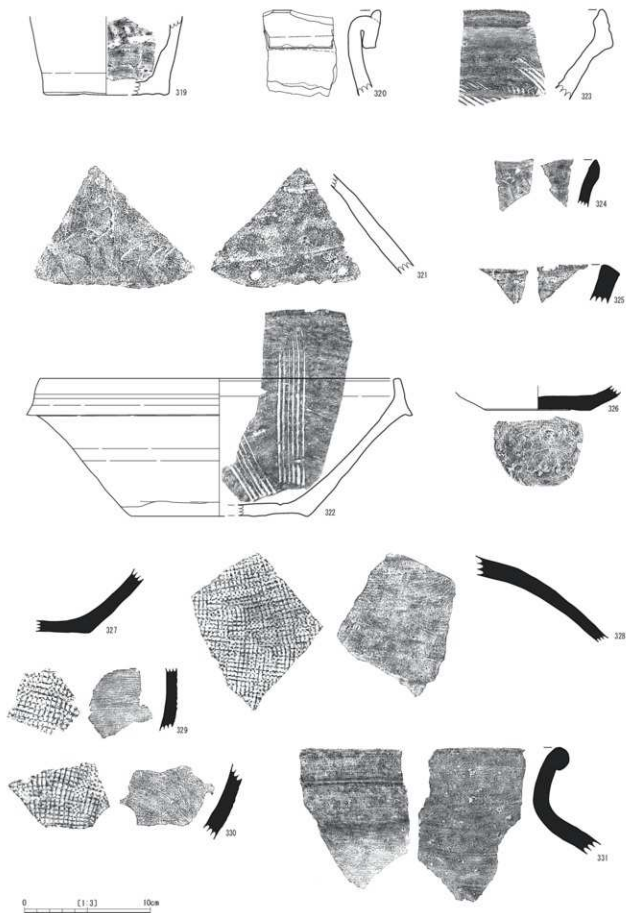
#### その他

331は、産地が不明の壺の口縁部である。口縁部は玉縁状を呈する。胎土は灰色を呈し、礫や白色砂粒を含む。（5）瓦質土器（第73図332～340）

332～340は、瓦質土器の播鉢である。産地等の詳細は不明である。すり目は、放射状もしくは斜位に1単位6条～9条で入る。内面は使用により滑らかになったものがみられる。口縁部は、片口を有するが欠損しているものもある。胎土は瓦質のものやや焼成不良で土師質のものがみられる。332～335は、口唇部に浅い凹みがある。336・337は、口縁部両端がやや突き出る。339・340は、底部である。



第71図 中世の遺物(3) (白磁・青白磁・青花)



第72図 中世の遺物（4）（国産陶器・須恵器）

#### (6) 木製品 (第73図341・342)

341は曲げ物の蓋か底と考えられるが、上部を1/4程度欠損する。残存する長さ15.8cm、幅10.5cmである。厚さは0.5～1cm程度である。342はしゃもじ状の木製品で、柄部分を欠損する。残存する長さ12cm、幅6.5cm、厚さは1cmに満たない。放射性炭素年代測定の結果、341は15～16世紀、342は12～13世紀の数値を得られた。自然科学分析については、第3分冊「第8章」を参照いただきたい。

#### (7) 石製品 (第74図343～357)

##### 滑石製品

Ⅱ・Ⅲ層から出土した滑石製品は7点出土しており、そのうち6点を図化した。いずれも滑石を使用しており、形状から中世に帰属する遺物と判断した。

343は、滑石製石鍋である。口縁部はわずかに左側が高く、底部に合わせて口縁部が右にわずかに傾く。罫は断面三角形を呈する。外面にスガが付着し、内面は擦痕が残る。344は滑石製石鍋で、幅0.6cmの工具で成形される。罫は断面三角形で、部分的にスガが残る。343と344は、木戸雅寿1995『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編のⅢ類-e-1・15世紀前半に属するものと考えられる。

345は本来は取っ手状のものが付き、杓子状の製品だったと思われる。受け部分の断面はU字状で、深さ約1.5cmある。全体的に研磨整形による擦痕が残る。346は、いわゆるバレン状製品である。裏面は中央部が光沢を帯び、一部欠損するが、本来の平面形状も不整半円形だった可能性が高い。347は紡錘車と考えられ、平面形はほぼ円形だが、わずかに横幅が長い。中央には穿孔部が残存するが、穿孔の全形は不明である。348は、半分を欠損している。研磨整形で、上部に径約0.8cmの両面穿孔による孔が残る。提碕石の可能性が高い。

##### 砥石

Ⅱ・Ⅲ層から出土した砥石は9点で、その全てを図化した。金属製品の研ぎに用いた可能性があると判断したため、中世の遺物として報告する。

349は頁岩製で、提碕石と考えられるが、表裏面には横方向の擦痕もあり、裏面には等間隔に刺痕が見られる。350は砂岩製で、右縁を欠損する。主な作業面は表面で、角側縁端も研磨している。351は砂岩製で、表裏両面を砥面としている。352は砂岩製で、均一な4面を砥面として利用する。側面は長軸に沿って浅く細長く凹み、平滑で軽く光沢を帯びる。353は砂岩製で、正面と表面・左側面を砥面として利用している。側面は段状だが、本来は浅い溝状と考えられる。354は砂岩製で、正面のみ砥面とし、両側面と裏面は分割時の割れ面を残す。擦痕の状況から金属器の粗砥ぎに用いた可能性がある。355は砂岩製で、正面と裏面・右側面を砥面として

利用している。また左側面を敲打部として再利用している。356は頁岩製で、剥片利用の砥石。砥面は表面1面である。357は砂岩製で、小形の石皿もしくは砥石の可能性もある。

#### 4 古代

古代に属する遺物もⅡ層を包含層とする。その出土状況は、近世や中世と比べてさらに希薄となる。特に集中域は見られない。

この時期の遺物としては、土師器、須恵器、黒色土器、赤色土器が出土している。土師器で回転糸切りを行うものは中世で報告している。遺物破片数約400点のうち、24点を図化した。8世紀後半～9世紀前半の資料である。

##### (1) 土師器 (第75図358～367)

###### 埴

口径もしくは底径が復元できるもの5点を図化した。358は定形で、口縁部が丸みをもち、口縁部下位がややすぼまる。359～361は、胴部から底部にかけての破片である。359は、腰部で強く屈曲する。360・361の高台は、「ハ」の字状に開く。

###### 坏

口径もしくは底径が復元できるもの5点を図化した。底部切り離しは全て回転ヘラ切りである。363・364は定形で、底部は回転ヘラ切りを行う。365は底部をヘラ切りし、底部直上に沈線を描く。366は口縁部から胴部まで残存し、胎土がやや赤色を呈する。367の底部では、回転ヘラ切りを行う。

##### (2) 黒色土器 (第75図368)

口径が復元できるもの1点を図化した。368は、黒色土器Ⅱ類である。丁寧なミガキを施した小皿である。

##### (3) 須恵器 (第75・76図369～382)

###### 壺書土器

369は、須恵器の坏である。底面に「中」を崩したような記号を施す。見込みには墨を擦ったような一方のキズがみられ、やや黒化しており、転写用の可能性もある。8世紀前半の資料である。

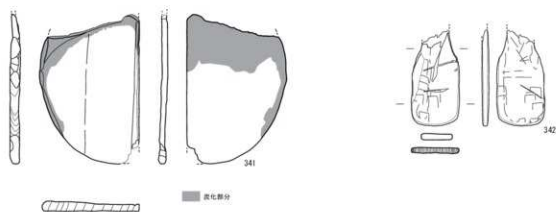
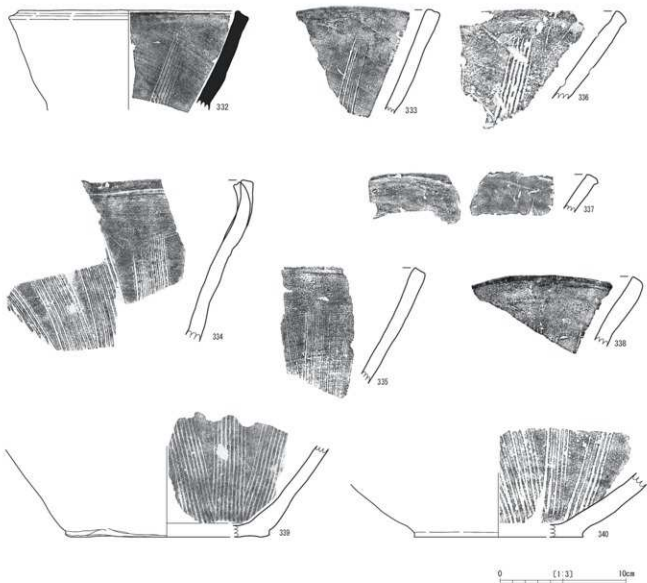
###### 壺

10点を図化した。370は、口縁部から胴部まで残存する。頸部がしまり、口縁部が短く反外している。外面には平行タタキ、内面には同心円状のタタキが施される。

371～373は、頸部から胴部にかけて残存するものである。371・372は内面に同心円状のタタキを施し、371は外面に平行タタキ、372は外面に格子目タタキを施す。

373は外面に格子目タタキ、内面に平行タタキを施す。

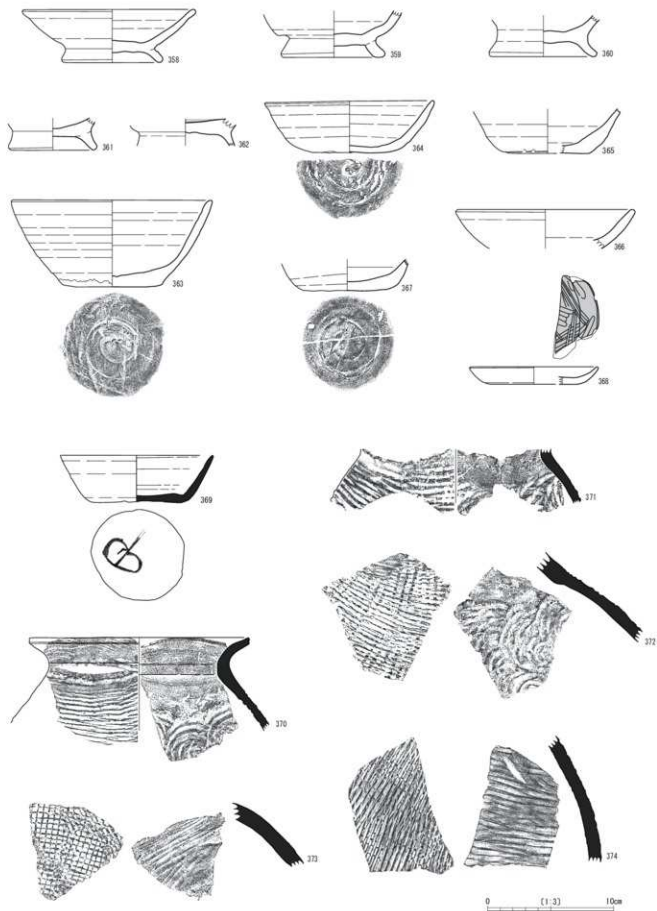
374～378は、胴部である。374・375は外面に格子目タタキを施し、374は内面に平行タタキ、375は内面に同心円状タタキを施す。376～378は外面に平行タタキを施し、内面に幅広の平行タタキを施す。



第73図 中世の遺物（5）（瓦質土器・木製品）

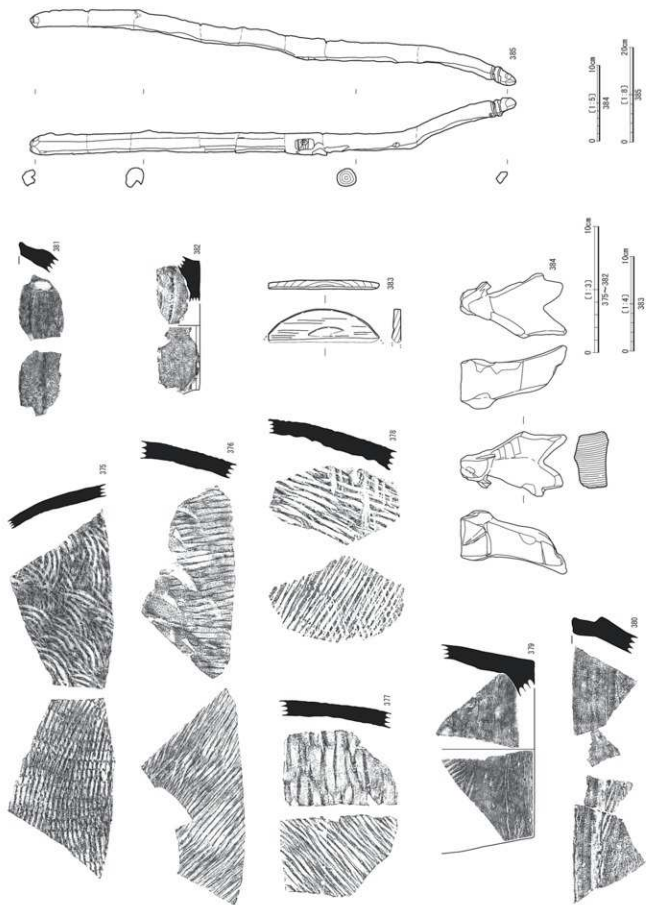


第74図 中世の遺物（6）（石製品）



第75図 古代の遺物（1）（土師器・須恵器）





第76図 古代の遺物(2) (須恵器・木製品)

379は底部である。外面に平行タキを施す。  
370~379 (373・374・377は除く)は、中岳山麓窯跡群で生産されたものと考えられる(注1)。

蓋

3点を図化した。380・381は、口縁部である。頸部が残存していないが、二重口縁となるものと想定できる。382は底部である。380~382は、いずれも中岳山麓窯跡群の資料である(注1)。

(4) 木製品 (第76図383~385)

383は、曲物の蓋か底の一部と考えられる。長さ11.8cm、幅3.5cm、厚さ0.9cmである。384は正面の左側に1.5~2cm程度の工具幅の残る加工痕が見られる。その他、

部分的に加工痕があるが、詳細は不明である。385は、柄として用いられたと考えられる。長さ約52cmの棒の下端3cmを丸く加工し、直上に溝を2本巡らせている。柄の下部約22cmが曲がっているが、下端の形状から組合せ鋤の柄の可能性も考えられる。383~385は、自然科学分析を行った。放射性炭素年代測定において383は7~9世紀、384は10~11世紀、385は10~11世紀という結果であった。詳細については、第3分冊「第8章」を参照していただきたい。

注1 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター中村直子センター長のご教授による。

第12表 古代~近世遺物観察表(土器・土製品)(1)

図録番号	図録番号	出土区	層位	種別	形状	時代	法量(%)			調製		色調		焼成		胎土				備考				
							□	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	
甲	247	E-15	Ⅱ	土器類	皿	寛形	中世	7.7	5.0	1.2	ナデ	-	-	灰白	灰白	普通	-	○	○				未切り	
	248	E-13	Ⅱ	土器類	皿	寛形	中世	7.9	5.4	2.3	回転ヘラケズリ	-	-	橙	橙	普通	-						未切り	
	249	F-14	Ⅱ	土器類	皿	寛形	中世	8.0	7.2	0.9	-	ヘラケズリ	-	-	に高い 黒褐色	に高い 黒褐色	普通	-					○	未切り
	250	F-14	Ⅱ	土器類	皿	寛形	中世	8.0	6.2	1.4	回転ヘラケズリ	-	-	に高い 黒褐色	に高い 黒褐色	普通	-					○	スズ 未切り	
	251	C-19	Ⅱ	土器類	皿	寛形	中世	10.4	8.0	2.2	回転ヘラケズリ	-	-	灰白	灰白	良好	普通						未切り	
	252	F-13	Ⅱ	土器類	皿	寛形	中世	12.8	10.2	2.8	回転ヘラケズリ	-	-	洗練	洗練	良好	普通					○	未切り	
	253	F-15	Ⅱ	土器類	皿	口縁部	中世	-	12.4	13.0		回転ヘラケズリ	-	-	に高い 黒褐色	に高い 黒褐色	良好	普通			○			未切り
	254	C-13	Ⅱ	土器類	皿	底部	中世	-	8.6	11.0		ヘラケズリ	-	-	灰	灰	良好	普通						未切り
	255	D-15	Ⅱ	土器類	皿	底部	中世	-	8.4	11.0		-	-	-	灰白	灰白	二次	普通						スズ 未切り
	256	C-21	Ⅱ	土器類	皿	底部	中世	-	9.8	12.0		回転ヘラケズリ	-	-	に高い 黒褐色	洗練	良好	普通					△	スズ 未切り
	257	C-24	I	土器類	皿	底部	中世	-	10.3	12.1		回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	-	洗練	洗練	普通	-			○	○		未切り
	乙	324	D-13	Ⅱ	東岳山麓窯跡群	土器類	中世	-	-	-	筋ナデ	筋ナデ	-	灰	灰	普通	-						△	
325		C-22	Ⅱ	東岳山麓窯跡群	土器類	中世	-	-	-	-	-	-	-	黒褐色	黒褐色	普通	-							
326		B-13	Ⅱ	東岳山麓窯跡群	土器類	中世	-	8.2	11.0		回転ヘラケズリ	筋ナデ	-	黄白	黄白	普通	-							未切り
327		D-12	I	東岳山麓窯跡群	土器類	中世	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	-	灰白	灰白	普通	-								
328		F-13	Ⅱ	榑方工芸窯跡群	土器類	中世	-	-	-	格子目タキ	ハケメ ナデ	-	褐色	灰	良好	普通							○	
329		C-18	Ⅱ	榑方工芸窯跡群	土器類	中世	-	-	-	格子目タキ	ハケメ	-	灰	灰	普通	-								
330		F-14	Ⅱ	榑方工芸窯跡群	土器類	中世	-	-	-	格子目タキ	ハケメ	-	灰	灰	良好	普通								
331	F-13	Ⅱ	中世遺物	土器類	中世	-	-	-	ナデ	ナデ	-	褐色	灰	良好	普通							△		
丙	332	C-24	I	瓦葺土器	土器類	中世	-	79.0	-	(7.8)	回転ヘラケズリ 無調整層	回転ヘラケズリ	6.8無調整層 調整層	灰	灰	-	-							
	333	C-24	I	瓦葺土器	土器類	中世	-	-	-	-	-	-	3.8無調整層 調整層	灰	灰	-	-							
	334	D-16 E-9	Ⅱ	瓦葺土器	土器類	中世	-	-	-	-	-	-	灰	灰	-	-								
	335	C-23 C-29	Ⅱ	瓦葺土器	土器類	中世	-	-	-	-	-	-	褐色	灰	灰	-	-							
	336	C-24	I	瓦葺土器	土器類	中世	-	-	-	-	-	-	5.8無調整層 調整層	洗練	洗練	-	-							
	337	B-17	Ⅱ	瓦葺土器	土器類	中世	-	-	-	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	-	灰白	灰白	-	-								
	338	C-24	Ⅱ	瓦葺土器	土器類	中世	-	-	-	回転ヘラケズリ 無調整層	回転ヘラケズリ 無調整層	-	灰黄	灰白	干煎	-	-							
	339	C-20	Ⅱ	瓦葺土器	土器類	中世	-	16.2	17.2		-	-	-	褐色	灰褐色	-	-							
	340	C-19	Ⅱ	瓦葺土器	土器類	中世	-	13.4	15.1		-	-	-	に高い 黒褐色	に高い 黒褐色	-	-							
	丁	358	B-12 E-12	Ⅱ	土器類	甕	寛形	古代	13.8	6.0	4.2	回転ナデ	回転ナデ	-	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	普通					○	
359		B-9	Ⅱa	土器類	甕	寛形	古代	-	8.2	13.7		回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ヘラケズリ	-	洗練	洗練	普通	普通				○	○	
360		F-15	Ⅱ	土器類	甕	寛形	古代	-	8.5	13.2		回転ナデ	回転ナデ	-	洗練	洗練	普通	普通						
361		A-9	Ⅱa	土器類	甕	底部	古代	-	6.6	12.5		回転ナデ	回転ナデ	-	に高い 黒褐色	に高い 黒褐色	普通	-			○	○		





第16表 古代～近世遺物観察表（陶磁器類）（3）

発掘番号	埋藏番号	出土区	層位	器種	形状	部位	分類	法量 (cm)			出土	胎土			産地	時期	調査	
								口径	底径	底高		色調	種類	色調				胎粒単位
71	305	C-19	Ⅱ	石皿	八角形	胴～底部	森田群	—	3.3	0.0	0.0	灰白	—	灰白	胴部下半以外 裏面下半分不露胎	中国	14c後～15c前	
	306	C-24	1	石皿	八角形	底部	森田群	8.0	3.5	3.2	灰白	透明胎	灰白	全面(口部一部) 裏面半分不露胎	中国	中世		
	307	D-25	Ⅱ	青磁皿	合子の皿	口縁部	—	—	—	—	灰白	透明胎	灰白	厚胎露胎	中国	中世		
	308	C-18	1	青花	皿	底部	小野原群	14.0	6.6	5.5	灰白	透明胎	灰白	露胎(器内内) ～下部露胎	濠洲産	14c後～15c前		
	309	C-26	1	青花	皿	口縁部	小野原群	14.2	—	0.0	灰白	透明胎	灰白	全面	中国	中世		
	310	C-29	Ⅱ	青花	皿	口縁部	小野原群	—	—	—	灰白	透明胎	灰白	全面	中国	15c～16c		
	311	D-5	1	青花	皿	底部	小野原群	—	4.8	0.9	に濃い 露胎	透明胎	灰白	高台露胎	濠洲産	15c末～16c中		
	312	C-24	Ⅱ	青花	皿	底部	小野原群	—	4.6	0.7	灰白	透明胎	明緑区	露胎胎ばぎ	中国	16c～		
	313	D-28	1	青花	皿	胴～ 底部	小野原群	—	—	—	灰白	透明胎	灰白	露胎胎ばぎ	濠洲産	中世		
	314	E-C-22	Ⅱ	青花	皿	口縁部	小野原群	—	—	—	灰白	透明胎	灰白	全面	中国	16c中～17c前 全		
	315	C-20	1	青花	皿	口縁部	小野原群	—	—	—	灰白	透明胎	灰白	全面	濠洲産	15c末～16c中		
	316	E-C-22	Ⅱ	青花	皿	胴～ 底部	小野原群	—	3.6	0.9	灰白	—	灰白	底部下半露胎	濠洲産	15c末～16c中	瀬川産	
	317	C-19	1	青花	皿	底部	小野原群	—	4.8	0.9	灰白	—	灰白	高台内露胎	濠洲産	15c末～16c中	瀬川産	
	318	C-17	Ⅱ	青花	皿	底部	森田群	0.0	6.0	2.6	灰白	透明胎	灰白	外周底部下半 露胎(口縁部)	濠洲産	16c		
	72	319	E-16	Ⅱ	陶器	箱子	底部	古瀬戸	—	9.6	6.2	灰白	自然胎	灰オリーブ	外露	瀬戸	中世	
		320	C-18	Ⅱ	陶器	鉢	口縁部	—	—	—	—	黄区	自然胎	灰オリーブ	外露	黄瀬	13c後半～14c	
		321	B-12	Ⅱ	陶器	鉢	底部	—	—	—	—	灰褐	—	—	—	黄瀬	中世	
322		C-24	Ⅱ	陶器	すり鉢	底部	—	2.4	14.0	10.9	明赤褐	自然胎	に濃い赤褐	口縁内露	備前	中世15c		
323		C-29	Ⅱ	陶器	すり鉢	口縁部	—	—	—	—	灰褐	自然胎	に濃い赤褐	内露	備前	中世		

第17表 古代～近世遺物観察表（木製品）

発掘番号	埋藏番号	出土区	層位	器種	形状	法量 (cm)			備考	
						最大長	最大幅	最大厚		
73	341	F-15	1	漆物	モミ属	15.8	10.5	3.1	紅白肌、裏げ有	埋No 83
	342	D-14	Ⅱ	漆物	—	02.6	6.3	0.9	—	埋No 87
76	363	—	Ⅱb	漆物	—	11.8	3.5	0.9	—	埋No 47
	364	E-10	Ⅱc	漆	イテイガシ?	14.0	8.5	4.5	—	埋No 70
	365	A-10	Ⅱa	漆	タイミンタナバ	120.9	12.0	5.5	露胎物?	埋No 49

第18表 古代～近世遺物観察表（石器・石製品）

発掘番号	埋藏番号	出土区	層位	器種	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
74	343	D-15	Ⅱ	石皿	滑石	口径 19.7	底径 11.8	底高 10.4	—	
	344	C-19	Ⅱ	石皿	滑石	—	—	—	—	
	345	E-14	Ⅱ	刀子状製品	滑石	3.7	0.7	2.0	24.85	
	346	D-22	Ⅱ	バレン状製品	滑石	6.1	4.7	1.0	80.06	
	347	D-25	Ⅱ	研鉢車	滑石	4.1	3.0	0.6	12.31	
	348	C-17	Ⅱ	研砥石	滑石	0.7	0.8	0.2	27.60	
	349	E-14	Ⅱ	砥石	SH	9.5	2.4	1.0	68.50	
	350	D-12	Ⅱ	砥石	SA	8.0	3.7	0.7	36.10	
	351	E-14	Ⅱ	砥石	SA	11.0	8.1	1.3	147.50	
	352	E-12	Ⅱ	砥石	SA	13.0	11.0	3.3	524.50	
	353	D-24	Ⅱ	砥石	SA	13.1	7.8	5.2	644.10	
	354	D-18	Ⅱ	砥石	SA	11.2	0.6	4.0	101.00	
	355	D-12	Ⅱ	砥石	SA	10.1	8.0	3.1	364.4	
	356	E-15	Ⅱ	砥石	SH	15.5	4.7	2.3	162.50	
	357	E-13	Ⅱa	石皿(砥石?)	SA	12.9	13.1	7.2	1230.00	

## 第5章 縄文時代晩期～古墳時代の調査

### 第1節 遺構

調査区域は、大まかに7区から15区にかけての低湿地部と15区から29区にかけての低地部に分かれる。古墳時代の遺構は、C-27～29区で溝状遺構が検出された。弥生時代の遺構は17区から27区の低地部で、堅穴建物跡、集石、土坑が検出された。弥生時代から古墳時代にかけての遺物を包含するのは、低地部基本層序のⅡ層となる。本来ならⅡ層が遺構の検出面となるが、低地部においても攪乱や削平のため遺構の検出面がⅢ層以下となることもあった。検出された古墳時代と弥生時代の遺構の配置図は、第77図に示した。なお、縄文時代晩期に属する遺構は、検出されなかった。

#### 1 古墳時代の遺構(第77図)

古墳時代の遺構は、調査区の南側で検出された溝状遺構のみである。検出された遺構の位置は、第77図に弥生時代の遺構と共に示した。

#### 溝状遺構20号(第80～82図386～420)

C-27～29区、Ⅲ層で検出されたが、本来はⅡ層からの掘り込みであったことが土層断面で確認されている。全長22.8m、最大幅1.4m、最大深度0.4mであった。C-28区で土坑4号に、C-29区で土坑2・3号に切られる。南端はC-29区の調査区域を越えて延びると考えられる。埋土から古墳時代、弥生時代、縄文時代の遺物が出土した。以下、時代毎に記述する。

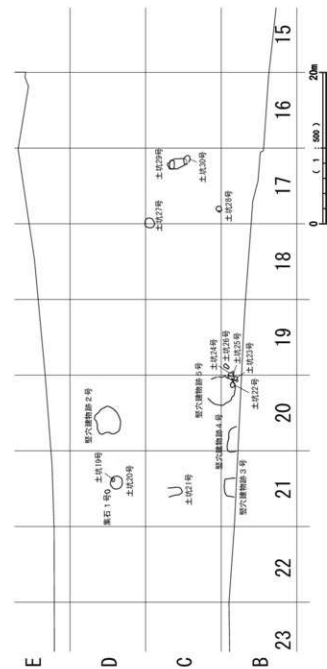
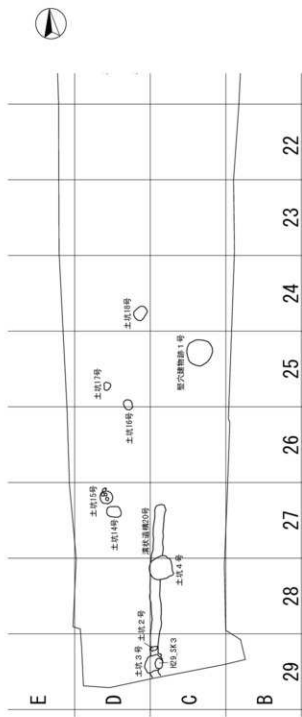
386～400は、古墳時代の土器である。甕、壺、鉢、高坏を円化した。全て中津野式土器と考える。

386～394は、甕である。「ハ」の字状に開く脚部から胴部へは緩やかに膨らみながら立ち上がり、頸部で縮まり、口縁部は外反する器形をもつ。口唇部は、丸味をもつものと平坦となるものがある。386は完形品で、口径23.8cm、底径9.0cm、器高25.4cmを測る。頸部の内面には明瞭な稜をもつ。口唇部は丸く取めるが、一部平坦な部分もある。内外面ともハケメ、ナデ、指押さえの器面調整が施される。胴部中央付近から口縁部にかけてスガが付着し、被熱による表面の剥落が2か所で見られる。387も完形品で、口径24.9cm、底径9cm、器高24.4cmを測る。頸部で縮まる器形だが、その縮まりはやや弱い。頸部の内面には稜をもつ。やや丸味のある口唇部である。外面はハケメ、ナデ、ケズリ、指押さえで、内面はハケメ、ナデ、指押さえで器面調整を行う。胴下半から口縁部までスガが付着し、被熱による表面剥落が見られる。388は完形品で、口径25.5cm、底径10.3cm、器高30.6cmを測る。口縁部の高さが一定でなく、歪な器形となる。386・387と比べると脚が高い。外面はハケメ、工具ナデ、内面はハケメ、工具ナデ、指ナデで器面調整を行う。胴

下半から口縁部までスガが付着する。389は脚部を欠損し、口径は14.8cmを測る。胴部は緩やかに膨らみ、外反する口縁部の器壁は薄くなる。内面には明瞭な稜をもつ。外面はハケメ後ナデ、内面ハケメ後ナデで器面調整を行うが、指頭痕も残る。外面の大半が剥落し、内面も一部剥落する。外面の剥落のない部分にはスガが付着する。390は脚部を欠損し、口径は21.0cmである。頸部の屈曲は緩やかである。赤みの強い色調である。外面はケズリ、ナデ、内面はナデ、ハケメで器面調整を行う。外面には部分的にスガが付着する。391は脚部を欠損し、口径は25.4cmを測る。頸部の縮まり具合がやや緩やかで、頸部から口縁部までの長さも一定しない。口縁部断面は方形で、部分的に口唇部がくぼむ。外面はハケメ後ナデ、指ナデ、指押さえ、内面はハケメ後ナデ、工具ナデ、指ナデ、指押さえで器面調整を行う。胴部下位から口縁部にかけてスガが付着し、被熱による表面剥落が多く見られる。中津野式土器の中でも最新相もしくはそれよりやや下の時期と考えられる。392は「く」の字状に外反する口縁部だが、端部も欠損する。内面に稜をもつ。内外面とも器面調整のハケメが残る。393・394は、脚部である。394は底径9.9cmを測り、器面調整は内外面ともケズリ後ナデを行う。内面にはスガが付着し、外面には剥落が見られる。

395～397は、鉢である。口径25.4cm、底径9.4cmを測る。大きく開く台部から緩やかに膨らむ胴部を経て、口縁部は外反する。内面には緩やかな稜をもつ。丁寧な成形及び調整である。外面は指押さえ、ナデ、ハケメ、内面はナデ、ハケメ、ミガキで器面を調整する。外面に広範囲にわたって黒斑が付き、口唇内面はスガの付着が一周する。396・397は、鉢の胴部から底部にかけての破片である。両者の大きさは異なるが、同じ製作技法である。396は、底部から胴部に向かって器壁が薄くなる。成形は丁楽で、器面調整は外面がケズリ後ハケメ、内面はハケメ後ナデが行われる。また、外面に黒斑が付き、広範囲で表面の剥落が見られる。397は396と同じ器形だが、大きさが2/3程度となる。器面調整は外面がケズリ後ハケメ、内面がハケメ後ナデである。器面の色調は赤みが強く、外面に黒斑が付く。

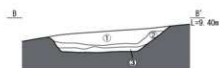
398・399は、壺である。398は胴部から口縁部が残存し、口径は7.0cmを測る。膨らんだ胴部に、短い口縁部は頸部から直立し、端部は丸味を帯びる。内面はナデで器面調整を行い、外面には工具ナデ痕が、口縁部から頸部直下まで筋状に遡る。399は、胴部から口縁部が残存する。口径は14.6cmを測る。なで肩で頸部が縮まり、口縁部は外反する。赤みの強い色調を呈する。器面調整は



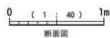
第77図 弥生・古墳時代の遺構配置図



- 埋土 ①黒褐色土  $\phi$ 5mm大のふい黄褐色パミスを少量含む。また、 $\phi$ 5~20mm大のアカハヤブロックを含む暗褐色も散見できる。
- ②暗褐色土  $\phi$ 10mm大の黄褐色パミスや明黄褐色パミスやアカハヤブロックを含む。粘性は弱い。
- ③黒色土  $\phi$ 5mm大のふい黄褐色パミスを含む。しまりがあり、粘性もややある。
- ④黒褐色土  $\phi$ 10mm大のアカハヤブロックを含む。粘性は弱い。

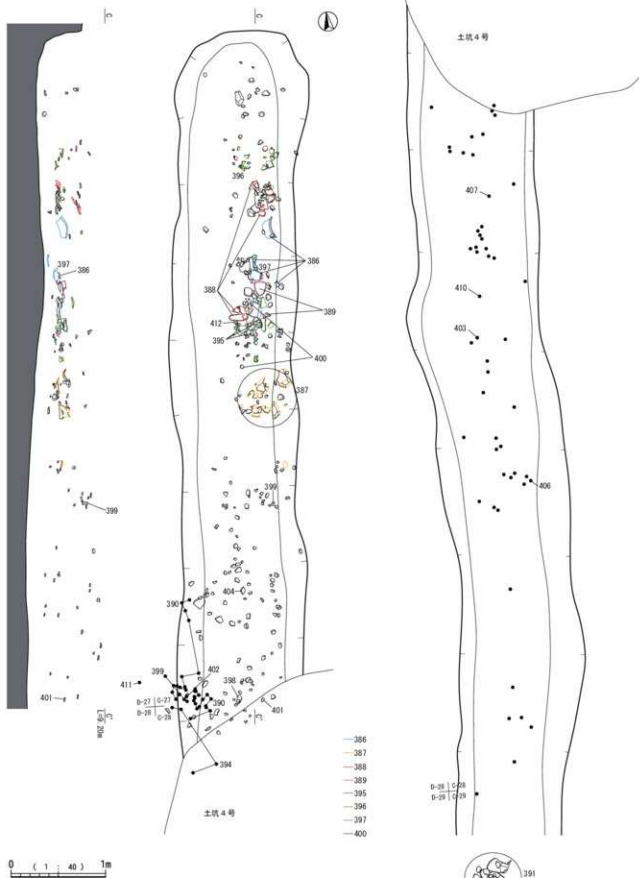


- 埋土 ①黒色土 砂質で $\phi$ 5mm大のパミスを含む。しまり、粘性とも弱い。
- ②黒褐色土 褐色やふい黄褐色のアカハヤブロックを含む。しまりは弱い。
- ③明黄褐色土 砂質で黒褐色土を併々含む。しまりはない。

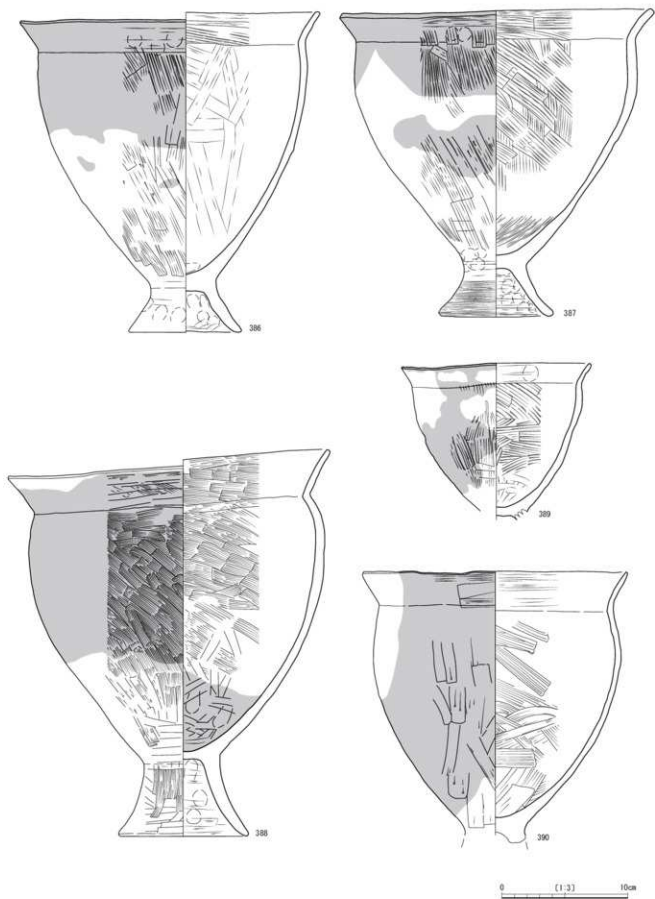


第78図 溝状遺構20号

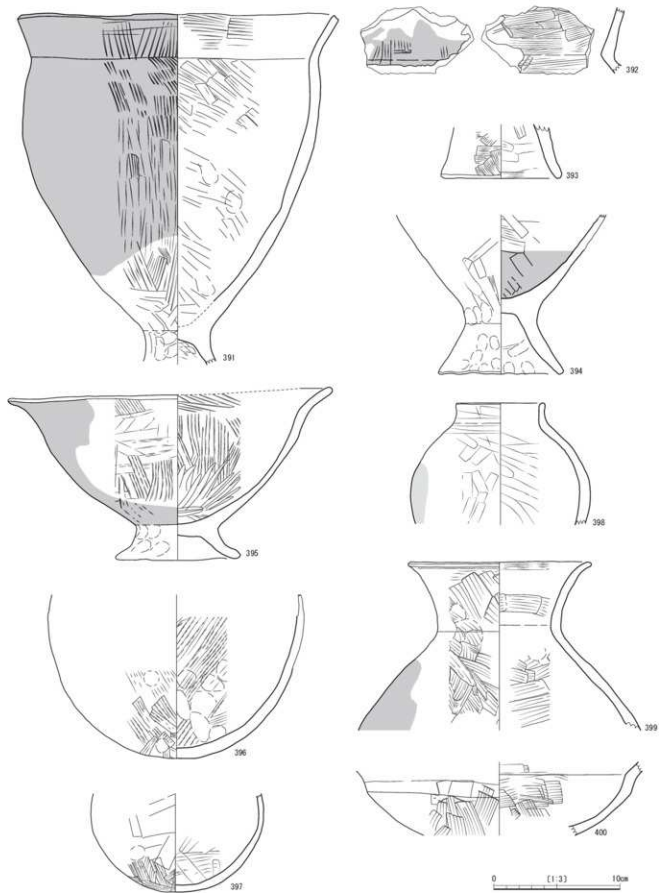




第79图 溝状遺構20号遺物出土状況図



第80図 溝状遺構20号出土遺物(1)



第81圖 溝状遺構20号出土遺物(2)

外面がハケメ、口縁部付近はナデ、内面はハケメ、ナデで調整される。内面には部分的に剥落が見られる。

400は高坏の坏部で、口縁端部を欠損する。外面の成形や器面調整は粗い。内面はハケメ、外面はケズリ後ハケメで器面調整が行われる。

401~414は、弥生時代に属する土器である。甕、浅鉢、壺、高坏、土製品を掲載した。

401~405は、甕である。401は如意形の口縁部で、口唇部には刻みを施す。内外の器面には丁寧なナデが施される。402も如意形の口縁部で、口唇部外端から口縁部にかけて押し刻目が連続して施される。401・402ともに弥生時代前期の土器である。403は口縁部で、内湾する口縁端部に断面が方形の突帯を貼り付け、刻みを施す。さらに、突帯は下方に垂れる。内外面とも器面調整は、ナデである。弥生時代前期の土器に比定できる。404・405は、底部片である。404の底径は、7.0cmを測る。外面にはハケメ、指頭痕が残る。内面はハケメやナデで器面調整が施される。405は接地面がやや張り出し、内外面ともナデの調整が行われる。

406は、無文の浅鉢である。胴部に屈曲部をもち、口縁部は内傾する器形で、屈曲部から口縁部にむかって器壁が徐々に薄くなる。内外面ともナデによる器面調整である。

407~411は、壺である。407は、外反する口縁部である。口唇部は浅い「M」字状となる。内外面ともミガキが施される。408は、やや外開きの口縁部外端に断面「M」字状の突帯を貼り付ける。内外面ともナデ調整が行われる。弥生時代中期に比定できる。409は胴部片で、貝殻刺突を横位に2段施す。410・411は、底部である。410は底部から開きながら立ち上がる器形で、底径9.2cmを測る。外面にミガキとナデ、内面にはナデが施される。411は上げ底で、内外面ともナデによる器面調整が施される。

412・413は、高坏の脚部である。412は、脚部と胴部の境に三角突帯を巡らせる。内外面ともナデで調整する。413は、内外面を指ナデで調整を行う。414は、弥生土器の胴部片を打ち欠く円盤状土製品である。

415~420は、縄文時代の遺物である。415は、波状口縁の波頂部に口唇部から口縁部内面までヘラ状工具による刻みを施す。外面にはヘラ状工具で直線と曲線で文様を施す。内外面ともナデ調整が行われる。416は、口縁端部内面を斜めに面取する。外面には、ヘラ状工具で斜位の沈線を施す。417は口縁部で、補修孔をもつ。内外面ともナデで調整を行う。415~417は、指宿式土器である。418は波状を呈す断面三角形の口縁部で、沈線と刺突で文様を施す。市来式土器である。419は、無文の深鉢である。直線的に伸びる胴部は、口縁部でやや内湾気味となる。口径21.8cm、底径10cm、器高16.8cmを測り、

器壁の厚さは1cmを超え、重量感がある。内外面ともナデで調整される。縄文後期の土器と考えられる。420は、縄文後期と考えられる土器の胴部片を打ち欠いて作製した円盤状土製品である。

## 2 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、竪穴建物跡5軒、集石1基、土坑17基である。前述のとおり、検出層は本来Ⅱ層であるが、擾乱等の影響によりⅣ層で検出された遺構もある。遺構配置図は、第77図に示した。以下、遺構の種別毎に記述する。

### (1) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は、20区で3軒、21区で1軒、25区で1軒検出された。検出面は1軒だけⅡ層で、他はⅣ層であった。平面形は円形もしくは隅丸方形であるが、不明確なものもあった。5軒の竪穴建物跡の時期については、出土遺物や埋土から弥生時代早期から前期に属すると考えられる。

#### 竪穴建物跡1号（第83図421）

C-25区、東側の調査区境近くのⅡ層で検出された。3.42×3.38mのほぼ円形プランで、深さは最深部で0.3m程度であった。床面および床面から壁にかけて5基の柱穴が確認された。柱穴は径0.2m前後のものが3基、径0.1m程度のものが2基で、深さは0.1mから0.3mであった。また、柱穴の埋土は、黒色土の単層であった。

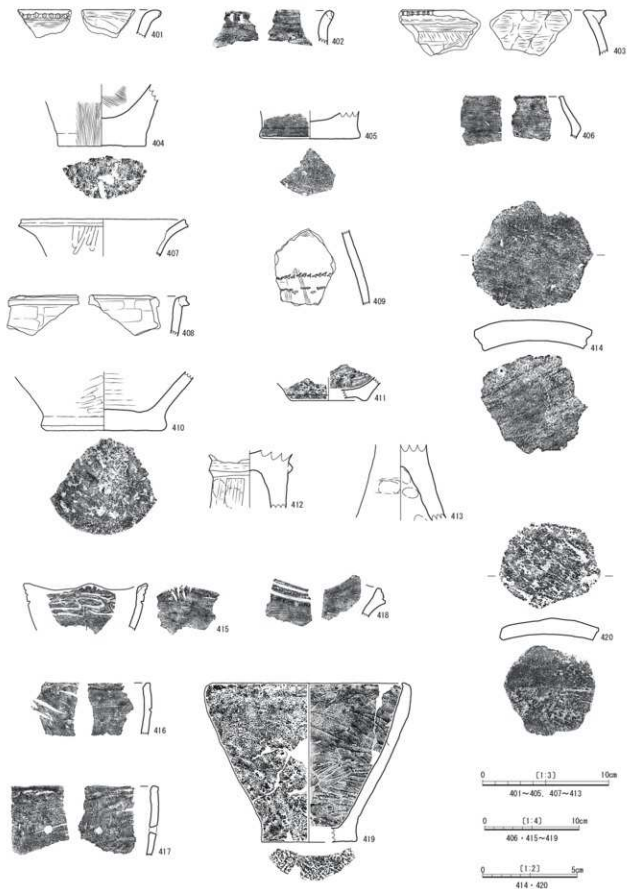
埋土中から50点ほどの遺物が出土したが、小片が多く一括で取り上げた。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石鏃、礫が出土した。遺物のほとんどが弥生土器の胴部片で、胎土及び調整から弥生時代前期と考えられる。また、珪化木と考えられるものも出土した。長さ7cm、幅10cm、重さ380gを測る。

421は、安山岩製の石鏃である。先端は欠損し、浅い凹基で刃縁部は僅かに潰れている。

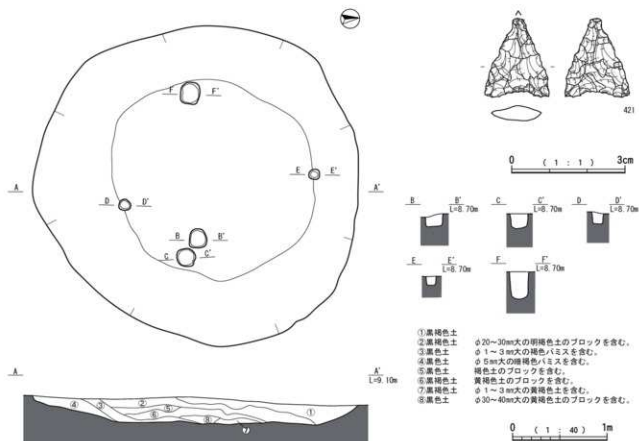
#### 竪穴建物跡2号（第84・85図422~431）

D-20区、Ⅳa層上面での検出である。ほぼ床面しか残らない状況で検出したため平面形は不明確であるが、円形と考えられる。残存部分は長軸3.61m、短軸3.1m、深さは0.2mほどであった。遺構内から2基の柱穴を検出した。さらに、東側に隣接し、柱穴が1基検出された。本来の遺構の広がりを見ると、この柱穴も本遺構に伴うものと考えられる。この柱穴の埋土は軽石がふやけたような灰白色土を多く含んでいた。3基の柱穴は最大径が0.2mと0.4mのものがあり、深さは0.2~0.4mであった。埋土は、黒褐色土もしくは暗褐色土を主体とする。

遺構内からは78点の遺物が確認され、大半が弥生土器の胴部片であった。他には縄文時代後期と考えられる土器片、黒曜石の剥片等が出土した。出土した遺物のうち8点を図化した。422~426は、甕である。422は口縁部で、折り曲げて口縁端部を作る。工具ナデによる丁寧な



第82図 溝状遺構20号出土遺物(3)



第83図 竪穴建物跡1号及び出土遺物

器面調整である。423は、口縁端部に断面が三角形の突帯を貼り付ける。外面にはススが付着する。424は完形品で、口径23.3cm、底径8cm、器高27.9cmを測る。口縁部は左右で高低差があり、歪な器形となる。胴部は、膨らみをもちながら口縁部に至る。口縁端部に断面が台形状の突帯を貼り付け、口縁部と一体となった平坦な面を作るが、やや下方に垂れる。また、その先端には浅い凹みを巡らせる。口縁部下位には低い突帯を3条施す。弥生時代中期の入来I式に比定できる。425は胴部片で、米粒大の刻みをもつ突帯を貼り付ける。器面調整は、ナデが施される。426は、弥生土器の底部と考えられる。内外面ともミガキによる器面調整が施される。

427・428は、壺である。427は口縁部で、端部は丸く収める。内外面ともミガキによる器面調整が施される。428は口縁部で、端部は方形に近い断面となる。ミガキ、ナデによる器面調整である。入来I式土器である。

429は、弥生土器と考えられる胴部片を打ち欠いて作った円盤形土製品である。

430は、安山岩製の石織である。二等辺三角形に近い形状で、浅い凹基である。両側縁には微細刻みが顕著で

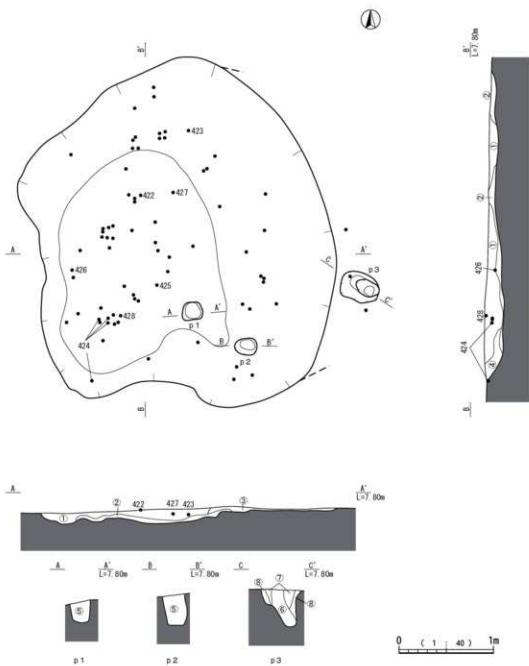
ある。431は、敲石である。三角柱状の素材の鋭利な右辺のみ敲打痕とこれに伴う衝撃剝離が認められる。他の面の稜線は摩耗している。

422~428は、弥生時代前期から中期の土器である。また、弥生時代中期と考えられる424・428は埋土の中位以上で出土し、埋土の下位には掲載できなかったが弥生時代前期の土器が出土していることから本遺構の時期は弥生時代前期と考えられる。

#### 竪穴建物跡3号（第86図432・433）

B・21区の東側、調査区境のIVb層で検出された。B・C・20・21区付近は近現代の掘削のため、II層からIVa層は残存しない。平面形が不明確だったため、調査区境にミニトレンチを設定して立ち上がりを確認した。遺構の半分程度は調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面形は隅丸方形と考えられる。検出した規模は、長軸252m、短軸145m、深さ0.19mであった。

出土した遺物のうち、2点を図化した。432は、甕の口縁部である。口縁端部に突帯を貼り付け、平坦な口縁部を作る。突帯には刻みが施される。433は壺の胴部で、間隔の開いた細かい刻みが施される突帯が1条貼り付

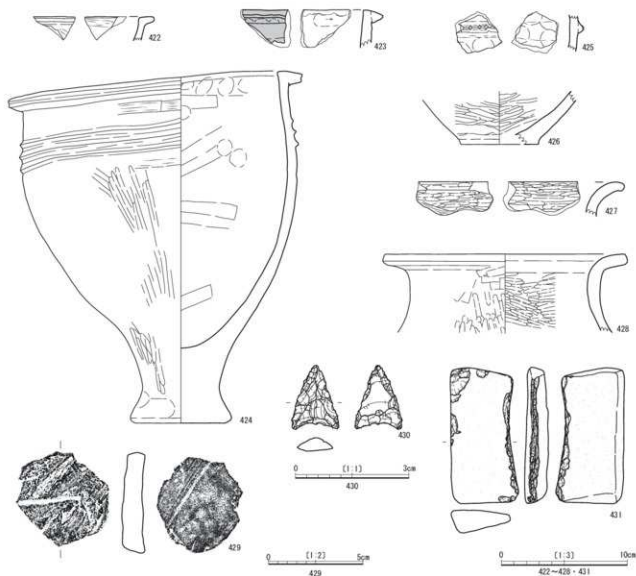


埋土

- ① 黒褐色土  
 暗褐色を呈する鉄分を含む。  
 φ50cm大の黄褐色及び淡黄褐色パリスを極少量含む。  
 しまり、粘性ともある。
- ② 黒褐色土と明黄褐色土の混土  
 しまりはややあるが、粘性はない。
- ③ 暗黄土  
 草屑土を少量含む。  
 しまりはややあるが、粘性はない。
- ④ 黒褐色土  
 φ15mm大の黄褐色パリスを含む。  
 しまり、粘性ともある。

- ⑤ 黒褐色土  
 明黄褐色小パリスを極少量含む。  
 しまりはあるが、粘性は弱い。
- ⑥ 暗褐色土  
 軽石状の小片がふやけた状態に似た灰白色土が多量に  
 混じる。しまりはないが、粘性は強い。
- ⑦ 黒褐色土  
 淡黄褐色土を極少量含む。しまりはないが、粘性は強い。
- ⑧ 黒褐色土  
 ⑦と比べ、しまりはあるが、粘性は弱い。明黄褐色土は見  
 られない。

第84図 竪穴建物跡2号



第85図 竪穴建物跡2号出土遺物

られる。いずれも弥生時代前期に比定できる。

#### 竪穴建物跡4号(第86図)

B-20・21区のIV a層で検出された。本遺構の周辺はⅡ・Ⅲ層は削平を受け、表層下はIV a層であった。遺構の大部分は調査区外へ拡がり、全容はつかめなかった。残存する長軸3.3m、短軸0.9m、深さは0.1mから0.15mであった。平面形は隅丸方形と考えられる。

埋土中から遺物の出土は確認されなかった。

#### 竪穴建物跡5号(第87図434・435)

B・C-20区、IV a層で検出された。遺構の西側部分は1/3程度が削平され、床面からも0.15mほどしか残存しない。平面形は円形と考えられ、径は約3.7m程である。本遺構に伴うと考えられる柱穴が床面から1基、壁面から4基確認された。5基の柱穴は径が0.2~0.3m、

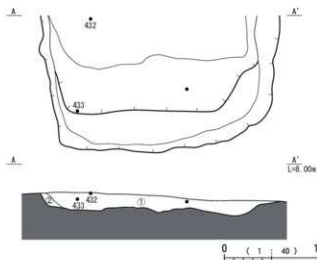
平面形が円形もしくは楕円形を呈する。深さは浅いもので0.2m、深いもので0.58mであった。埋土は単層で、黒褐色土もしくは類似する暗褐色砂質土であった。

また、東側の一段高い部分の床面で上部を本遺構に切られた土坑22号が検出された。さらに、この土坑22号の北東隅を切る柱穴p5が検出されている。

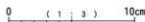
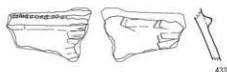
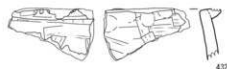
埋土中から20数点の遺物が出土し、その大半が弥生土器であった。その中の2点を図化した。434は甕の口縁部で、その端部に刻目突帯を貼り付け、平坦に仕上げるものである。突帯の下に棒状工具を押し当てた痕跡が残る。435は、甕の底部である。いずれも弥生時代前期に比定される。他には土師器、青磁が各1点出土しているが、混入と判断した。



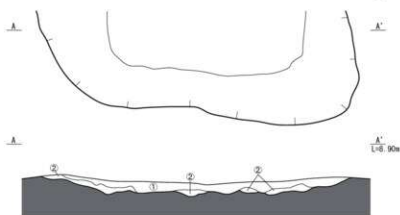
竪穴建物跡3号



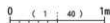
埋土 ①黒褐色土 淡黄褐色砂質土が少量混じる。  
黒色が強く、しまりがあり、粘性も強い。  
②黒褐色土と淡黄褐色砂質土の混土



竪穴建物跡4号



埋土  
①黒褐色土  
φ10cm大の黄褐色パミスと  
明黄褐色土(IV期)を少量含む。  
しまりはないが、粘性は強い。  
②黒褐色土と明黄褐色土(IV期)の混土  
①よりIV層土の割合が多い。



第86図 竪穴建物跡3・4号及び3号出土遺物

(2) 集石1号(第88回)

D-21区、土坑20号の南西に隣接したⅡ層で検出された。数cmから10cm大の4個の礫で構成される。掘り込みをもち、その平面形は長軸0.68m、短軸0.44mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.14mで、底面は西から東へ低くなる。

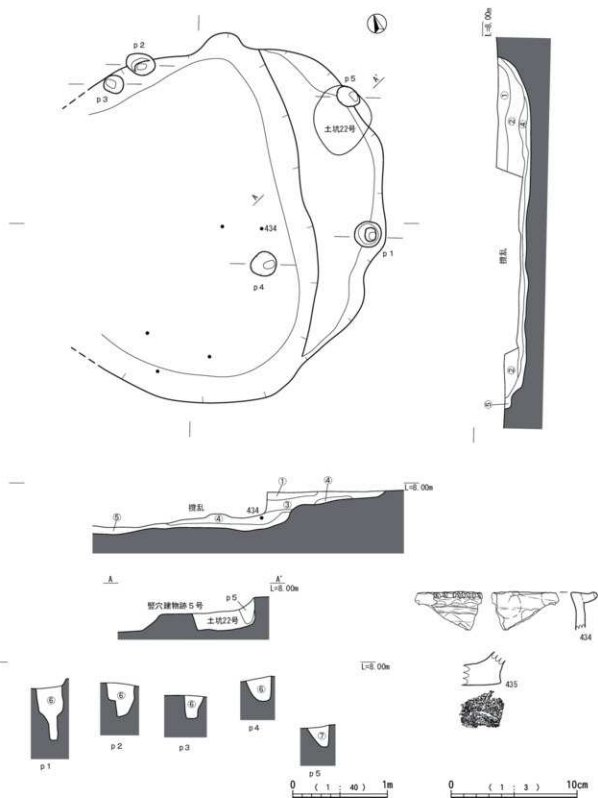
遺構内から遺物の出土は確認されなかった。

(3) 土坑

土坑は17区から27区にかけての低地部で、土坑14号から30号までの17基が検出された。検出層は、Ⅲ層である。土坑の埋土は、基本的に黒色土もしくは黒褐色土を主体とする。

17基の土坑は、その形状で次のように分類した。なお、切り合い関係があることから、挿図の都合上、遺構番号順に掲載した。分類は平面形を基にしており、中・近世と同じである。

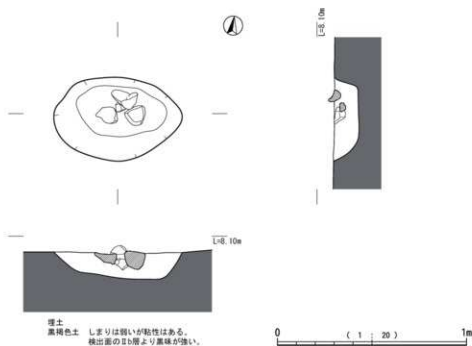
- I類 円形もしくは円形に近いもの  
15号 19号 20号 22号 27号 28号
- II類 方形もしくは方形に近いもの  
14号 16号 18号 23号 24号 25号 30号
- III類 不定形、攪乱等で形状が不明なもの  
17号 21号 26号 29号



- 埋土 ①黒褐色土  $\phi$ 10cm次の赤褐色のバミス(アカホヤ)を極少量含む。しまりはあるが、粘性は弱い。
- ②黒褐色土  $\phi$ 10cm次の赤褐色のバミス(アカホヤ)を極少量含む。しまりは弱い。粘性をもつ。  
①よりも黒味が強い。
- ③黒褐色土(Ⅱ)と黄褐色砂質土(アカホヤ)の混土  
④黒褐色土 黄褐色砂質土(アカホヤ)が一部混じる。しまりは弱い。粘性はある。

- ⑤黒褐色土と淡黄褐色砂質土(シラス)の混土  
しまり、粘性とも弱い。
- ⑥黒褐色土 明黄褐色(アカホヤ)がまばらに含む。しまりは弱い。粘性はある。
- ⑦暗褐色砂質土 明黄褐色砂質土(アカホヤ)が多く混じる。しまりはあるが、粘性はない。

第 87 図 竪穴建物跡 5 号及び出土遺物



第88図 集石1号

土坑14号 (第89～91図436～443)

D-27区、Ⅲ層で検出された。長軸1.95m、短軸1.4mでⅡ類に分類した。深さは0.85mで、断面は方形に近い。

埋土中から82点の遺物を確認した。弥生土器が大半で、縄文土器5点と頁岩や砂岩、黒曜石の剥片等も出土した。そのうち、8点を図化した。

436～440は、甕である。436は口縁部から胴部までが残存し、口径は36cmを測る。やや膨らみをもつ胴部は口縁部でわずかに内湾する。口縁部外端に断面三角形の突帯を貼り付け、口唇部は幅広く、水平に仕上げる。胴部にも断面三角形の突帯を巡らす。いずれの突帯の頂部には細かい刻みを密に施す。内外面とも調整は基本的にナデで行う。部分的に胴部から口縁部までススが付着する。弥生時代前期後半の高橋Ⅱ式土器に比定できる。437は、胴部から底部が残存する。平底の底部から直線的に胴部へと立ち上がる器形をもつ。外面はミガキとナデで、内面はナデで器面調整を行う。外面の一部にはススが付着する。438・439・440は、平底の底部である。440は器面調整が粗いことから、古くなる可能性もある。

441は、壺である。頸部から胴部までが残り、屈曲部の内面には緩い稜をもつ。外面は5mm幅のミガキが丁寧に施され、全面に朱が塗られる。内面は、ナデ調整が行われる。

442は深鉢の口縁部で、口唇部の一部を欠損する。断面を三角形に肥厚させ、その上半には斜位の連続刺突を横位に巡らせ、「C」字状の押圧を横位に施す。また、下半には横位の沈線を3条施す。縄文時代後期の市来式土器である。

443は、磨敲石である。全面にわたって敲打痕があり、それ以外は磨面が残る。側面にリタッチも観察でき、各作業痕の切り合いから、敲石としての利用が最後と考えられる。

土坑15号 (第89・93図444～446)

D-27区のⅢ層、土坑14号の北西に隣接して検出された。長軸1.75m、短軸1.68mのⅠ類である。断面は、皿形を呈する。土坑内には4基のピットが検出されたが、いずれも近世のピットである。埋土は、主にⅡ層の黒褐色土が入り込む。

埋土内から出土した土器は、全て弥生土器片であった。この他に、黒曜石、頁岩、砂岩の剥片や礫が確認された。445は、自然科学分析を行った。遺物出土が遺構の南側に偏る傾向にあった。出土遺物の内、3点を掲載した。444は甕の胴部片で、断面三角形の突帯を貼り付け、細かい刻みを施す。器面調整はナデが施される。445は甕の底部片で、内面に炭化物が付着する。

446は、左脚を欠損する石罫である。調整剥離はやや

粗く、平面が非対称となる。

土坑16号 (第89・93図447・448)

D-25・26区、Ⅲ層で検出された。長軸1.33m、短軸1.12mを測る。床面には凹凸があるが、壁は緩やかに立ち上る。床面は北側が深く、最深部が0.32mであった。

埋土中からはまともな土器片と黒曜石のチップ・フレイクが出土した。447は、自然科学分析を行った。

447・448は、埋土の上部からまともな土器片が出土した。447は、自然科学分析を行った。

447は、胴部と口縁端部に刻み突帯を貼り付ける。口縁部突帯は平坦に仕上げるが、やや垂れる。内外面とも丁寧なナデで器面調整が行われる。弥生時代前期後半～中期にかけての土器と考えられる。448は447と同じような器形、胎土、焼成であるが、刻み突帯が口縁部だけに貼り付ける。口縁部突帯は平坦に仕上げるが、447よりもさらに垂れる。弥生時代中期の入れI式土器に比定できる。土坑17号 (第92・94図449)

D-25区、Ⅲ層で検出した。土坑16号の北西約3mに位置する。長軸1.04m、短軸0.91mの不定形な形状を呈する。床面は南側に向かって傾斜するが、断面はほぼ方形である。最深部は0.67mを測るが、床面近くでは湧水する。

埋土中から縄文土器と弥生土器が10数点ずつ、頁岩と砂岩の剥片が出土した。そのうち1点を掲載した。449は底部を欠損する浅鉢である。胴部で屈曲し、口唇部を外側につまみ出して折り曲げる。内外面ともナデで器面調整を行う。弥生時代前期前半の土器と考えられる。炭化物が付着し、自然科学分析を行った。

土坑18号 (第92・94図450～458)

D-24区、Ⅲ層で検出した。長軸1.91m、短軸1.5mでⅡ類に分類した。深さは0.3m程度であった。遺構の南側は溝状遺構4号と重複していることから検出面が低くなったことが考えられるが、詳細は不明である。

埋土からは縄文土器数点、黒曜石の剥片等が出土した。そのうち9点図化し掲載した。454は自然科学分析を行った。

450～453は、甕である。450は口唇部を幅広く平坦に仕上げ、外端に刻みをやや広い間隔で施す。451は口縁外端に突帯を貼り付けるもので、突帯の先端部は丸味をもち、刻みは施さない。外面にはススが付着する。内外面ともナデを施す。452は口縁部片で、その端部を短く外反させる。丸く取めた口唇部の外端に刻みを施す。内外面とも丁寧なナデを施す。外面にはススが付着する。453は平底の底部からあまり膨らみをもたずに立ち上がり、胴部上部から内湾する口縁部は端部で大きく外反し、口唇部には刻みが施される。また、胴屈曲部のやや上方に小振りの突帯を貼り付け、へら状工具で刻みを施すが、その痕跡が胴部にも部分的に及ぶ。口径23.3cm、

底径7.3cm、器高28cmを測る。内外面ともナデによる器面調整が丁寧に施される。胴部上半にススが付着する。出土状況から遺構が埋没する過程で廃棄されたと考えられる。弥生時代前期の板付Ⅱ式土器に比定できる。

454は、小型の鉢もしくは脚付鉢と考えられる。上げ底気味の底部をもつ。胴部から口縁部へはやや膨らみながら立ち上がる。全体的に器壁が厚く、重量感がある。内外面ともナデとミガキで器面調整を行う。内外面にススが付着している。455は内外面をナデとミガキで、丁寧に仕上げる浅鉢の口縁部である。

456は口縁端部を肥厚させ、外面に幅広い沈線を横位に施す。外面はナデ、内面は条痕による器面調整を行う。縄文時代後期の土器である。

457・458は、いずれも石織の未製品である。457は、左側縁と下縁に溝加工が見られる。458は、両側縁に連続した潤滑加工が見られる。

土坑19号 (第92・94図459・460)

D-21区、Ⅲ層で検出した。長軸0.48m、短軸0.32m、深さ0.1mでⅠ類に分類した。本土坑は土坑20号と平面的には重複するが、本土坑の床面は土坑20号の検出面より上位である。

土坑中央部に明確な加工痕のない軽石が3点と土器小片6点が出土した。軽石は15cm大、10cm大、5cm大のものであった。出土遺物の中で2点を図化した。459は、口縁部と胴部に突帯をもつ。口縁部に貼り付けた突帯の先端は欠損する。胴部の突帯は下向きに貼り付けられ、刻み目をもつ。460は壺の口縁部で、外反する。精製された胎土には1～2mmの小礫を含む。内外面とも光沢を残すほど丁寧に仕上げられる。

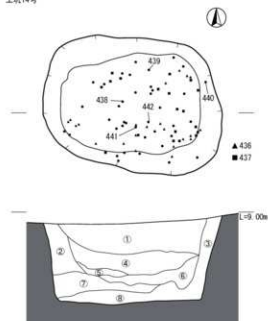
土坑20号 (第92・94図461～465)

D-21区Ⅲ層、土坑19号の下位に検出された。長軸1.73m、短軸1.58m、深さ0.35mを測り、Ⅰ類に分類した。遺構内から3基の柱穴が検出された。中央の柱穴は9cmと浅いが、東西の柱穴の埋土は中央の埋土と同じ黒褐色土であるが、やや黒色が強い。柱穴は掘り下途中で湧水し、下面については不確定な要素もある。東西で検出された柱穴はいずれも0.3mの深さをもつ。

埋土中から30数点の弥生土器、3点の縄文土器が出土し、5点を掲載した。461は、壺の外反する口縁部である。焼成は堅固で、内外面ともミガキが分かる。弥生時代に比定できる。462は、壺の肩部である。三角突帯を上下に貼り付けて巡らす。器面調整はナデで、丁寧に仕上げる。弥生時代中期に比定できる。463は、甕の底部である。平底の底部から緩やかに膨らみながら立ち上がる器形である。弥生時代の土器と考えられる。464は、壺の頸部付近と考えられる。幾何学文様が細沈線で施される。瀬戸内もしくは中国地方の土器と考えられる。

465は、断面三角形に肥厚させた口縁部に斜位の貝殻

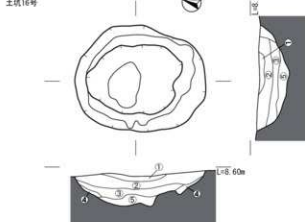
土坑14号



埋土

- ① 黒褐色土  $\phi$  5~20m次の灰白色バミスを含む。粘性がある。  
 ② 黒褐色土 黄褐色土を多く含む。  
 ③ 褐色土  $\phi$  2~3m次の明黄褐色のバミスを含む。粘性がある。  
 ④ 黒褐色土  $\phi$  3~5m次の棕色と黄褐色バミスをまばらに含む。炭化物を散見される。粘性がある。  
 ⑤ 黄褐色土 粘性のある黒色土を含む。砂質で粘性は弱い。  
 ⑥ 黒色土 黄褐色土をわずかに含む。粘性がある。  
 ⑦ 黒色土 褐色土を割程度含む。粘性がある。  
 ⑧ 黒色土 褐色土を多く含む。粘性がある。

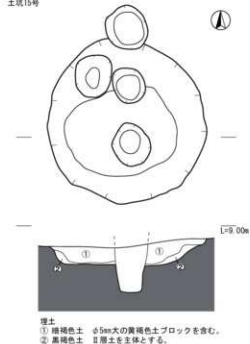
土坑15号



埋土

- ① 黒色土 しまり弱い。  
 ② 黒色土 粘性弱く、粘性はややある。  
 ③ 黒色土 しまり、粘性ともある。 $\phi$  5m次のアカホヤバミスを含む。  
 ④ 黒色土 しまり、粘性とも弱い。 $\phi$  1~10m次のアカホヤブロックを含む。  
 ⑤ 黒褐色土 しまり、粘性ともややある。 $\phi$  5m~10m次のアカホヤブロック多く含む。

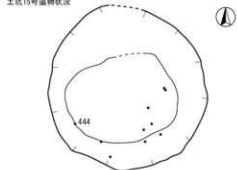
土坑16号



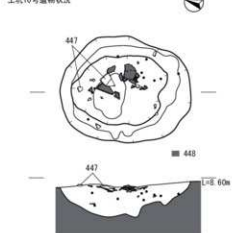
埋土

- ① 黒褐色土  $\phi$  5m次の黄褐色土ブロックを含む。  
 ② 黒褐色土 黒褐色土を主体とする。

土坑15号遺物状況

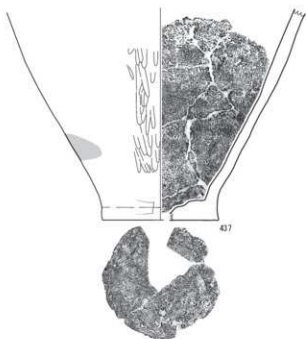
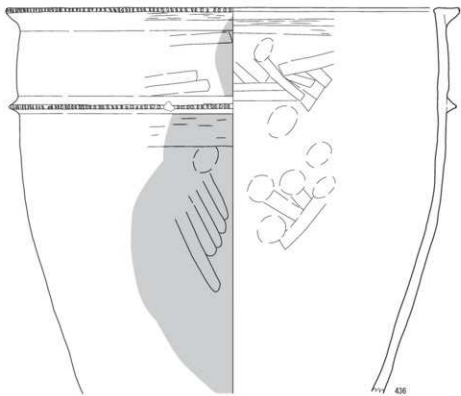


土坑16号遺物状況



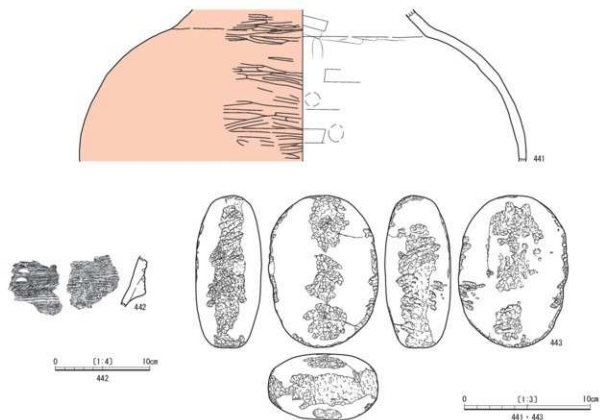
0 ( 1 : 40 ) 1m

第89図 土坑14~16号



0 [1-3] 10cm

第90圖 土坑14号出土遺物(1)



第91図 土坑14号出土遺物(2)

刺突と工具による連続刺突で文様を構成する。外面はナデ、内面は条痕とナデで器面調整を行う。縄文時代後期の市来式土器である。

土坑21号(第95・97図466・467)

C-21区、Ⅲ層で検出された。溝状遺構7号に切られるが、溝状遺構7号を挟んだ西側部分には検出されないことから土坑とした。残存部分で長軸1.94m、短軸1.02m、深さ0.23mを測る。全体の形状が不明なことからⅢ類とした。

埋土中から10数点の土器片と黒曜石、ホルンフェルスの剥片等が出土したが、2点を掲載する。466は浅鉢の胴部で、屈曲部直上の接合面で割られ、底部も欠損する。屈曲部内面には段差を設ける。内外面とも横方向のミガキが丁寧にはいる。縄文時代晩期の黒川式土器である。

467は、甕の底部片である。平底の底面には白色土が残り、接地面がやや張り出す。弥生時代の土器と考えられる。

土坑22号(第95・97図468・469)

B-20区、Ⅲ層で検出された。径0.63×0.61mの1類である。本遺構は竪穴建物跡5号の構築により削平を受け、さらに、竪穴建物跡5号に伴う柱穴p5が掘り込まれている。竪穴建物跡5号との位置関係については、第

87図に示した。切り合い関係から本遺構が竪穴建物跡5号より古いと考えられる。

埋土から土器片、砂岩の剥片、黒曜石が出土している。このうち、2点を図化した。468は、甕の口縁部である。刻目突帯を口縁外端に貼り付ける。内外面ともナデ調整が行われる。弥生時代前期に比定できる。469は内湾する口唇部に刻みを施し、内面にも沈線と曲線を描く。縄文時代後期の指宿式土器と考えられる。器種については小片のため詳細は不明であるが、皿の可能性もある。

土坑23号(第95図)

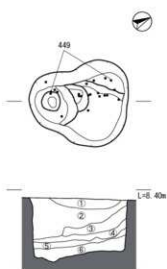
B-20区、Ⅲ層で検出された。竪穴建物跡5号に隣接し、柱穴5号に切られる。また、南側の一部はⅢ層検出のピットに切られている。残存する長軸、短軸も0.5mで深さは0.2mであった。

埋土中から土器小片が5点出土したが、図化は行っていない。1点は胴部片で刻目突帯を巡らすもので、弥生時代前期と考えられる。

土坑24号(第95・97図470～472)

B-19区、Ⅲ層で検出された。柱穴5号及び土坑25号とは切り合い関係にある。残存する長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.3mを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。柱穴5号に切られ、土坑25号を切る。

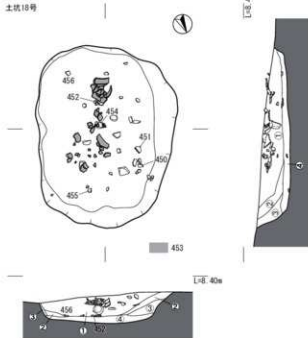
土坑17号



## 埋土

- ① 黒色土  $\phi$ 30cmの黄褐色パミスと灰白色パミスをまばらに含む。しまりがあり、粘性強い。
- ② 黒褐色土  $\phi$ 3~20cmの明褐色パミスと灰白色パミスをまばらに含む。しまりがあり、やや粘性がある。
- ③ 明褐色土  $\phi$ 15cm次の黄褐色土ブロックを含む。しまりがあり、やや粘性がある。
- ④ 黒色土 やや粘性がある。
- ⑤ 暗褐色土  $\phi$ 10cm次の黄褐色パミスや明褐色パミスを含む。所々10cm次の黄褐色土ブロックが見られる。しまりがあり、やや粘性がある。
- ⑥ 黒色土 湿と伝るがより粘性が強い。底部付近からは湧水がある。

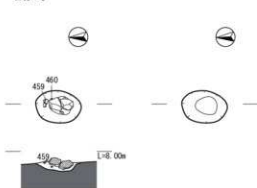
土坑18号



## 埋土

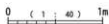
- ① 黒色土 しまりがあり、粘性がややある。 $\phi$ 5~20cm次の灰白色パミス含む。粘性がある。
- ② 黒褐色土  $\phi$ 10cm次のアカホヤ火山灰のブロックを少量含む。しまり、粘性弱い。
- ③ 暗褐色土  $\phi$ 1~5cm次のアカホヤ火山灰のブロックを多く含む。しまり、粘性とも①より強い。
- ④ 黒色土

土坑19号

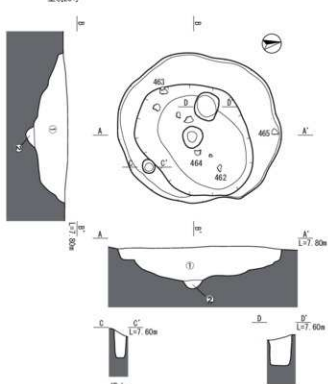


## 埋土

- ① 黒褐色土 しまりはあるが、粘性は弱い。



土坑20号



## 埋土

- ① 黒褐色土 細かい黄褐色の種小パミスを全体的に含む。しまりは強く、粘性は強い。
- ② 黒褐色土 ①のようには赤かはやが、黒色が強い。しまり、粘性ともある。

第92図 土坑17~20号